
魄、落つる

高原景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魄、落つる

【Nコード】

N7214N

【作者名】

高原景

【あらすじ】

魄が生まれる時、森が動く――

ある者は魄を神女と言い、ある者は鬼女と言う。

蟲使いのクジョウは、誰にも心を開かず生きていくと決めていた。だが、一人の青年、シンカゲとの出会いが、クジョウの全てを変えた。

心落ちて、心狂わせる――その先を知らず。

序章

クジヨウは足を止め、巨木の梢をすかして天空を仰いだ。空は一面淡い雲に覆われているが、吹く風に雨の兆しはない。風の匂いをかぐように、くん、とクジヨウは鼻を鳴らした。それに応えるように、足元できゅる、と鳴き声がする。突然立ち止まったクジヨウに、蟲がつぶらな瞳を向けていた。一見すれば栗鼠のように見えるだろう蟲に、クジヨウは笑みを向けた。

「もう少し行こう」

クジヨウが言うと、蟲はふっさりとした尾を振りたてて駆け出した。クジヨウは肩に担いだ荷物を軽く揺すり、再び樹海を進んだ。本格的に森に入る時とは違い、ごく軽微な装備である。夜までには森の外に出るつもりだった。

樹海の濃厚な色彩は、空気をも染めて辺りを満たしている。クジヨウは蟲の影を追いつながら、注意深く周囲を探った。

（やはり、森が動いたか）

予測していたことではあるが、予想以上に変化が大きい。少し前にこの場所に来た時には若木が多かった。だが、今は大人三人でも抱えきれぬ程の巨大な幹が目につく。森が動くこと自体は珍しくはなかったが、広範囲の木の成長を一気に促すような変化は珍しい。

（魄が、生まれたのか……）

思わずそう考え、クジヨウは自身の思考に顔を顰めた。数年に一度、森が大規模に動くことがある。そのような時に、決まって人は魄が生まれたのだと囁き合う。僅かに眼差しを下げたクジヨウは、ちち、という声にはっとする。蟲が四肢を踏ん張るようにして、体を膨らませていた。

「どうした」クジヨウは地面に膝をつくと、蟲の滑らかな背に触れた。蟲の警戒が指先から伝わってくる。どれほど深く蟲と繋がっていても、蟲が伝えるものを読み取るのは難しい。クジヨウは意識を

澄ませる。蟲の波動に自身のそれをあわせて目を閉じた。次第におぼろな像が脳裏に浮かびあがる。

何かが――地面の底を、奔っている。非常な勢いで……。それは縛れるように疾駆し、不意に地上へと湧きあがった。その力の余波に、森が蠢いた。ざわざわと梢を鳴らし、木々が天へと伸び上がる。幹がめりめりと膨張する。急激な変化に数本の木が地面にどう、と倒れる。

蟲が捉えた光景――凄まじいまでの森の変動は、蟲使いのクジヨウでさえ今まで目にしたことがないほどの規模だった。

と、その時、ずずんと大地が揺れた。蟲を通さずともわかるそれに、クジヨウは目を見開き立ち上がった。どうやら力の波はまだ続いているらしい。蟲がクジヨウの腕を駆けあがり、肩に蹲った。

「今日は帰った方がよさそうだな」

クジヨウは呟くと、踵を返した。またも、森が動いた。幸い距離があつたせいで巻き込まれることはなかったが、こつも森が不安定な状態では蟲使いといえども身の危険を感じる。やはり、とクジヨウは先程の思いを改めて抱く。

――やはり魄が生まれたのだ。

クジヨウは努めて表情を消すと、足早に森の外へと向かった。

街の大通りを、一人の青年が駆けていた。

夕暮れに染まる頃合いである。家路を辿る人々は、簡素な鍛練着で走り抜ける青年に好奇の目を注いだ。街の人々は、誰もが青年の名を知っていた。常ならば飄々と街を闊歩する彼が、今は脇目も振らぬ様子――これは珍しい。

「シンカゲ、えらく急いでいるじゃないか！」

露店の店仕舞いをしていた壮年の男が声をかける。青年は「ちょっとな」と一声、足を緩めることなく通り過ぎた。道端で一塊になった娘達が、小波のような嬌声を上げる。

シンカゲがカガリから呼び出しを受けたのは、剣術の鍛練の途中だった。衣服を改めなかったのはカガリの使者が彼に伝えた言葉のせいだったが、どうやら普段とは違う彼の姿もまた注目を集める原因のようだった。シンカゲは街の人々に見られることに抵抗はなかったが——カガリの身内であれば、いやでも見られることに慣れざるを得ないのだから——若い娘達が向ける秘密めかした含み笑いには、内心うんざりとした。

（何が可笑しい）

心中に毒づきながら、シンカゲはさらに足を速めた。彼は自身の容姿が娘達にとってどれほど魅力的であるかなど気にもしていない。それ以前に気付いてすらいないのだ。娘達にとっては、シンカゲの引き締まった長身も、無駄のないしなやかな体つきも、そして涼やかに精悍な顔立ちも、全てが魅力だろう。左頬の頬骨から耳と顎の丁度真中あたりへと斜めに走る傷跡さえ、顔立ちを損なうどころか鋭さを際立たせるものとなっていた。

日中露店の建ち並ぶ道は、既に閑散としている。漆喰の家壁は夕暮れの色を映し、柔らかな夜の気配が近い。シンカゲが向かう屋敷は、街のほぼ中心部にある。そのことが、自由都市リュウドウの實質的な支配者であるカガリの権勢を如実に示していた。

漸く屋敷に辿り着くと、シンカゲは門扉を走り抜けた。私兵が小さく会釈するのに片手を上げ、カガリが待つ部屋へと急いだ。階段を二段飛ばして駆け上がり、廊下の奥の扉を叩きもせずを開けた。

「早かったな」

面白がるように言ったのは、部屋の奥に佇む男、カガリである。歳は三十になるやならず、といったところ。短く刈り込んだ髪が四方八方に飛び跳ねているシンカゲとは対照的に、きっちりと撫でつけた黒髪が、男の端正な容貌を引き立てている。

「早く来いと言ったのはそっちだろう」

「その通りだ。それにしても早い」

僅かに笑みを含ませて言ったカガリだったが、すぐにその眼差し

は真剣なものとなった。

「お前に頼みたいことがあってな。すぐにハザカイに向かつてもらいたい」

「ハザカイ？」シンカゲは思わずカガリの言葉を遮る。「東の森の^{きわ}際じゃないか」

「ああ、そうだ。すぐに出てても着くのは明日の朝になるだろう」

「夜通し走れつてののか？」

シンカゲは呆れたように呟きながらも、カガリの落ち着いた声音の底に潜むものに気付いていた。

「一体何があつた？」

「ラザンに送っていた使者が、帰路森に吞まれた。使者はラザンからの密書を持っている。お前は使者達を探し出し、無事密書を私に届けてほしい」

シンカゲは目を見開いた。驚いた理由は幾つもある。だが、シンカゲは敢えてそれを口には出さず、最も無難な言葉を選んだ。

「蟲使いはつれていなかったのか？」

「無論、つれていた。だが、どうやら急激に森が動いたらしい。蟲使いの蟲が先程言葉を伝えて来た。森に吞まれ方向を見失った。自力で森を出ることは出来ない、とな」

ただ事ではない。森を渡るのに蟲使いの存在は必要不可欠だが、蟲使いとて万能ではない。そして蟲使いは蟲がいなければただの人である。それにも関わらず蟲を飛ばして危機を伝えてきたのならば、真実森に吞まれ出口を見失ったのだろう。

「蟲使いの言葉を伝えた蟲はどうした」

「消滅した。力尽きたのだろう」

それでは蟲使いも無事ではすまなかっただろう。それ程に、蟲使いと蟲の繋がり深い。

「今から向かうにしても蟲使いが必要だ。そんなに急激に森が動いたのなら……」

「信頼出来る蟲使いがない。蟲ならお前も持っているだろう」

シンカゲが顔を顰めるのにも構わず、カガリは続けた。

「蠱使いは無理だが、腕の立つ者を一人連れて行け。そうだな……スイレんあたりがいいだろう」

反駁しようとしたシンカゲは、しかし一つ溜息をついて言葉を呑み込んだ。カガリの表情から、シンカゲが何を言ってもカガリが意見を変えないだろうことはわかっていた。

「わかった。すぐに向かうから、蠱が伝えたいの場所を教えしてくれ。それと……アウユキの市場巡りに明日付き合うことになっていたから、無理になったと伝えておいてくれ」

カガリが途端に顔を歪めた。それにシンカゲはしてやったりと内心ほくそ笑んだ。何もかもカガリの言いなりというのは面白くない。アウユキの不機嫌の相手くらいはさせたいものだ。しょうがないな、とカガリは呟き、傍らの卓に置いていた小さな布袋をシンカゲに向かって投げた。受け取ると、ずしりと思い。路銀だろう。

「換え馬はいくらつかってもかまわん。ただし、事情はくれぐれも余人には悟られるな。蠱の伝言はすぐに渡すから、準備をしてこい」シンカゲは頷くと、部屋を後にした。

空を染め上げる紅が冷涼とした宵藍に沈む頃、リュウドウの街を二つの騎影が走り出た。一路東を目指してひた走るその姿は、ひたひたと押し迫る夜の帳の向こうへと消えた。

序章（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

「最果てに天深く」と並行して、無謀にも新しく「魄^{はく}、落つる」をはじめてしまいました。「最果て」は既に書いたものを投稿していますが、こちらはできたてはやはや、書けたものから投稿していきます。

「最果て」とは違う風味にしたい、と思い、書き手的には結構挑戦しているつもりです。「最果て」がどうしても文章量が多く流れが止まりがちなので、こちらは物語のペースをもう少しはやめて量的にも減らそうかな、と。ストーリー的には「最果て」ほど入り組んだものにはならないと思います。そして最大の難関、書き手が最も苦手とする「恋愛」をメインに据えています。ちゃんと「恋愛もの」になるんでしょうか。……不安。

物語の大筋だけ決めているので、この先どんな風に物語が動いていくのか、怖いような楽しみなような。結構さかのぼって修正することもあるので、大幅に修正した場合は、あらずじに入れてお知らせします。（もちろん、そんなことがない方がいいのですが……未熟な書き手でして、ご了承ください。）

何はともあれ、少しでも興味を持っていただけたら嬉しいです。
今後ともよろしく願います！

第一章

シンカゲがハザカイに着いたのは、空の端の闇が潤んだ頃合いだった。やがて、そこに仄かな朱が混じる。黒々とした森の影が、地平に昇っているだろう太陽の姿を隠しているが、熱度の低い光の束が遠く滲み、一日のはじまりを告げていた。

大陸の北部をあまねく覆う森は、その南端をハザカイの東まで伸ばしている。地図で見れば、黒々とした森の中程から、一部のみ南へと突出し、森全体がまるで一本の木を象っているかのような形をしている。

ラザンへの使者が森の中を敢えて通ったのは、森を避ければ、森の南端と接しリユウドウとは険悪な関係にあるセクトールを通らねばならないからだ。しっかりと準備をしていれば森に吞まれることは滅多にない。使者についていった蠱使いが優秀な使い手であることをシンカゲは知っていた。それにも関わらず、森に吞まれたということは、常になく大きな変動が起こっているということだろう。

シンカゲは森と、森の周囲に広がる草原を見渡した。人々は森の近くには住まない。森が外に向かって動くことはあまりないが、それでも傍近くに住めば、いつ森に吞み込まれるかわからないからである。ハザカイにも小さな街はあったが、森からは一里程離れている。そこに向かうべきか——シンカゲは迷っていた。カガリはシンカゲの蠱こを使えと言ったが、シンカゲは蠱使いとしては未熟だ。

シンカゲは馬の速度を落とし、傍らを進むスイレンに無言で視線を投げた。スイレンはシンカゲの問うような眼差しに、肩を竦め言い放った。

「行くしかないさ。あんたの蠱が頼りだからね」

頭の高い位置で一つに括ったスイレンの赤い髪が、彼女の動きにあわせて揺れる。それを見るときもなしに見ながら、シンカゲは苦く息をついた。ひゅっと鋭く息を吐く。それに応えてシンカゲの肩に

蠱が姿をあらわした。

シンカゲの蠱は鷹のような姿をしている。空を飛ぶ能力を有する蠱は珍しいと言われるが、シンカゲ自身はどうにも気ままな己の氣質を蠱が体現しているような気がしてならない。蠱使いに、本格的に修行をしないかとしきりに誘われたこともあるが、シンカゲは頑なに拒否していた。

「とりあえず、人の気配を探って来い」

命じれば、蠱は悠々と翼を広げ、前方に蹲る森へと飛んで行った。蠱使いが送って来た言葉だけでは、到底彼らがどこにいるかはわからなかった。無論、わかるような伝言が出来ていれば、そもそも森に吞まれなどしてないだろう。

「なかなか様になってるじゃないか」

スイレンの言葉に、シンカゲは唇を曲げただけで何も言わなかった。リウドウの自由兵士の中でも凄腕のスイレンは、シンカゲが子どもの頃、彼の剣の師匠だった。そのせいもあり、どうにも頭が上がない相手である。

蠱は半刻程でシンカゲの元へ戻って来た。腕に寄せ蠱の額に己の額をつける。そうすればより蠱の波動を受けやすくなる——シンカゲが幼い頃に発見した方法だった。だが、蠱が送る像はどれも曖昧で掴みどころがなかった。うねるような森の陰影に、シンカゲは船酔いしたような気分になり、額をばなす。

「どうだい？」

「さっぱりだめだ。まだ森全体がざわめいていて、俺の力ではとてもじゃないが人を探せそうにない」

「困ったね」さほど困ってもいないようなスイレンの声だった。無論、シンカゲもこうなってはとる手段は一つしかないとわかっていた。

「仕方がない。森際の街で蠱使いを雇おう」

シンカゲは言うつと馬首を巡らせた。蠱は一度身震いすると、シンカゲの肩にとまり姿を消した。

最も森に近い街は、小さいながらもよく整えられていた。リュウドウとセクトール、そしてラザンの真中にあり、人と物の通行が盛んなのだろう。宿屋や飲食店が目につく。

シンカゲは目指す建物をすぐに見つけた。街の入り口に程近い位置に、大きな看板がある。森に程近い街には必ずあるそれは、蠱使いに仕事の斡旋を行う口入屋だ。早朝にも関わらず、口入屋の扉は既に開いていた。表に馬を繋ぎ、シンカゲとスイレンは建物の中へと踏み込んだ。

口入屋の主人は老年に差し掛かった小柄な男だった。背を屈めて何やら記帳している。シンカゲとスイレンの足音に顔を上げると、どこか猫を思わせる仕草で手を組んだ。

「いらつしゃいまし。何か御希望ですか」

「蠱使いを紹介してほしい」

へ、と男は大げさに目を見開いてみせた。

「今は森がかなり動いております、出来ますれば日をずらした方がよろしいかと……」

「ラザンへ向かっていた商人の一行が森に吞まれたとの情報があつてね、蠱使いが蠱を飛ばして来た。放っておいたら森の中で命を落としかねない」

「それはまた難儀で……。確かに最近森の動きが激しくて、皆不安がつておりますよ」

男はスイレンの話に疑問を抱いた様子はなかった。ぱらぱらと帳面を繰って何やらぶつぶつと呟いていたが、はたと顔を上げた。

「ああ、丁度良い者がおりますよ。毎朝ここに来るので、もうすぐ来ると思います。その者に頼みましょう」

「優秀か？」

「ええ、それは勿論。まだ若いが、なかなか大したもの。名前は……ええと……」

再び忙しなく帳面を繰る姿に、シンカゲは目を細めた。

「親父、適当なことを言ってもらっては困るな。その蠱使いについてさほど知らないんじゃないのか？ 俺達は確実に森を渡れる蠱使いが必要なんだ」

「へ……それは勿論、誰しもそうでございます。ああ、そうさうだ、クジヨウです、クジヨウ」

ずい、と近付いたシンカゲに、男はびくりと体を竦ませた。

「いやはや、クジヨウはまだこの地に来たばかりでね。でも優秀なのは保証いたしますよ」

今度はスイレんが脅すように腰の剣に手を置いた。男は益々身を縮める。

その時背後から声が響いた。

「そこまでにしなよ。嘘は言っていない。俺はそこの蠱使いよりよほど優秀だよ」

シンカゲとスイレんは戸口を振り返った。そこに一人の少年が立っていた。無造作に伸びた前髪のせいで顔立ちが些か掴みづらいが、どう見ても十代半ばだ。背はシンカゲよりも頭一つ下といったところ。前髪と同様に伸ばしっぱなしといった風情の後ろ髪を一つに括り、衣服は蠱使い特有の厚手の布をふんだんに重ねたものだった。背囊を一つ背負い、頑丈な靴を履いている姿は、いつでも森に入れそうだった。

「俺がクジヨウだ。表で聞いてたけど、あんた達、森の中に探し人があるんだって？」

凝視する二人には構わず、クジヨウが近付いて来る。褐色の肌はもともとの色か、それともよく陽に焼けているせいか、シンカゲにはわからなかった。瞳は黒と灰の半ば、漆黒の髪と相まって全体に影を纏うかのような印象があった。

「今は森が不安定だからね、本当は入らない方がいい。でも、急ぎなんだろう？」

「ああ、そうだ。蠱使いが蠱を送ってきたが、蠱そのものが消えてしまつて、商人連中がどこにいるかが全くわからん」

「蠱が消えた？」

ふとクジヨウの顔が曇った。「可哀想に……」あるかなしかの声でぼつりと呟き、次いで低く口笛のような音を出した。するとクジヨウの肩にくるりと小さな蠱が姿をあらわした。姿は栗鼠に似ているが、その毛並みは茶色ではなく柔らかな金だった。

「これが俺の蠱だ」

言っと、クジヨウは腰に手をあてて二人を見上げた。

「突っ立ってないで、俺に依頼するかどうか早く決めてくれないか？」

シンカゲはスイレンと素早く眼差しを交わし合う。

「わかった。お前に頼もう。俺達はすぐにでも森に入りたい。出来るか？」

「ああ、大丈夫だよ」

クジヨウは言っと、口入屋に顔を振り向けた。「おじさん、俺この人達と行って来るから。後払いでいいよね？」男はこくこくと頷く。どうやら二人の客が立ち去ることが余程嬉しいらしい。シンカゲとスイレンはクジヨウに続いて建物の外に出た。

眩しい光の中で、シンカゲは目の前の背中を見やった。クジヨウはくるりと振り返り、シンカゲに向き直る。背の半ばまである黒髪が、躍動的に流れた。

「そうだ、あんた達の名前、教えてほしいんだけど」

一瞬口ごもり、シンカゲは答えた。

「俺はムラセだ」

スイレンがちらりとシンカゲを見やる。ムラセは鍛練仲間の自由兵士の名だ。

「あたしはスイレンだよ。よろしく、クジヨウ」

クジヨウはにこりと笑った。

「ムラセとスイレンね。じゃあ、森に行こうか」

クジヨウは森の際で背後を振り返った。ムラセとスイレ、そんな乗った二人は眼前に迫る森を見上げどこか緊張した面持ちである。「じゃ、行くよ。いいね？」問えば二人は同時に頷いた。

クジヨウは蟲に舌を鳴らす。意図を察して蟲が森の中へと駆けこんだ。その姿がすぐに空気に溶けるようにして消えた。本来の姿の方が、動物の形を象っているよりも動きは数倍早い。もっとも、蟲にそのような動きをさせることが出来る蟲使いはさほど多くはない。ムラセとスイレが僅かに驚いた気配を見せたが、クジヨウは気付かぬ振りで森の中へと入った。

先導して樹陰を歩きながら、クジヨウは背後への注意も怠らなかつた。森の中で蟲使いに危害を加えるような者はいないだろうが、二人が如何にも自然に腰に差す剣のせいで、常になく神経質になっていた。

ムラセと名乗った方はまだ年若い。二十歳前後といったところだろう。黒髪を短く刈り、顔立ちは精悍な中にも華やかさがある。微笑めばさぞかし甘いものになるだろう。だが左頬に走る一条の傷と、決して溶けることのない氷を思わせる薄い青の瞳、そして何より常に何かを見定めようとしているかのような表情が、硬質な印象を与える。

一方スイレはまるで炎を思わせるような女性だ。一つ括りにした長く赤い髪のせいもあるが、ムラセと並ぶ程の長身といい、柔らかな曲線を描きながらも鍛え抜かれた体つきといい、少なからず武術を修める女性を見て来たクジヨウには、彼女がかなりの凄腕であろうことがわかった。おそらく三十は超えているだろう。あけつぴろげな笑顔は親しみやすいが、茶色の瞳は笑っていない。クジヨウの一挙一動を逃さず捉えている。

森に吞まれた商人の一行を助けたいと言う、その依頼自体はよく

ある部類のものだ。盗賊を避けるために敢えて森を渡る商人は珍しくない。商人の一行についていた蠱使いが同じ傭兵組織に属する者だと言われれば、如何にも兵士然とした彼らが訪れたのも理解が出来る。それでも警戒を解くことが出来ないのは、二人が醸し出す張り詰めた空気のせいもあった。

（まあ、どのような事情があろうと、俺に関わりはないが）

クジヨウは内心に呟くと足を速めた。蠱の気配は遠い。探し人はよほど森の深くに吞まれたのだろう。いまだ鳴動を続ける森は、奥にいくほどに危険だ。クジヨウは余計な思いを振り払い、滴るような緑の奥底に意識を集中した。

シンカゲは巨木の群れに目を凝らしていた。梢は幾層にも重なり、見上げればまるで緑の天井だ。春先の色彩としては、些か鮮やか過ぎるように感じられた。森に入ったことは何度もある。だが、これほどまでに森の動きが激しい時に、奥まで入り込んだことはなかった。自然と身構える心地になる。

前を行くクジヨウの歩みに迷いはない。クジヨウが己を優秀と評したその言葉に、偽りはなかったようだ。魄^{はく}の力を受けた森の木から蠱は生まれると言われる。その蠱と繋がり己のものとするのは、少なからずの者が出来る。だが、蠱使いとして蠱を使いこなすことが出来る者は限られ、蠱を本来の姿である不可視の力として操ることが出来る者はさらに少ない。

聞けばクジヨウは十六だという。今まで出会った蠱使いの中でも最も若い。将来は一流の蠱使いになるだろう。無論、今とて能力の高さは疑うべくもないが、不審な二人連れの依頼を迷うことなく引き受けるあたりに、経験が浅いが故の危うさを感じるシンカゲである。時に森よりも危険な存在——それが人である。

いらぬことに巻き込んでしまったと、苦く思う。極秘の仕事に、本来ならば他者を関わらせたくはなかった。だが森の動きが激しい

時に、彼らだけではどうすることも出来なかった。

今は使者達を救い出すことだけを考えなければならない。シンカゲは己に言い聞かせた。リュウドウまで蠱を飛ばした蠱使いの安否が、特に気にかかっていた。

（無事でいてくれ）

幾度目かの言葉を、シンカゲは心中に呟いた。

蠱が姿をあらわしたのは、二刻程黙々と歩き続けた後だった。

蠱の波動を読み取ったクジヨウの話では、人の気配が掴めたという。それに安堵した二人だったが、蠱が示した先に進むのは容易ではなかった。常にない大規模の森の動きに、森そのものが荒れていたのである。そこで巨木が倒れ、傾いた木々も多い。何時倒れるかもわからぬそこを回避すると、倍以上の距離を歩く破目になった。それに加え、いまだ森の変動は続いているらしい。森が動くたびに歩みを止めざるを得ず、進む速度は遅くなる。

結局その日のうちに目指す場所へは辿り着けず、夜陰を進む危険も考えあわせて彼らは野宿をすることにした。万が一を考え、三人ともに十分な装備を整えていたため、野営には何ら支障はなかった。火を熾し、携帯食料で簡単な食事をすませれば、後は寝るばかりである。クジヨウは炎が爆ぜる音を聞きながら、目の前の二人を見るときもなしに眺めていた。

すぐには眠る気になれぬのか、スイレンは剣の手入れをはじめ、ムラセは何を思うのか地面を見詰めている。と、ムラセの視線がクジヨウへと向けられた。瞳に、炎の揺らぎが映り込んでいる。

「今回のような森の変動はよくあることなのか？」

「いや、そうはないと思う。俺もこれだけ大規模に森が動いているのを見るのはじめてだ」

「ハザカイに来たのは最近だと聞いたが、今までは別の場所にいたのか？」

クジヨウは咄嗟に答えかねる。依頼を離れ、個人的なことを聞かれるとは思っていなかったのだ。その思いを表情から読んだのか、ムラセが眼差しを逸らした。「答えたくなければ、答えなくていいらんことを聞いたな」

「いいよ、別に。今までは蠱使いの修行で北の方にいたんだ。でも師匠から漸くお墨付きがもらえてね、それで仕事を探して出て来たってわけ。ここらは森が頻繁に動くから、蠱使いは仕事にあぶれないと聞いたんだ」

若い蠱使いにはなかなか大きな仕事は回らない。土地の有力者が蠱使いを抱えることもよくあることだが、多くは年経た経験深い蠱使いが選ばれる。もつとも、クジヨウは誰かの専属になるつもりなど毛頭なかった。この土地にも長く留まるつもりはない。そうせねばならぬ事情があるからだけではなく、心情的に一所に落ち着く気持ちはなれなかった。長く居続ければ、それだけ人と関わらねばならない。人と深く接することは避けたかった。

「魄が生まれたと思うかい？」

スイレンの言葉だった。クジヨウは僅かに言葉に詰まる。ムラセが鋭い視線を注いでいるのを意識し、答えた。

「多分、生まれたんだと思う」

さらに躊躇い、クジヨウは己でも意外な問いを発していた。

「魄を見たことがあるか？」

スイレンがちらりとムラセを見やり、「あたしはないね」と一言、続く沈黙を埋めるように焚き火に枯れ枝を放り込んだ。

「一度だけある」

ムラセが言ったのは、さらに時が経ってからだった。その冷たく硬質な響きに、クジヨウは言葉の接ぎ穂を失った。ムラセはそれ以上話す気にはなれぬのか、地面に横になった。感情の読めぬムラセの横顔を暫し見詰め、クジヨウも体を横たえ外套を被った。

眠りはなかなか訪れなかった。スイレンが剣を手入れする音が微かに響き、気配からムラセも眠っていないのがわかった。どうにも

落ち着かないとクジヨウは思い、ふと惑いを覚えた。眠れないのは、奇妙な二人連れのせいばかりではない。では何故——考える程に惑いは大きくなるばかりだった。

——無論、魄が生まれたからだ。それ以外に理由などなからう。クジヨウは己に刻みつけるようにそう思う。

岐^きが覚醒し、魄^きが生まれる。その度に、人は魄を得んがために争いを繰り返した。流された血に、魄への憎しみも増した。森は魄の砦——魄を求める者からも、魄を厭う者からも身を守るための、いわば鎧であり、剣だ。

聞くのではなかった。不意にクジヨウは思う。魄を見たことがあるかなどと、普段ならば決して問わぬことを何故口にしてしまったのか。その瞬間の、ムラセの凍るような瞳の色が脳裏に焼き付いていた。

（明日で依頼も終わりだ）

無性に一人になったかった。クジヨウは無理矢理目を瞑る。瞼に炎の色彩が滲んでいた。

3（後書き）

情報は小出しに、でも少しずつ背景がわかるようにしたいです。
このペースでこれからも続けたいのですが、いつ躓くことやら。
どうか、お付き合ってください。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

翌朝、まだ薄暗いうちから三人は起き出した。

クジヨウは大きく伸びをし、いつもの癖で左耳の耳飾りに触れた。輪状のそれは黒く、飾りというには小さ過ぎるかもしれない。黒髪に隠されて、傍からは気付かれぬくらいである。

朝食はひんやりとした空気の中、誰もが言葉少なかった。

三人は早々に出発した。蟲に走らせ先を急ぐ。木の間から覗く空の、いまだ薄暗闇に沈むそこに、分厚い乱雲が犇めいている。天候が崩れそうだった。

二日目の行程は、一日目程難儀ではなかった。運良く森が変動した区域から外れていたため、一度も足を止めることなく、昼前には目的の場所まで近付くことが出来た。目的の場所はさすがに森の變化が激しい。次第に巨木が増え、そればかりではなく新たに芽吹いた若木が辺りを覆っている。自然に生えたものならば、自ずと淘汰が進むだろう。だが、急激な力の余波で生まれた木々は鬱蒼と空間を埋め尽くし、クジヨウ達の歩みを遅らせた。吹く風に湿った匂いが混ざる。濃密な命の気配だ。

クジヨウは蟲を呼んだ。蟲は姿をあらわすと澄んだ瞳をクジヨウに向けた。

「道を示してくれ」言えば、短く鳴いて駆け出した。クジヨウはその後を辿る。ムラセとスイレンも足を速めて追って来た。

木々の帳を潜り抜け、いくつかの倒木を避けて、クジヨウ達は漸く目指す姿を視界に捉えることが出来た。木々に囲まれて僅かに開けた場所に、蹲るようにして座り込む男達の姿があった。男達は全てで三人——否、四人だ。一人は地面に横たえられて、顔の上にまで布がかけられていた。

「だめだったか……」

ムラセが呟くのが聞こえた。痛みの籠る声音だった。

下草を踏み分ける音に一人が顔を上げ、クジヨウの姿を認めて目を見開いた。喜び——その眼差しがクジヨウの背後に続く者へと向けられ、見開かれた。驚愕したように何事かを言いかける、それを遮るようにスイレんが言った。

「迎えに来た。もう大丈夫だ！」

蹲る他の者達も顔を上げた。疲労の色濃い顔のどれにも、喜びと驚きがある。ムラセが木々の間から歩み出ると、全員が立ち上がった。クジヨウは腕を組んでその光景を見守った。微かな違和感が胸中に生じる。

依頼の内容は森に吞まれた商人と蠱使いを探したい、というもの。蠱使いが、ムラセとスイレんが属している傭兵組織の者であるとすれば、他の者達は商人の筈だ。だが、彼らは商人には見えなかった。加えて彼らの様子である。助かった、という喜びよりも、驚きの方が大きいようだった。特にムラセとスイレんの姿を見た時の表情が気になっていた。彼らは初対面ではないのだろうか。ムラセは低い声で男に何事かを言っている。

ふと視線を感じてクジヨウは顔を巡らせた。スイレんが探るような眼差しをクジヨウに注いでいる。クジヨウはスイレんから目を逸らした。不審に思っていることを読み取られるような顔はしていない筈だ。

クジヨウは腕を解き、布をかけられている人物へと近付いた。地面に膝をつき布を捲ると、蒼褪めた死に顔があった。眉間に深い皺が刻まれている。壮年の男の、それは蠱使いとしての厳しい生涯をあらわしているのか、それとも死ぬ間際の苦悶を示しているのか、クジヨウにはわからなかった。

木から生まれた蠱は、宿るものがなければ力を保つことが出来ない。蠱使いになるということはすなわち、蠱の宿り木になる、ということだ。蠱使いは蠱を走らせて森を探索するが、それにも限界がある。宿り木から遠く離れた蠱は、力を失い自然と消滅する。おそらくこの蠱使いは己の命を削り、遠い距離を蠱に走らせたのだろう。

足音に、クジヨウは振り返った。ムラセが蠱使いの亡骸を見詰めていた。

「埋葬しよう」

森で命を落とした者は森に眠る。それが蠱使いの掟であり、最上の敬意の表し方だった。クジヨウは小さく頷いた。

蠱使いを丁重に埋葬し、総勢六人となった彼らは森の外を目指して歩き出した。一様に無言で進む彼らの顔を、クジヨウは努めて見ないようにしていた。

どうやら依頼の内容は全て真実ではないらしい、というのがクジヨウの考えだったが、それを言ってどうなるものでもない。それどころか、言えばこちらの身が危ないかもしれないとすら思う。そう思わせるほどに、誰もが厳しい気配を纏っていた。

行きしなは強引に最短距離を進んだため困難な行程となったが、帰りは経路を選ぶことが出来る。なるべく早くに森から出たい、という彼らの要望を聞き入れ、最も距離の近い経路を辿った。ハザカイよりも大分北になるが、夜までには森から出ることが出来そう。それをクジヨウが伝えると、漸く皆の緊張が緩んだ。

晴天であっても光の射さぬ森の中、曇天であれば尚更に影が濃く、日中とは思えぬ暗さである。木々の葉をすり抜けて大粒の水滴が落ちて来たのは夕刻、森の出口が数里先に迫った頃だった。よほどの驟雨なのか、分厚い緑を突き破り、雨は降り注いだ。次第にぬかるむ地面に歩みを鈍らされるが、森の出口が近付き、やがて肉眼で捉えられるようになると歩調が早まった。

何とも奇妙なこの依頼も、漸く終えることが出来そう。クジヨウがそう思った時だった。肩の上で蠱が怯えたような鳴き声をあげた。唐突に一つの像が蠱から流れ込む。纏れ合う力が大地を奔っている。何処へ、と思いクジヨウは息を呑んだ。力の波は、まさにこの場所へと向かっている。

「森が動く！ 走れ！」

クジヨウの言葉に、全員が弾かれたように駆け出した。森の出口はすぐそこだ。この距離ならば間に合う。全力で駆けながらクジヨウは思う。ずん、と地面が揺れた。それに、前を走る男がつのめするようにして倒れた。男が担いでいた袋が投げ出される。クジヨウは駆け寄ると男を助け起こした。次いで袋を担ぐと、叫んだ。

「早く森の外に出るんだ！ もうすぐ来るぞ！」

男の顔に紛れもない恐怖が浮かび、脱兎のごとく駆け出した。クジヨウもその後を追う。既に森を出たスイレンとムラセの姿が見えた。他の者も全員間に合いそうだ。クジヨウは安堵する。と、再び大地が鳴動した。常ならば体勢を崩すことはないが、ぬかるんだ地面に足を取られ、クジヨウは地面に倒れ込んだ。

倒れたまま、何かが地中から湧き出すのを、クジヨウは感じた。

呼応して、森が動いた。木々が揺れる。幹が膨張し、枝が伸びる。膨れ上がる勢いのまま、木と木がぶつかり合う。鋭い音を響かせて、数歩も離れていない位置に折れた枝が落ちた。クジヨウは必死に立ち上がる。だが、急激に張った根に地面がうねり、歩くこともままならなかった。

地面を突き破って幾本もの若木が伸び上がる。ぎぎぎ、と不気味な音が響き、クジヨウははっとする。大地の揺れと突然の変動に耐えられなかった木々が、一斉に倒れようとしている。ずうん、と音をたて、芽吹いたばかりの若木を押しつぶして巨木が倒れた。振動と衝撃にクジヨウは再び地面に投げ出された。さらに一本、背後で地響きをたてて木が倒れた。その幹がクジヨウの傍らの巨木にぶつかる。ゆっくりと、巨木が己に向かって傾ぐのを、クジヨウは見詰めていた。

（——だめだ！！）

叫ぶことも出来ず、クジヨウは死を覚悟する。その視界に、倒れる木々の間を駆け抜けて向かって来るムラセの姿が映った。

走る勢いのまま、ムラセがクジヨウに腕を伸ばした。体が浮き上

がる。そのまま引き寄せられてクジヨウはしなやかな温もりに包まれていた。思わずクジヨウは目を閉じる。倒れ来る幹の下を、クジヨウを抱き上げてムラセはすり抜けた。

衝撃が重なる。それを遠く聞いて、クジヨウは強張っていた体から力を抜いた。恐る恐る目を開くと、間近にムラセの顔があった。クジヨウの体を抱き込むようにして一本の木の根元に膝をついている。

「この木は大丈夫のようだな」

ムラセの声音は落ち着いていた。クジヨウは木を見上げ、無言で頷いた。ぎしぎしと成長を続ける音は聞こえるが、間近に大きな木がないため安定している。倒れることはないだろう。クジヨウは先程まで己がいた場所を見やった。折り重なるようにして数本の巨木が倒れていた。

「ありがとう」

呟くクジヨウにムラセは小さく頷いた。ムラセが戻って来てクジヨウをあの場合から連れ出してくれなかったら、クジヨウは今頃死んでいただろう。なおもクジヨウを守るように抱き締めるムラセの、その鼓動が近い。

森が動いたのは時間にして数十秒だったろう。だが、クジヨウには永劫にも思えた。漸く全てが静まっても、クジヨウは暫く動くことが出来なかった。

「歩けるか？」

気遣うようなムラセの言葉に、クジヨウは頷いた。「よし」とムラセは呟くと、立ち上がりクジヨウに手を差し伸べた。僅かに居心地の悪い思いを抱きながらも、クジヨウはムラセの手を取って立ち上がる。その拍子に、担いでいた袋が地面に落ちた。倒れた男の持っていた物だ。拾い上げると、結び目が解けたのか、中身が地面に零れ落ちた。

慌ててクジヨウは零れた荷物を袋に入れる。その手がふと止まった。衣服や雑用に必要な小物に混じって、白い封筒があった。上質

な紙をふんだんに使い、金の細工が施されている。封蝋の上には、くつきりと印が押されていた。何かの紋章——そこまで見て取り、クジヨウは顔を上げた。ムラセが厳しい表情で封筒を見詰めていた。その視線がクジヨウに向けられた。

ムラセの眼差しに、まだ体に残っていた温もりが、ずっとクジヨウから遠ざかる。クジヨウはゆっくりと封筒から手を引いた。熱を感じさせないムラセの瞳が、その動きを追う。

凍りついたような数瞬の後、突然ムラセが動いた。封筒を拾い上げると袋の中に放り込む。クジヨウが呆気に取られる程の無造作な動きだった。他の荷物も袋に入れ、それを肩に担ぎあげたムラセは、クジヨウを見下ろして言った。

「お前は何も見なかった。わかったな」

有無を言わせぬ口調である。厳しい表情は変わらないが、眼差しは真摯だった。クジヨウは小さく頷いた。

「森から出よう」

歩き出すムラセの後をクジヨウは追った。不可解な思いは消えない。だが、ムラセに問うことは出来なかった。

「問題はスイレンだな」

「え？」

何やら憂鬱そうに溜息を一つ零し、ムラセはちらりとクジヨウを振り返った。

「お前、死にたくはないだろう？」

何とも奇妙な問いである。だが、ムラセにふざけているような気配は欠片もない。

「死にたくなければ、これから何が起ころうと口を開かず、俺の言う通りにするんだ」

「どういうことだよ」

ムラセは答えぬまま、森の外へと踏み出していく。続いて外界へと出たクジヨウはその場で凍りついた。

男達がねめつけるようにしてクジヨウを見詰めていた。その中心

で、スイレンが抜き身の剣を掲げている。その切先が、真直ぐにク
ジョウへと向けられた。スイレンが低い声音で言った。
「悪いね、坊や。あたしはあんたを殺さなきゃならない」

4（後書き）

ん?? 恋愛にならない?? ええ、すぐにはなりません。

この物語は、「物語的な面白さ」、「物語的作為」をふんだんに盛り込もうと意図しています。「最果てに天深く」ではそういう部分を敢えて排しているのですが、こちらは思い切り入れるつもりです。

次もはやめに更新できたらな、と思っています。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

シンカゲはクジヨウへと剣の切先を向けるスイレンの姿に、苦い思いを抑えることが出来なかった。やはり、という思いである。カガリのことだ。スイレンに事前に言い含めていたに違いない。シンカゲの蠱こで使者達を見つけ出すことが出来ない時——無論、そうなる可能性が高いことはカガリも先刻承知だろう——かわりに雇った蠱使いを始末するように、と。例え依頼が偽りであることを知られずとも、カガリが少しでも危険な芽を残しておくとは思えない。

シンカゲはクジヨウを窺った。なおも降り続く雨に全身濡れそぼりながら、立ち尽くしている。黒髪が張り付いた頬は青ざめ、見開いた目ばかりが暗く大きく見えた。

「どうして俺を殺すんだ？」

「坊やに理由はないよ。あたしらに理由があるんだ」

優しい気ですらあるスイレンの声に、シンカゲは眉を潜めた。このような声を出す時、スイレンは本気だ。

「スイレン、やめろ」シンカゲは厳しく言うと、剣の前に立ちはだかった。

「どきなよ。あんたもわかってる筈だ。あたしらに関わった者を生かしておくわけにはいかない。秘密を守るために必要なことだ。あんたが、その子を森から救い出したりしなければ良かったんだけどね。あたしも、こんなことに剣を使いたくはない」

「カガリやあんたがどう思おうと、俺はクジヨウを殺させるつもりはない。クジヨウは何も知らないんだ」

もつとも、とシンカゲは皮肉に続けた。

「このようなことをしてしまった後では、もう遅いが」

「そういうこと。どちらにせよ、取る道は一つしかないのさ。シンカゲ、どきな」

「取る道は他にもある」

スイレんが訝しげに目を細めるのを見ながら、シンカゲは深く息を吸った。一つは己を落ち着かせるため、一つは迷いを振り切るために。

「クジョウをリュウドウに連れて行く」

背後で息を呑む気配がした。何も言うな、とシンカゲは心中でクジョウに呼びかける。無論、蟲のように意思を伝えあうことなど出来はしないのだが。

「馬鹿を言うんじゃないよ。その坊やを連れ帰るだって!？」

「ああ、そうだ。俺達には新たな蟲使いが必要だ。クジョウならば能力的にも問題はない。それに、そうすればスイレんが……いや、カガリが懸念するようなことが起きる恐れはない」

「あんた……」

スイレんは口を噤むと、シンカゲを凝視した。と、不意に笑い出す。

「なるほど、そうきたか。さすがにカガリ仕込みだね。悪知恵が働く」

「褒められた気がしないんだがな」

「褒めているんだよ。素直に喜びな。力自慢の馬鹿男なら掃いて捨てる程いる。あんたがそうならないか、少し心配していたところだ」

シンカゲは感情を抑えてスイレんを見やる。ここでスイレんの言葉に反応してはいけけない。彼女はシンカゲを試しているのだ。どれ程の考えでいるのか。子どもじみた反応をすれば、全て無意味になりかねない。

無言の対峙に、張り詰めた緊張が高まっていく。スイレんの背後では、男達が事の成り行きを固唾を飲んで見守っていた。スイレんが唇を引き上げる。諦めでも是認でもない笑みだ。

「あんたの好きにな、シンカゲ。でもね、その坊やが少しでも不審な行動を見せたら、容赦はしないよ」

「ああ」

スイレんは素早く剣を鞘にしまった。その表情に過ったのは苛立

ちだけではなかった。口でどう言おうと、彼女とてこのような殺しは不本意な筈だ。

シンカゲはクジヨウを振り返った。立ち尽くす姿が、ひどくほっそりとして見えた。そういえば抱き上げた体は軽かった。厚い布を通してわかる程に、クジヨウは華奢だった。だが、裏腹にシンカゲを見詰める瞳は強い。戸惑いと、怒りとを緋い交ぜにして、シンカゲを凝視している。

「クジヨウ、俺達とともにリュウドウに来てくれ」

「俺は依頼の内容も、見たことも、誰かに漏らすようなことはしない。そう誓っても、一緒に行かなければ俺は殺されるのか？」

それに、シンカゲは頷いた。クジヨウの声が震えた。

「それでは虜囚と同じだ」

「そうだ。だが、お前が信じるに足る人間だと示すことが出来れば、いずれは自由になれることを保障する」

「自由……か」

鋭い皮肉が凝っていた。翳りを帯びた響きに、シンカゲはクジヨウを見やる。クジヨウは半ば目を伏せていた。シンカゲを見ることがなく、ぽつりと言った。

「わかった。あんた達と一緒に行くよ」

「すまん」

「謝るくらいなら、いつそ俺を殺せばいい。森に置き去りにすればよかったんだ」

シンカゲはそれに答えることが出来なかった。クジヨウが眼差しを上げる。薄墨の澄んだ瞳が、シンカゲを捉えた。クジヨウの長い髪から滴が落ちる。涙のようなそれを、シンカゲは不思議な心地で見ている。強さと裏腹な儂さがある。

「偽りの名前より、真実の名前の方があんたに似合ってるよ。シンカゲ」

密やかにクジヨウが言った。

カガリの使者は急ぎリュウドウへと向かい、シンカゲとスイレン、そしてクジヨウは一旦ハザカイの街へと戻った。

口入屋の主人は森の際にまで迫った変動を知っていたらしい。三人がそれに巻き込まれたことを知ると、驚くやら無事を喜ぶやら忙しない。蠱使いへの報酬の四割が口入屋の取り分である。だが、クジヨウはシンカゲからの代金の全てを男に渡した。

「俺、この人達に雇われて一緒に行くんだ。今まで世話になったお礼だよ、おじさん」

クジヨウの言葉に、シンカゲは複雑な心地になった。言葉の通りなのか、それともシンカゲからの金を受け取りたくなかったのか——嫌悪されても仕方がないほどのことをクジヨウに強いているという自覚がシンカゲにはあった。

リュウドウに連れて行き、蠱使いとして雇い入れる。そう言えば聞こえはいい。だがシンカゲ達がクジヨウに突きつけたのは、自由を失うか、さもなくば命を失うか、という二者択一だ。虜囚と言ったクジヨウの言葉は正しい。

（だが、死なせたくなかった）

シンカゲは思う。カガリのやり方はよく知っていた。冷徹な判断が必要な場合もあると承知していたが、今回ばかりは見過ごしに出来なかった。もとはと言えば、己の蠱を使いこなせぬシンカゲ自身にも責任はある。

街を後にし、三人は馬でリュウドウを目指した。

シンカゲとスイレンが驚いたことに、クジヨウは見事に馬を操ってみせた。富裕層や兵士ならばいざ知らず、庶民が乗馬を身につけることは滅多にない。蠱使いならば尚更に乗馬とは縁遠い筈だ。森の変動が起こった時、余程訓練を受けているのでなければ馬は邪魔になる。故に、森を渡る時は徒歩が原則なのだ。どこで乗馬の技術を身に付けたのか——だが、シンカゲはクジヨウに問うことはしなかった。スイレンも、クジヨウのことはシンカゲに任せたとわん

ばかりに口を閉ざしている。

帰ったらまずはカガリに対さねばならない。シンカゲはその困難を思い、そして決意を新たにする。カガリがクジヨウの人となりを確認、目にしたことを他言するような人物ではないと信じれば、命を奪うようなことはすまい。彼は非道な人間ではない。クジヨウがどのような人物なのか、シンカゲはまだ何もわかってはいない。だが、クジヨウが秘密を漏らすような人間ではないだろうことを、何故かシンカゲは信じていた。

ただ一つ、懸念があった。クジヨウには密書を見られている。それがカガリに知られれば、クジヨウがどのような人間であろうと、命を奪おうとするやもしれぬ。故に、それだけは決して知られてはいけなかった。

クジヨウは馬に揺られながら、傍らを走るシンカゲとスイレンを窺っていた。彼らが傭兵などではないだろうと、今では確信していた。リュウドウの自由兵士は名高い。彼らがその一員だとすれば、優秀な兵士に違いないだろう。

逃げることなどとうに諦めていた。逃げれば殺される、ということがなくとも逃げなかっただろう。どうせあの街からも流れるつもりだった。次に流れる先がリュウドウなら、それはそれで構わない。本当にいずれ自由になれるのか、それはわからなかったが、そもそも自由になったところで何か違いがあるだろうか。

人々を避け、頑なに己を秘して生きて来た。性を偽り、名を偽り、何時しか真実の己と虚の己と、どちらが本当の己かすらわからなくなっている。

——真実の己などはじめからなかったのかもしれない。

クジヨウは苦く思い、指先で耳飾りに触れた。蠱使いのクジヨウという偽り。それを貫いて生きてもいいのではないか。むしろその方が楽だろうか。それとも、いつそあの森で死んだ方が良かったか。

森での死こそ、己が己に立ちかえる最後の手段かもしれぬ。クジヨウはシンカゲの横顔を見詰めた。すまないと言ひた、低い声音――その誠実さが、クジヨウには辛かった。

駆け抜ける響きに連動して、シンカゲの鼓動を、包み込む腕の強さを思い出す。その温もりも今は遠い。クジヨウはシンカゲから目を逸らした。

まだ見ぬリュウドウで何が待ち受けているのか、クジヨウにはわからなかった。己が何も変わらぬのだと、その時クジヨウは信じて疑わなかった。夜の深まりは見通せぬ未来に似て、無明に何一つとして見出すことは出来なかった。

第二章

自由都市リュウドウ——君主制を支配の柱とする国々の中で、リュウドウは唯一主を戴かぬ地である。身分の貴賤はなく、人々は皆平等とされる。過去において、君主制の支配基盤を揺るがしかねない危険な存在として、他国に攻められたことも少なからずあるが、その度に敵を退け、リュウドウは発展し続けて来た。現在は、一国に匹敵する程の富と力を有している。

リュウドウの力の源は、古くから伝わり発達し続ける職人の技である。他国よりも高い技術力は、それだけで大きな武器だった。そしてリュウドウは商業の街でもある。他国にはない優れた商品を作り出すリュウドウには、自然と人が集まり、流通の拠点ともなっている。

主を戴かぬとはいえ、無論、リュウドウにも街を動かす人々がいる。職人と商人、それぞれの中から選ばれた代表者が、公議會を開いて街の運営を進めていた。故に、代表者を公議会員と呼ぶ。現在の公議会員は八人、その中でも最も力を有しているのが、三十数歳という若さで商業主達の中から代表者の一人に選ばれたカガリである。

そのカガリの屋敷に、クジヨウは囚われていた。

一夜馬を飛ばし、シンカゲ達とリュウドウに入ったクジヨウは、真直ぐにカガリの屋敷に連れて来られた。すぐに一つの部屋に通され、そこから出ることもかなわぬまま既に三日が経っている。一度、試しに扉を開けようとしてみたが、外から鍵がかかっているのか、びくとも動かなかった。無論、意外でも何でもなかったが。

部屋は屋敷の最上階にあるようだった。田舎ではまず目にすることのない玻璃を嵌め込んだ窓は、扉と同様開けることができない。内装は美しく、体を清める個室まであるが、クジヨウには人を閉じ

込めるのを目的に作った部屋なのではないかと思えた。もつとも、待遇は虜囚というにはあまりに贅沢なものである。

日に三度、屋敷の召使いが食事を運んで来る。そして上質の布地で作られた衣服までもが用意された。それは袖を通さぬまま寝台脇の卓に置いてある。薄物の布地が頼りなく、着る気にはなれなかった。いつまでも蠱使いの衣服を纏っているクジヨウに、召使いも特に何も言わなかった。おそらく、言葉を交わさぬよう命じられているのだろう。

クジヨウは、三日間の殆どをリュウドウの街を眺めて過ごしていた。何もすることがなかったせいもあるが、噂に名高いリュウドウは、ただ見ているだけでも飽きない。遠く、見たこともない形の煙突や、昼間道を埋め尽くす鮮やかな露店、そして尽きることのない人の流れ——どれも、クジヨウには物珍しかった。

その日も、クジヨウは長すぎる時間を持て余して、ぼんやりと窓辺に座っていた。広がる街並みは、大地を埋め尽くしてどこまでも続いているように見えた。このまま何も起こらぬまま一日が過ぎるのか、そう思った時だった。扉が叩かれた。鍵を閉めておいて扉を叩くことに意味があるとは思えなかったが、それが召使い達の習慣なのだろう。

朝の食事は一刻程前にすませた。昼まではまだ時間がある。訝しくクジヨウは開かれる扉を見詰めた。扉の向こうにはいつも食事を運んでくる恰幅の良い召使いと、一人の娘の姿があった。召使いは、どこかおどおどとした様子で娘を窺っている。

娘はまだ二十歳になっていないだろう。クジヨウが今まで見たどの女性よりも、その姿は美しかった。薄紅の裾の長い衣は絹に違いない。結いあげた栗色の髪は柔らかな光沢を放ち、美貌を引き立てている。琥珀と緑が混ざったような色合いの瞳が、興味深げにクジヨウに向けられていた。

「あなたがクジヨウね」

声も姿に違わぬ澄んだ響きだった。答えぬクジヨウに娘は首を傾

げ、躊躇いもなく部屋の中へと踏み込んで来た。お嬢様、と背後で召使いがおろおろと呼びかけるのに構わず、クジヨウに近付く。まじまじとクジヨウの顔を覗き込み、くすりと笑った。

「シンカゲがまだ子どもだと言っていたけど、本当ね」

花びらのような唇で囁くように言う。ふわりと匂うのは、香水だろうか。

「シンカゲがあそこまで必死になっているからどんな子かと思ったけれど、シンカゲはあなたの何がそんなに気に入ったのかしらね」

クジヨウは口を開きかけ、しかし言葉を発する前に廊下に響いた物音に顔を振り向けた。何かを言い争うらしい声。次いで足音が響き、戸口にシンカゲがあらわれた。三日ぶりに見るその姿に、クジヨウは言いかけた言葉を忘れる。

「クジヨウ」

言いながら、シンカゲは娘の姿に気付いたらしい。顔を顰めた。

「アウユキ、ここで何をしているんだ」

「あなたが必死で守ろうとしているのがどんな子なのか、見に来たの」

「無理矢理鍵をあけさせたのか？ ここには近付かないよう、カガリから言われていただろう」

「シンカゲが何も教えてくれないんだもの。私の性格を知っていないから教えようとしないうシンカゲが悪いのよ」

「同じことをカガリに言えるか？」

「お兄様の名前を出してもだめよ。それに、シンカゲが来たということはお兄様との話がついたということ。それならこの子のことをこれ以上秘密にする必要はないでしょう？ 私がここにいても、お兄様の言いつけを破ったことにはならないわ」

クジヨウは驚きを抑える。この娘、アウユキはカガリの妹なのだ。では、アウユキと気安く言葉を交わすシンカゲは、一体どのような立場なのだろうか。

シンカゲは唇を曲げると、無言で近付いて来た。シンカゲの方が

アウキよりも年上に見えるが、どうやら言葉の遣り取りではアウキの方が強いようだ。シンカゲはクジヨウを見下ろすと言った。
「三日間、こんなところに閉じ込めておいてすまなかったな。もう出られるぞ」

「俺はもう自由なのか？」

これに、シンカゲは僅かに気まずそうな表情を浮かべた。

「いや、まだそういうわけじゃない。クジヨウは俺が面倒を見るということで、カガリとは話をつけた。リュウドウから出られては困るが、街の中ならば自由に動いてもいい」

「シンカゲ様、カガリ様はそのようなことは仰られていません」

シンカゲに続いて部屋に踏み込んで来た男が苦々しく言った。どうやら廊下でシンカゲと言い争っていた人物らしい。

「カガリ様はその者を信じられるか否か、それを判断するための猶豫を与えると仰られただけです。シンカゲ様にはその者が不審な行動を取らぬよう、責任を持って決して目を離すなど」

「ごちゃごちゃとうるさいな。要は俺がクジヨウとともにいればそれでいいということだ」

「それは……少し意味が違うような……」

「決して目を離すなどということは、常に目の届く範囲にクジヨウがいればいいんだろう。つまり、俺と一緒にいればいい、ということだ。どう違うと言った」

「どう、と言われましても……」

「とにかく、クジヨウを何時までもこんな辛気臭いところに閉じ込めておけるか」

言うや、シンカゲは焦れたようにクジヨウの腕を掴み、引き寄せた。よろめくクジヨウの肩を支え、シンカゲは男を睨みつける。

「話は終わりだ。お前はカガリの所に戻れ」

言うや、シンカゲはクジヨウの肩を抱いたまま部屋の外へ出る。呆気にとられた表情で遣り取りを聞いていた召使いが、慌てて道を開けた。クジヨウは体を強張らせたまま、シンカゲに引きずられる

ようにして廊下を歩いていた。

「ちよつと、シンカゲ！ あなた四六時中その子と一緒にいるつもりなの？」

軽やかな足音を響かせて、アウユキが隣りに並んだ。

「お兄様が許さないわよ。あなたにとつても足手纏いになるだけじゃないの」

「足手纏いになどならない。自由兵士団には蟲使いが不足しているし、クジヨウはきつと役に立つ」

「そういうことを言っているんじゃないの。あなたがそこまでする必要はない、と言っているのよ！ 一介の蟲使いに、何故そこまでのするのよ！」

その言葉に、シンカゲがぴたりと足を止めた。氷を思わせる瞳が、今は怒りの熱を帯びている。

「アウユキ、いくらお前でもそれ以上は許さない」

アウユキが何かを言いかけ、しかし悔し気に唇を噛み締めた。シンカゲは「行こう」と一言、再び歩を進める。アウユキの視線を背中に感じながら、クジヨウはシンカゲの顔を見上げた。シンカゲが、前を見詰めたまま囁くように言った。

「今は黙ってついて来てくれ」

クジヨウの肩を掴むシンカゲの手に力が籠っていた。その後、広い屋敷を通り抜ける間、シンカゲは無言だった。廊下ですれ違う者は皆好奇の視線を向けてきたが、それを一顧だにしない。クジヨウには、扉までの距離が果てしないものに思えた。外に出て門扉を潜り抜けると、シンカゲは漸く歩調を緩めた。

「どうなっているんだ？」

クジヨウは問う。

「カガリを説得するのに手間取った。あいつはこうと決めたら梃子でも動かないからな。カガリはまだクジヨウのことを信じてはいないが、俺とともにいればもう閉じ込めるような真似はしない」

「つまり、シンカゲが俺の監視役になったということか」

シンカゲが足を止める。「ああ、そうだ」呟くように言うと、クジヨウの両肩を掴んで正面から顔を覗き込んだ。

「俺とともにいるなど嫌だろうが、我慢してくれ。あの部屋から出すにはこの方法しかなかったんだ。俺の傍にいれば、少なくとも力ガリも下手な手出しはしない」

「あの部屋から出れても、結局俺はリュウドウから出ることが出来ない。どこにしよう、虜囚であることに変わりはないだろう」

沈黙が落ちる。やがて響いたシンカゲの声は、包み込むように穏やかだった。

「確かに俺達はクジヨウの自由を奪っている。俺のことはいくら嫌ってくれても構わない。だが、リュウドウはいい街だ。クジヨウもここで過ごせばきっとリュウドウを好きになる。俺は、クジヨウにリュウドウを見せたいんだ」

「強引だな」

クジヨウの言葉を責めと取ったのか、シンカゲが再び黙り込んだ。肩を掴む手の大きさに、クジヨウは森で抱きしめられた時の感触を思い出す。鼓動が聞こえる程の近さ、全身で己を守ったシンカゲを、クジヨウは厭うことが出来ずにいた。今も、理不尽な理由でリュウドウに連れて来られたとはいえ、シンカゲはクジヨウを守ろうとしている。

——だからどうしたというのだ。人との交わりなど、所詮は一時のもの。いつかは流れて忘れ去るだけだ。

小さく胸の奥で何かが疼いた。クジヨウはシンカゲの眼差しから逃げるように顔を逸らした。

「肩が痛いんだけど」

「悪い」シンカゲは慌てたように手を離した。その手を僅かに彷徨わせ、困ったように頭をかいた。次に出た言葉は、どこかからりとした響きだった。

「とりあえず、自由兵士団にクジヨウを紹介しよう。俺は大概そこに入り浸っているからな。いっそのこと、クジヨウも鍛練をするか」

「そんな必要ない」

慌てて言ったクジヨウに、シンカゲは何やら納得したように一つ頷いた。

「この前も思ったが、クジヨウは年の割に少し細すぎる。この際体を鍛えたらどうだ。それに、蟲使いも武器が扱えた方がいいだろう」
クジヨウが答えるのも待たずに、シンカゲは歩き出す。やはり強引だ、とクジヨウは心中にひとりごちた。武器など、クジヨウには扱えない。だが、それを言えば不審に思われるだろう。

「クジヨウ、来いよ」

振り返り、シンカゲが言った。クジヨウは小さく溜息をつき、シンカゲの後を追った。

第二章（後書き）

これでも頑張って物語展開をはやめているつもりなのですが、なかなか進んでくれません。物語の風味も、もうちょい糖分がほしいところ。でも書き手はどうも匙加減が下手なようで、しかも油断すると間違って唐辛子をぶち込みそうになります。

余談ですが「蠱^ミ使い」は「こつかい」と読みます。我ながら言いづらいな、と思いますが、関西弁ならイメージ的に「こおつかい」、標準語なら「こ　つかい」といったところでしょうか。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

リュウドウは常に拡大し続ける都市だと言われている。富が人を集め、人が集まることにより新たな知恵が生まれて技術が発展する。しかし人口の増加には弊害もあった。それが犯罪の増加である。戦時において勇名を轟かせたリュウドウ自由兵士団、その平時の任には街の治安維持も含まれている。

シンカゲはクジョウを自由兵士団の屯所へと連れて行った。道すがら、シンカゲは自身がカガリの従兄弟であること、そして自由兵士団の一員であることを明かした。自由兵士団を統括する本部は街の中心部にあり、街全体を守るように、四方に屯所が配されている。シンカゲが属するのは街の東を守る、その名も東方ひがしかたと呼ばれる屯所だという。

「東西南北に屯所があるのか？」

「ああ、そうだ。俺が属するの東方にしかたの他に西方みなみかた、南方きたかた、北方がある。それぞれに特色があつて、自由兵士団に入る者は自分に合った屯所を選ぶんだ」

クジョウの問いにシンカゲは答える。二人が歩く大通りは店が連なり、漫ろ歩く人々で混雑していた。その中をシンカゲは歩調を緩めることなく進んでいく。クジョウは半ば小走りになりながらシンカゲを追いかけていた。

「戦時には四方の屯所が力を合わせるが、普段はそうそうともに行動はしない。相性の良し悪しもある。東方は西方と南方とは良好な関係だが、北方とはどうもそりが合わない。もうすぐ着くぞ」

クジョウはそれに僅かに安堵した。各地を旅し、体力にはそこそこの自信がある。だが慣れない雑踏の中をシンカゲの歩調に合わせて進むのは骨が折れた。常に人を避けて生きてきたクジョウには、人いきれだけでも目が回りそうになる。

やがて前方に堅固な要塞を思わせる武骨な建物が見えて来た。東

方の屯所である。

建物の入り口をシンカゲが通り抜けると、傍らから華やかな声があがった。何かとクジヨウが見やると、娘の一団が道の端に寄り集まってシンカゲに熱い眼差しを送っていた。口々に甘やかな声をシンカゲに投げるが、シンカゲは振り返りもせず建物の中へと入って行く。クジヨウは娘達の視線を避けるように、足早にシンカゲの後を追った。

建物の中は薄暗く、単調な廊下が続いていた。二人分の足音を響かせて暫く行くと、開けた空間に出た。建物の真中に広場があり、男達が集っている。何れも二十代半ばに見えた。

「よう、シンカゲ！ 相変わらずもてるな」

「お前が来たらすぐにわかる。ここまで女の叫び声が聞こえてくるからな」

口々に呼びかけられて、シンカゲが盛大に顔を顰めた。

「まったくいい迷惑だ。なんであんなにしつこいんだ」

「今や街一番の有力者、カガリ様の従兄弟とくりやあなあ」と、一人が言えば、もう一人が頷く。「しかも女が騒ぎそうな顔ときた」

「いくら無視しても付き纏う気が知れない」溜息混じりのシンカゲは、心の底からうんざりとした声音である。

「いい男なら、冷たい態度もまた女にとってはたまらないのさ」

「そうそう。その点、俺達は冷たい態度をしようものならすぐにそっぽを向かれちまう」

「違う、と笑い合う声が明るい。男の一人がクジヨウに視線を向けた。

「おい、シンカゲ、そいつは誰だ？」

「蠢こ使いのクジヨウだ。来いよ、クジヨウ」

躊躇うクジヨウを、シンカゲは肩を掴んで引き寄せる。半ば強引に広場に連れ出され、クジヨウは男達を見まわした。男達は誰もが興味深げにクジヨウを見詰めているが、それは嫌な視線ではなかった。

「へえ、蠱使いか。まだ若いな」

「ああ。若いが優秀だ。俺が今まで見てきた中で一番の使い手だ」

「お前とは雲泥の差、ということか。蠱などシンカゲには宝の持ち腐れだな」

一人がにやにやとして言うと、シンカゲはこの野郎、と相手に飛びかかった。じゃれあうようにして組み合う姿を、クジヨウは呆気に取られて眺める。

「シンカゲはね、あれでも一応蠱使いなんだ。尤も、ほとんど修行もしないで、あまり蠱を使いこなせないんだがね」

横合いからの声に、クジヨウは振り返った。傍らに一人の男が立っていた。

「私はムラセだ。よろしく、クジヨウ」

クジヨウは思わず目を丸めた。ムラセは、シンカゲがはじめに名乗った名である。

「どうしたんだい？」

クジヨウは慌てる。「以前、シンカゲがあなたの名前を言っていたから……」

「そうか。悪い噂を吹き込んでなければいいが」

ムラセは穏やかな笑みを浮かべて言った。シンカゲよりは一つ二つ年上だろうか。

広場では、遊びでのじゃれあいが何時の間にか本格的な組み合わせになっていった。全身を使つての激しい動きはクジヨウがはじめて見るものだった。鋭く華麗なそれにクジヨウは見入る。暴力という行為にどうしても嫌悪を感じるクジヨウが目を逸らさずにいられたのは、二人の動きに、どこか舞踏を思わせる美しさがあつたせいである。

娘達がシンカゲに騒ぐのも無理はないと思う。例えカガリの従兄弟という肩書がなくとも、シンカゲは十分に魅力的だろう。姿形だけではない。何事にも動じぬ落ち着きと、鋭い思考力を窺わせる瞳の深さ、そうかと思えば眩しいほどの笑みを浮かべる屈託のなさ。

冬のような冷たさと、煌めき弾ける熱と——クジヨウがシンカゲに抱く印象は掴みどころもなくくると変幻する。

クジヨウはシンカゲから目を逸らした。一体自分は何を考えているのだろう。

「シンカゲ！」

広場に響いた声に、シンカゲともう一人の若者は動きを止めた。クジヨウは思わず体を強張らせる。聞いた声——スイレンドである。建物の中から歩み出て来たスイレンはクジヨウに気付くと僅かに顔を顰めた。

「スイレ、蟲使いのクジヨウだ」何食わぬ顔でシンカゲが言った。スイレは一瞬シンカゲを睨みつける。苛烈なそれにも、シンカゲは何処吹く風である。仕方がない、とても言うように小さく肩を竦め、スイレは一言「よろしく」と言った。クジヨウも小さく言葉を返す。

「話がある。来い」言うや踵を返すスイレを、シンカゲは追って行った。どこか覚束ない心地で、クジヨウはその背を見詰めていた。

シンカゲはスイレの後を追いつながら、ちらりと広場を見やった。クジヨウにムラセが話しかけている。年若い蟲使いに興味があるのか、他の者達も周囲に集まっていた。

「まさか屯所につれて来るとはな」呆れたようなスイレの声音だった。

「好きにしろ、とスイレも言っただろう」

「言いはしたが、驚いたよ。お前は子どもの頃から予測のつかない行動をする」

「褒められたと思って素直に喜んでおくよ」

「阿呆が。今のは褒めてなどいないよ」

広場が見えなくなると、スイレは足を止めた。シンカゲを振り返った顔には懸念が浮かんでいた。

「カガリは納得したのかい？」

「いや、まだだ。だが、俺がついていければ自由に歩いていいと了承を得た」

「目を離れた隙に逃げるかもしれないとは思わないのかい？」

「それをするならとうにしているだろう。クジヨウはそんなことはしない」

「何故、そう言い切れるのさ」

シンカゲは答えられなかった。何故、と問われれば、返す言葉がない。理由などない。ただ感じるだけだ。クジヨウは信じるに足る人間だと――。その思いがどこから来るのかシンカゲ自身にもわからなかった。

「まあ、いいさ」スイレンは溜息をついた。「守ろうと決めたのなら、最後まで守り抜くことだね」

「わかっている」強い口調でシンカゲは言った。

「スイレ、俺に話っているのは何だ？ クジヨウのことだけじゃないだろう」

「ああ。少し嫌な話を耳に入れてね」

スイレの口調が改まった。厳しく声を潜める。

「一月程前、お前がのした北方の若造がいただろう」

シンカゲは記憶を探る。

「ああ……いたな、そう言えば。それがどうしたんだ」

「そいつらが北方を追われたらしい。今では街のごろつきだ」

「北方にいた時からごろつきと変わらなかっただろう」

一月前、酒に酔い酒場で暴れた拳句、その店の娘に乱暴を働こうとした連中を、シンカゲはのしたことがある。偶然通りがかった上でのことだったが、それが北方の一員だということを知ったのは後のことである。どうやら自由兵士団にあるまじき行為として、相応の罰を受けたらしい。

「そいつらがどうやらしきりにシンカゲへの復讐を吹聴しているらしいよ。北方を追われたのはシンカゲのせいだ、とね。むざむざや

られるようなことはないだろうけど、街を出歩く時は気を付けた方がいい。もしも多勢で来られたら、変な意地など張らずに逃げるんだよ」

案じる響きが声にはあつた。シンカゲ自身は誰かに敵意を向けられることに慣れていた。街の有力者の従兄弟だという、それだけの理由でごろつきに喧嘩をふつかけられたことも何度かある。その都度、二度と手出しする気が起きぬようきっちりと相手をしてやったつもりだが、何時までたつてもその手の輩はいなくならない。

今回も別段恐れを感じるわけではなかったが、今はクジヨウをもに連れている。クジヨウを巻き込むのは避けたかった。

「気をつけるよ」

シンカゲは言った。

「カガリからあんたを預かっている立場上、あんたに何かあつたら困るんだよ」

「俺が自由兵士団に所属しているのは、カガリとは何の関わりもないことだ」

不快を滲ませたシンカゲの声音である。

「そう言うなら、そろそろ責任ある役職に就いたらどうだ？ シンカゲならばすぐに中隊長にもなれる」

「何度も言っているだろう。俺は役職に興味はない」

「どうかな。役職を得たのはカガリの後ろ盾があるからだと思われるのが嫌で、拒絶しているんじゃないのか？ 東方ではお前のことをそんな風に思う奴はいない」

シンカゲはスイレンの顔を見詰めた。スイレンの眼差しは真剣である。もしかして、本題はこの話だったのかもしれない。以前から力に見合つた役職に就けと何度も言われている。その都度断っていたがどうやら諦めていなかったらしい。

「とにかく、俺は今のままでいいんだ」

スイレンは納得できぬ様子だったが、それ以上説得しようとはしなかった。

スイレンの言葉は半分当たり、半分間違っている。カガリは十年程前から頭角をあらわし、今やリュウドウの実質的な支配者となっている。シンカゲを見る者は誰も、彼をただ彼個人としては見ない。彼が何をしようと、カガリの身内という肩書が必ずついてまわる。いちいちそれを気にするほどシンカゲは神経質ではなかったが、内心うんざりもしていた。確かにスイレンが言うように、周囲の人々が己に向ける視線を疎ましく思つて役職を断っていた面はある。

だがそれだけではなかった。シンカゲはいつまでも自由兵士団にいるつもりはなかったのである。いつか、リュウドウを去る——それはシンカゲが誰にも明かすことなく胸に秘め続ける決意だった。今リュウドウに留まっているのは、親のいない己を預かり何不自由のない生活を与えてくれたカガリや、リュウドウという街に少しでも恩返しをしたいという思いからである。

リュウドウを去る時——その時こそシンカゲがただのシンカゲとして立つことがかなう時だ。リュウドウの人々はシンカゲがカガリの身内であるということと同様に、彼の過去を知っている。時に人が向ける憐れみ、それこそがシンカゲがリュウドウを去る決意を固めた原因であるかもしれなかった。

シンカゲは広場の方から聞こえる若者達の笑い声に、耳を澄ませた。そういえば、と思う。クジヨウはシンカゲがカガリの身内だと知つてもさほど驚かなかつた。態度を変えることもない。

不思議な人物である。普通ならば取り乱してもおかしくない状況を、クジヨウはただ静かに受け止めている。怯えているようにも見えない。感情の起伏があまりないようにも見えるが、シンカゲは初めてハザカイでクジヨウと対した時から、クジヨウが時折見せる張り詰めた翳りに気付いていた。心の奥底に激しい何かを秘めるかのようなそれである。迷惑を承知で強引に屋敷から連れ出したのも、あのような場所に閉じ込めていたくはない、という思いも勿論あるが、結局はクジヨウという存在が気になるからに他ならない。何故か、放っておけない。

森に佇むクジヨウの姿をシンカゲは思い出す。使者達を探すために森に入った、その二日目の朝だった。目覚めたばかりのクジヨウは、まるで森そのものに溶け込むかに見えた。命の煌めき、豪華な緑の帳の中にこそ、クジヨウは相応しい。

その思いの源をシンカゲは知らなかった。無論、この時点で彼が知ろうはずはなかった。

リュウドウでのクジヨウの生活は、カガリの屋敷と自由兵士団の屯所の往復という、奇妙なものになっていた。シンカゲとともにいれば自由に動ける、というのは本当だったが、カガリの屋敷の囚われ人であることには変わりがない。

クジヨウに与えられた部屋は、シンカゲの部屋の隣りである。豪華な部屋に、世話をする召使いまでつけられ、クジヨウはかえって身の置き所がなかった。召使いは、軟禁されていた間に食事を運んでいた女性である。名をヤヨイナという。

「クジヨウ様、御用意いたしました衣服を来てくださいませ。お客人がそのような格好をされていては、召使いよりもみすばらしくていけませんわ」

言葉を交わしてはいけないという命が解かれたらしいヤヨイナが、まず発した第一声がそれである。表向きの建前とはいえ客人とは、えらく出世したものである。

用意された衣服は素晴らしいものだ。柔らかい光沢を帯びるきめの細かい布地、最新の流行を取り入れた繊細な装飾など、まるで貴族が身に纏うようなものである。固辞するクジヨウと、何としても召使いの本分を全うしようとするヤヨイナとの間で押し問答になりかけた時、問題はあっさりと解決した。

「自由兵士団に行くつてのに、そんなひらひらした薄物を着ていくか。クジヨウは俺が昔着ていたものを着ればいい」

言いながらシンカゲが放って寄こしたのは、動きやすさを重視したしっかりとしたつくりのものである。派手さはないが、厚手の布地はさすがに上質な素材である。ヤヨイナはなおも不満をあらわしながらも、それならば、と漸く納得した。

はじめは仕方なしに自由兵士団の屯所に通っていたクジヨウも、やがてそこがさほど居心地の悪い場所ではないと思い始めていた。

屯所には男だけでなく女の兵士も少なからずいた。スイレンは東^{ひが}方でも二番目の地位、副長という立場らしい、ということも知った。しかし、戦時ならば厳格な上下関係も、普段はさほど厳しいものではないらしい。スイレンとシンカゲの碎けた会話からもそれは窺えた。

屯所に通うようになって幾日経った時、シンカゲはクジヨウに剣術をすすめたが、クジヨウは頑として頷かなかった。差し出された剣に蒼褪めた顔を向けたクジヨウを見て、シンカゲも無理強いはしなかった。

「剣は苦手なんだ」

「怖いのか？ 扱いを知れば怖くは感じないぞ」シンカゲは覗きこむようにしてクジヨウに問う。クジヨウは思わず身を引いた。シンカゲに自覚はないらしいが、クジヨウにはどうにもシンカゲとの距離が近過ぎるような気がしてならない。

「剣というより、鉄が苦手なんだ。持っただけで、ひりつくような気がして……」

「そんなことがあるのか」

シンカゲは驚いたようだった。手に持っていた剣をクジヨウから遠ざける。

「悪かったな」

シンカゲは氣遣うようにクジヨウを見詰めた。クジヨウは逃げるように視線を逸らす。普段は呆れるほどに強引なシンカゲの、時に見せるそんな柔らかさが、クジヨウを戸惑わせた。

クジヨウが言ったのは真実だった。鉄はクジヨウにとって毒のようなものだった。無論、鉄の全てが傷つけ殺すための道具になるわけではないが、人が作り出した研ぎ澄まされた輝きは、それだけでクジヨウを怯えさせた。

「剣術は無理でも、簡単な体術ならきつと役に立つ」

そう言ったのは傍らで二人の遣り取りを聞いていたムラセだった。結局、クジヨウは身を守るための基本的な体術を教わることにな

った。怯むクジヨウの背を押したのは、やはりシンカゲだった。

「体術は暴力じゃない。自分の身を守るために、如何に相手を傷つけずに退けるか、そのための方法の一つだ。クジヨウも蠱^ミ使いとしてやっていくなら、自分の身は守れるようになった方がいいたろう？ 剣が苦手なら、尚更に基本的な防衛術は必要だ」

シンカゲの言葉に頷きながら、クジヨウは戸惑う。己は一体どうしてしまったのだろうか。流されている、と思う。だが、シンカゲの強引さが、クジヨウには決して不快ではなかった。

体術以外は受け付けないクジヨウを、シンカゲは屯所の中にある医療所へと連れて行った。医療所には三十半ばに見える優しい女性^メがいた。シンカゲはクジヨウを女性に引き合わせると言った。

「彼女は東方の医療兵士、リラだ」

「まあ、あなたが噂のクジヨウね」

リラは笑窪を頬に刻んで言った。シンカゲが蠱^ミ使いのクジヨウを常に連れ歩く姿は、確かに一つの噂の種になっていた。

「リラ、体術の鍛練の時以外は、クジヨウにここで何か手伝いをさせてやってくれないか？」

「いいわよ。ねえ、シンカゲ、あなたがこの子の体術の鍛練をするという噂を聞いたけれど、本当？」

「ああ、そうだが？ この後に早速はじめるつもりだ」

リラはクジヨウとシンカゲを見比べ、小さく溜息をついた。クジヨウに困ったような笑顔を向ける。

「鍛練が終わったら、すぐに行くわね」

その言葉の意味を、クジヨウはすぐに知ることとなった。

クジヨウは横たわって荒い息をついていた。体の節々が痛い。シンカゲは厳しい師範だった。体術の基礎を体に教え込む。そのために、クジヨウの体が自然に動くまで基本的な動作を繰り返させた。次は基本的な動作から派生する技の習得である。そのため、シンカゲはまずクジヨウに技を受けさせた。技を受けることにより、その

技の本質を掴ませるといふ。それは理にかなった方法かもしれないが、容易いものではない。

「大丈夫かい？」

クジヨウは何とか頷き、声の主を見上げた。ムラセがどこか気の毒そうな眼差しをクジヨウに向けていた。身を起こし、クジヨウは周囲を見回した。建物の一角にある道場は閑散としている。今や東方のちょっとした有名人となっているクジヨウの鍛練を覗き見ようとする物見高い連中を、シンカゲは問答無用で追い出し、鍛練の間は扉を閉ざしていた。クジヨウにはありがたいことである。

「シンカゲももう少し手加減をすればいいのにね」

「それでは身につかないだろう。クジヨウは勘がいい。防御のための体術はあっているみたいだな。反射神経がいいせいだろう」

言いながら、シンカゲが近付いて来る。その背後に、リラの姿があった。

「シンカゲの鍛練を初めて受けた人は、大概すぐには歩けないのよ」
リラは言うと、クジヨウの傍らに膝をついた。

「別に傷つけるようなことはしていない」どこか憮然としたシンカゲの声に、クジヨウは思わず苦笑した。厳しくはあるが、シンカゲは無体なことをするわけではない。

「俺は大丈夫ですよ」

「でも痣が痛む筈よ。痣に塗る薬を渡しておくわね。明日朝起きてから塗るといいわ」

「ありがとうございます」差し出された小さな瓶をクジヨウは受け取った。

「明日からは、医療所にも来てちょうだいね。あなたに頼みたい仕事がたくさんあるのよ」

おっとりとリラは言った。

その日の夕刻、シンカゲはクジヨウを連れて数人の兵士達とともに屯所を後にした。シンカゲは屋敷と屯所の行き帰りの間にも、機

会があることにクジヨウにリュウドウの街の案内をしていたが、これ程の人数で歩くことはじめてである。道を歩けば、シンカゲ達の姿は否応もなく人目を引いた。四方の屯所の中でも東方は気さくな者が多く、街の人々にも人気が高い。

「ねえ、今度あたしの店に寄っておくれよ！」

「何時かは世話になったな！ これからもよろしく頼むよ！」

そんな言葉が方々からかかる。一団の中に紛れながら、クジヨウは傍らのシンカゲに問いかけた。

「どこに行くんだ？」

進むのはカガリの屋敷とは異なる方向である。

「すぐにわかる」

今すぐに教えてほしいのだが、とクジヨウは思う。だが、ムラセが何やらシンカゲに問いかけたらしく、それ以上シンカゲに声をかけることは出来なかった。やがて前方に凝った造りの建物が見えて来た。その屋根にある変わった形の煙突に見覚えがあった。屋敷の一室に閉じ込められていた時に、窓から眺めていたものだ。朱に染まり出した空に、煙突から煙がたちのぼっている。

少なからずの人々が建物の入り口を出入りしている。シンカゲを追いつながら、クジヨウは見当もつかぬまま建物の中へと入った。むっと籠った匂いがする。シンカゲ達が向かった扉の先に何気なく続いたクジヨウは、その場で凍りついた。煙のたちこめる部屋に、男達がひしめいている。それも裸で。

戸口で立ち止ったクジヨウの目の前で、シンカゲが上着を脱ぎ捨てた。なめらかな筋肉がついた背中が晒される。他の兵士達も、躊躇いもなく衣服を脱ぎ捨てていく。

「クジヨウ、どうした？ 来いよ」

振り返ってシンカゲが言う。茫然として半ば凍りついていたクジヨウは、シンカゲの声で漸く我に帰る。ぶんぶんと頭を振るクジヨウに、シンカゲは首を傾げた。

「お前も汗を流さなければ気持ち悪いだろう」

「いや、いい。俺はいい」

クジヨウはあたふたと言う。すぐにでも外に出たかった。シンカゲが近付いて来る。籠る熱気に、滲む汗が見えた。

「公衆浴場は初めてか？ 別に恥ずかしがる必要はない。男同士なんだから」

「本当にいいんだ！ 屋敷に帰って体をふくから」

「別に取って食いやしないぞ？」

もう一人がシンカゲの背後から顔を覗かせて言う。その姿からクジヨウは慌てて目を逸らした。

「嫌なら仕方ないな。俺が出てくるまでここで待っていてくれ」

「俺、先に屋敷に戻るよ」

何かを言いかけたシンカゲの言葉をクジヨウは遮る。

「逃げたりしない。ちゃんと屋敷に戻るから。シンカゲは安心してゆっくりしたらいい」

言うところ、シンカゲが止めるのも聞かずに、建物の外へと走り出た。振り返り、シンカゲの姿がないことを確かめると、足早に来た道を戻った。尤も、痛む体ではさほどの速さではなかったが。

公衆浴場なるものをクジヨウは聞いたことも見たこともなかった。名を聞けば、どのような場所であるかはすぐにわかる。他人に裸を晒して体を清めるなど、到底クジヨウには出来ぬことである。羞恥心——だけではない。

クジヨウは真直ぐにカガリの屋敷へと戻った。自ら檻に帰る虜囚とは奇妙なものである。監視役のシンカゲが追って来ないだろうことはわかっていた。クジヨウを追えば、それはシンカゲがクジヨウを信頼していない、ということを示している。シンカゲにはそのようないことは出来ないだろう。

丁度夕食の準備の時間帯らしく、クジヨウの部屋がある一角は静かだった。部屋に入り、シンカゲは中から鍵をかけた。のろのろと部屋を横切り、奥の小部屋へと入る。その扉の鍵をも閉める。窓もない部屋には、鏡が一つ。そして水を張った大きな桶が置かれてい

る。ヤヨイナが毎朝きれいな水を満たしているそれは、顔や体を清めるためのものだ。

クジヨウはゆっくりと衣服を脱いだ。傍らの戸棚に重なるようにして置く。一糸纏わぬ姿になって、木造の小さな椅子に腰かけた。手桶で水を汲み頭からかぶる。その冷たさに、頭の奥が明瞭になった。ぱたぱたと床に落ちる水音、随分長い間切っていない髪が、視界を覆う。

クジヨウは髪をかきあげた。ゆっくりと眼差しを上げる。今まで決して見ようとしなかった鏡へと目をやっていた。

手を伸ばし、鏡の表面に触れる。鏡の中で、男でも女でもない生き物が、途方にくれたような目つきで己を見詰めていた。性を偽り男として生きている。だが、時を止めた体には、女性的な膨らみなど欠片もない。

「何者かになれるなどと、思っていたの？」

ひそりと問いかける。鏡の中の己が、反駁するように目を細める。

「お前は所詮、岐^きだ。時を止めた岐が、何を望む」

言うや、クジヨウは鏡を拳で叩いていた。不様だと思う。男の振りをしたところで、真実男になれる筈がない。だが、それ以外にどうして生きていけばよいというのだ。

生きるままに、あるがままに——シンカゲは美しかった。全てを捻じ曲げて生きる己の姿を、シンカゲには見せたくなかった。

「お前は醜い……」

呟き、クジヨウは己から目を逸らした。

8（後書き）

「恋愛もの」って難しい！！「魄、落つる」を書いていて、心底そう思います。はじめは「恋愛」をメインで考えていたところ、それ以外の要素が膨らんでしまつて、今の時点で既に「恋愛」オンリーではなくなっています。でも、少しずつ、書き手なりに恋愛色を出していきたいと思います。

ではでは、今後ともよろしく願ひいたします！

リラの医療所は、常に温かい雰囲気満ちていた。そこに通うようになってすぐに、クジヨウはリラが兵士達にまるで母親のように慕われていることに気付いた。怪我の絶えない屯所ではあるが、治療のためだけではなく、ただリラと話したいがために多くの兵士が医療所を訪れる。

また、リラは医療者としても優れていた。彼女の処方する薬を求めて、街の人々までもが医療所を訪れる

クジヨウ自身、蟲^{むし}使いとして森を渡る立場上、植物には詳しくかった。少なからず薬草の種類や扱いも知っている。だが、リラの知識は比べ物にならぬほど深いものだった。

「どのようにしてそこまでの知識を身につけたんですか？」

穏やかに温かい日、いつものようにリラの薬剤作りを手伝いながら、クジヨウは聞いた。リラは小首を傾げながらおっとりと言う。

「身につけた、ということとは少し違うわね。私は誰かに教えを乞うたことはないのよ。これはほとんど、自己流なの」

クジヨウの驚きを見詰め、リラは笑窪を浮かべた。

「私は人よりほんの少し、目と耳がいいのね。植物を見ていると、その植物がどんな効能を持っているか、どうすればその力を引き出してあげられるのか、なんとなくわかるのよ。同じように、患者を見ていても、その人はどこが苦しいのか、どうすれば少し楽にしてあげられるかがわかるの」

「見るだけでわかるんですか？」

「こう言えばいいかしら。私は他の人には聞こえない小さな声を聞くことが出来るの。その命が放つ囁きのようなものを聞き分けることが出来る。私は直感と呼んでいるけれど」

世の中には五感を超えた能力を有する者が時折いる。リラは、つまりそういう力の持ち主なのだろう。クジヨウは何故リラが軍隊の

医療兵士をしているのか、その理由を垣間見たように思った。リラほどの能力があれば、独立して医療所を開設することも出来よう。だが、五感を超えた能力を持つ者は、時に恐れられ、忌まれる。もしかするとリラにも、人に厭われ追われた経験があるのかもしれないかった。

クジヨウの思考を読んだように、リラが言った。

「直感のおかげで、私は多くのことを得たけれど、とても多くのものを失いもしたわ。時に、人は自分に見えない者を見る人を恐れるのね。でも自由兵士団は誰であろうと、志のある者ならば受け入れてくれる。とても温かい場所よ」

「でも、戦になれば、自由兵士達は人を殺し、血を流します」

思わずクジヨウは言った。日々の穏やかさに忘れそうだが、軍隊とはそういう組織だ。人を癒すことを生業にしているリラが、それを受け入れていることが、クジヨウは不思議だった。そうね、とりらはどこか寂しそうに呟いた。そしてぽつりと付け加える。

「あなたには受け入れ難いことかもしれないわね」

瞬間、クジヨウはどきりとした。リラの真直ぐな眼差しがクジヨウに注がれていた。どういう意味なのか、と問う言葉が喉でひりついた。人には見えぬものを見通すリラの瞳に、クジヨウの姿はどのように映るのだろうか。と、リラがふわりと笑んだ。

「さ、薬が出来たわ。ムラセのところに持って行ってくれよ？」

クジヨウは薬が入った瓶を片手に、屯所の広場へと向かった。数日前、剣術の鍛練でムラセが腕に軽い怪我を負った。そのための薬である。

ムラセの姿は、思ったとおり広場にあった。広場が眺め渡せる場所、柱に凭れて立っている。

「ムラセ、リラの薬を持ってきた」クジヨウが呼びかけると、ムラセは柔らかく笑んだ。

「ああ、ありがと。クジヨウも来てごらん。今シンカゲが試合を

しているんだ」

クジヨウはムラセの隣りで、広場で繰り広げられている模擬試合を見やった。シンカゲの相手は、中隊を率いる三十半ばの男である。多くの兵士達が見守る中、剣戟は激しく力は互角のようだった。だが、次第に押され出したのは中隊長の方だった。身ごなしの素早さで、シンカゲに伍する者は多くはない。鋭く繰りだされた剣の一閃に、中隊長の得物が弾かれた。鋭い呼気が響き、一瞬の後広場は歓声に包まれた。

中隊長は悔し気に天を仰ぎながらも、笑顔でシンカゲに負けを認めた。

「シンカゲ、やったな！」シンカゲに、兵士達が駆け寄った。ムラセもシンカゲのもとへと向かう。「とうとう中隊長を破ったか！」もみくちやにされながら、シンカゲは仲間達から手荒い祝福を受ける。シンカゲの笑顔を、クジヨウは見詰めた。

「前から、実力では既に中隊長を上回っていたんだよ」

突然響いた声に、クジヨウはびっくりとした。何時の間にか、スイレンが隣りにいた。スイレンはクジヨウを見やり、鼻を鳴らした。

「そんなに怯えるんじゃないよ。あんたを傷つけやしないよ。そんなことをしようものなら、シンカゲが許さないさ」

なおも続く広場の騒ぎに目を移し、スイレンは続けた。

「あたしとしては、シンカゲにもっときちんとした役職に就いてほしいんだけどね。奴はずっと断り続けている。何故だろうね」

「俺にわかるわけがない」

「そうかい？ あれだけ一緒にいればわかるんじゃないかと思ったんだけどね」

クジヨウはスイレンを睨みつけた。

「別に好きで一緒にいるわけじゃない」

「ああ、あんたはそうだろうね。だがシンカゲは自ら選らんであんたとともにいるんだ」

素気ない物言いだったが、スイレンの眼差しは真剣だった。それ

に、クジヨウは出かけた言葉を呑み込む。スイレンは皮肉を言いにクジヨウに近付いたわけではないのだろう。リュウドウに連れて来られてから、既に一月程が経とうとしている。その間、シンカゲは常にクジヨウを連れて歩いてきた。クジヨウの存在を疎ましく感じることもあるのではないかとクジヨウ自身が思わずにはいられなかったが、シンカゲの態度は常に変わらない。

「何故、シンカゲはあそこまでしてくれるんだろう。俺のことなんか何も知らないだろうに」

ぼつりとクジヨウは問うていた。

「ハザカイでクジヨウを雇ったのはシンカゲが己の蠱を使いこなせなかったからだ。シンカゲは責任を感じているんだろうね。それに、もしかするとシンカゲはあんたのことを弟のように思っているのかもしれない」

「弟？」

クジヨウはスイレンを見上げた。

「ああ、そうだ。シンカゲの家族は全員死んだが、弟がいたらしい生きていればクジヨウくらいの年齢だと、この前こぼしていた」

クジヨウは思わず広場のシンカゲを見やった。折しも、シンカゲがクジヨウとスイレンの姿に気付いたらしい。大きな笑みを浮かべた。クジヨウはそれに胸が痛くなる。

「シンカゲはあんたを本気で守ろうとしている。だからこそ、あんたにはシンカゲを裏切ってほしくはない」

クジヨウは押し黙った。言われずともわかつている。シンカゲは本気でクジヨウを守ろうとしている。巻き込んでしまったから。自由を奪ってしまったから。あるいは、誰かの面影に重ねて――だが、己に守られる程の価値があるだろうか。

と、その時、広場に面した廊下を歩んでくる数人の男の姿が目に入った。広場の騒ぎが静まる。男達が纏う衣服、それは街の警邏けいろうが身につけるものだった。中央に立つ男は、厳しい面持ちである。スイレンが素早く歩み出すと、男達へと一礼した。男が低い声で何事

かを言う。緊迫した雰囲気だった。

クジヨウは近付いて来るシンカゲを見上げた。先程まで眩しいほどの笑顔を浮かべていたシンカゲも、今は張り詰めた表情である。

「どうやら厄介事が起こったようだな」

「厄介事？」

「ああ。警邏が俺達の力を借りにきたんだろう。すぐに出るようになるかもしれない。クジヨウはリラの元に戻っていてくれ。遅くなるかもしれないが、俺が戻るまでそこにいるんだ」

「大丈夫なのか？」

シンカゲは驚いたようにクジヨウを見下ろした。

「俺はそうそうやられはしない」

クジヨウは下を向いた。シンカゲが言う通りだ。馬鹿なことを言ってしまったと思う。

「案じてくれているのか？ 俺は大丈夫だ」

優しく、シンカゲが言った。ぽんぽん、と幼子にするようにシンカゲがクジヨウの頭を撫でる。クジヨウは顔を歪めた。胸の奥がちくり、と痛む。そうか、と思っていた。何故、シンカゲがクジヨウにこれほどまでしてくれるのか。

——シンカゲはあんたのことを弟のように思っているのかもしれない——

おそらくはその通りなのだろう。シンカゲにとって、クジヨウはクジヨウであって、クジヨウではない。おそらくはシンカゲの追憶の中に在る存在、その依代だ。

クジヨウの物思いを破り、鋭く指示を出すスイレンの声が響いた。間もなくして、シンカゲを含む東方の兵士達が屯所を走り出て行った。それを、クジヨウは見詰めていた。

シンカゲ達は夜になっても戻らなかった。リラの医療所で、クジヨウはまんじりともせず時を過ごしていた。

自由兵士団の役割の一つ、街の治安維持——その多くは警邏への

協力という形で行われる。罪人を捕え罰するのは警邏の仕事だったが、捕縛が困難である場合は、自由兵士団が力を貸すこととなる。

今回は、悪質な人身売買が密かにリュウドウの内部で行われるという情報を警邏が掴み、その犯人達を捕えるために東方の兵士達に助力を乞うたということだった。怪我のため屯所に残ったムラセから、クジヨウはそのことを聞いた。

夜半になり、漸く兵士達が屯所に戻って来た。慌ただしいざわめきにクジヨウが立ち上がった時、医療所の扉が大きく開かれてシンカゲとスイレンが飛び込んできた。二人の衣服にこびりつく血に、クジヨウは息を呑む。シンカゲは腕に力の抜けた小さな体を抱えていた。

「リラ、この子を見てやってくれ！」

言うや、シンカゲは寝台に腕に抱えていた人物をおろす。まだ十三、四の少女だった。その胸がべつとりと赤く濡れている。リラが無言で少女の上に屈みこんだ。クジヨウは凍りついたようにその光景を見詰めていた。

「リラ、どうだ？」

スイレンが問う。クジヨウから見ても少女の傷は深く、状況の厳しさがわかった。

「ああ……だめ」リラが呟いた。

少女の顔が苦し気に歪む。その口から細く叫ぶような声が迸った。そして一つ大きく息を吸うと、少女は息絶えた。

「逝ってしまったわ」

リラが囁くように言った。しん、と診療所が静まる。

「スイレン、一体何があったの？ この子は何故……？」

「悪質な人身売買組織が最近暗躍しているのを知っているだろう？ その組織がリュウドウの商人に裏から魄はくを売ろうとしていたんだ」

魄——クジヨウは硬直する。

「警邏がその情報を掴み、東方に助力を求めて来たんだが、相手の組織が雇った傭兵に手間取ってね」

「傭兵は捕えたが、黒幕は逃した。だが、逃げる際に、奴らこの子の口を封じるために殺そうとしたらしい。見つけた時には既に虫の息だった」

シンカゲの声音が低い。

「じゃあ、この子がもしかして……」

「ああ、そうだ。魄として売られていたのはこの子だ。この子は本当に魄なのか？」

クジヨウは物言わぬ骸となった少女を見やる。柔らかな体の曲線といい、整った顔立ちといい、匂やかな美しさがある。

「いいえ、この子は魄ではないわ。魄が覚醒するのはもう少し成長してからよ」

「では、岐^きか？」

「岐でもないわね。魄に覚醒するまで、岐は女性というよりも無性に近いの。この子は普通の少女よ」

「やはりな……。何もかも偽りだったというわけか。騙される方も騙される方だが」

スイレンが苦く呟いた。そもそも真実少女が魄であるならば、組織の連中が置き去りにする筈がない。

「この子、最後に何て叫んだのかしら。異国の言葉のように聞こえたけれど」

「お母さん」

ぼつりとクジヨウは呟いていた。三人が驚いたようにクジヨウを振り返る。

「この子が最後に叫んだ言葉……母親を呼ぶ言葉だ」

クジヨウは痛ましく少女を見詰めた。おそらくその美しさ故に売られたか、あるいは攫われてきたのだろう。

お母さん——最後に残した叫びが、胸に迫った。

魄が森の奥へと姿を消して久しい。だが、いまだに魄を求める者達がいる。己の欲望のため——少女はその犠牲になったのだ。

「魄……」

呟いたのは、シンカゲだった。シンカゲの瞳の奥に揺らめくもの、それにクジヨウは息を呑んだ。炎のような、それは憎しみであり怒りだった。あらわれたのは一瞬、だが、その一瞬にクジヨウは悟っていた。

——シンカゲは魄を憎んでいる。

冷たく、重く、クジヨウの心が塞がれる。何故魄を憎むのか、クジヨウは知らぬ。知ろうはずもない。手を伸ばせば届く程の距離、だが、クジヨウにはシンカゲの姿が途方もなく遠く思えた。

——近付いてはいけない。

これ以上、シンカゲに近付いてはいけない。己に言い聞かせる。魄を求める者にも魄を憎む者にも、己が岐であることを知られてはならない。それこそが魄の掟——そこまで考え、クジヨウは俯いた。違う。掟など、どうでもよかった。単に知られたくないのだ。己が岐であることを。シンカゲの優しさが、微笑みが崩れ、憎しみにとつてかわる、それを見たくはないのだ。

夜の底に、クジヨウは一人立ち尽くしていた。

第三章

——私をお前の聯れんにせよ！

怒声が冷たい壁に反響する。火影に、男の姿は巨大だった。己の手首には太い鎖——まるで犬猫のように枷を嵌められて——動くたびにそれが錆びついた音をたてた。少し離れた壁際に、母親が蒼褪めた顔で座っている。この恐ろしい場所に囚われて何日経ったのか、それすらもわからなくなっていた。

男が母親の顎を掴む。無理矢理に仰のかせて、美しい顔を覗きこむ。

——お前が愛した聯は私が殺した。私を新しい聯に選べ。そうすれば何不自由のない生活を保証してやろう。魄はくであることを隠して逃げ惑う必要もない。

母親の無表情な瞳は、男の姿を映してさえない。永い生の伴侶にと選んだ者の死を、既に彼女は知っている。己も、知っている。涙はもう枯れているけれど、悲しみは痛みすら伴う。

何故、父親が殺されなければならなかったのか、その理由はわかっていた。——お母さんが魄だから。魄の聯として選ばれば、奇跡が与えられるから。だから、父も母も、母が本当は魄であることを秘していた。

——お母さん。

必死に呼びかける。母親の顔が、ほんの少し動いた。それを、男は見逃さない。男が笑った。

——なるほど、従う気がないか。ならばお前の娘を私のものとしてやろう。まだ岐きとはいえ、いずれ魄に覚醒する。

母親の凍りついた表情、そこに浮かぶのは紛れもない恐怖だった。男の顔が振り向けられる。逃げようにも、後ろは壁。重たい鎖は到底切れるものではない。男が何かを叫ぶ。言葉はわんわんと反響して聞き取ることが出来ない。

——やめて！ その子だけは！

母親の叫び。まろぶように駆け寄ってくる母親を、男は無造作に払いのける。

——私に逆らえばどうなるかよく見ておけ！

腕を掴まれ、引きずられる。冷たい床に押さえつけられて、悲鳴が零れた。背中が切り裂かれる。逃れようとがきながら横目で見上げると、男が鉄の棒を掲げていた。その先端に象られているのは男の胸に美しく刺繍されている印と同じだった。熱せられて鈍い赤に染まるそれが、迫ってくる。

次の瞬間、それが背中に押し付けられる。熱さ、痛み、恐怖——叫び声に、世界が震えた。

いや、叫んだのは母親だっただろうか——そして、全てが白く塗り潰された。

クジヨウは目を見開くと、がばりと身を起こした。全身が嫌な汗に濡れていた。どくどくと鼓動が鳴り響く。

「また……あの夢……」

零れた声は、震えていた。

辺りはまだ暗い。広い寝台に、クジヨウは一人だった。夢の中で感じた恐怖が体の芯に凝っている。全てが克明に、押さえつけられた冷たい床の感触さえ思い出すことが出来た。忘れようはずもない夢は、遠い記憶を映したものだ。

クジヨウは己を抱きしめるように蹲る。掛け布に額をつけると、ひんやりと冷たかった。頭の奥の鈍い痛みが、やがて瞼の裏で熱となって疼く。

——泣くな。

己に命じる。泣いたところで、何が変わるわけでもない。背中に焼き付けられた刻印のように、決して消えない記憶のように。過去も未来も、同じ悪夢の延長線上にある。

クジヨウは小さく体を丸めた。確かめるように左耳の耳飾りに触

れる。

夜は長く、眠りはもう訪れなかった。

リュウドウに潜り込んでいた人身売買組織の者達は、警邏と兵士達の丹念な搜索で、全員が捕縛された。しかし、思いの外手間取り七日を要した。シンカゲ自身も捕縛に協力し、捕縛が終わるまでの間は早朝に屋敷を出て深夜に戻る毎日だった。

漸く事が落ち着き、シンカゲが久しぶりにカガリとアウユキの顔を見たのは、騒動が起こってから八日目、朝食の席でのことである。食事の後、カガリはすぐにでも屯所へ向かおうとするシンカゲを、自身の執務室へと呼び出した。

改まって呼び出しなど珍しいことである。シンカゲはカガリと対面することはさほどない。毎日自由兵士団の活動に参加するシンカゲと、公会議員としてリュウドウを動かしているカガリとは、互いに時間を共有する程の余裕がなかったせいである。

カガリは執務室でシンカゲと向き合い、言った。

「あの蟲^こ使いはどうだ？ 不審な様子はあるか？」

覚悟していた問いだった。シンカゲは慎重に答える。

「不審なところなどない。はじめから信用の出来る奴だと言っているだろう」

「お前は甘い。すぐに人を信用するからな」

「誰をも信用出来ないよりはましだと思うが」

カガリはシンカゲの物言いに苦笑した。だが、その笑みもすぐに消える。

「シンカゲはクジョウとやらを自由にしてやりたいのだろう。だが、シンカゲがどれ程必死になろうと、それは出来ぬ相談だ」

「どういうことだ」

「少しでも情報が漏れる危険があれば排除する、ということだ」

「だからと言って問答無用で命を奪うのか！？」

思わず声を荒げたシンカゲに、カガリは緩く首を振った。

「私とて無闇に人の命を奪う程冷酷ではない。出来るならば奪いたくはない。クジヨウを生かしたいなら、我らの中に取りこめ。このリュウドウに繋ぎ止め、真実我らの一員とするんだな」

「クジヨウがリュウドウの者になるなら、命は奪わないということか」

「ああ、そうだ」

「それではクジヨウはいつまでたっても真の意味で自由にはなれない」

「要は主観の問題だ。クジヨウにとってこのリュウドウが、己が属すべき場所となればよい、ということだ。我らの同胞となり、リュウドウの一部となるならば、私もクジヨウを信頼しよう」

森で迷った商人を救い出すという依頼が偽のものであったことはクジヨウならば気付いているだろう。リュウドウに戻ってからクジヨウと行動をともし、シンカゲはそのことを確信していた。クジヨウは愚かではない。だが、クジヨウは依頼が偽であることに気付いていても、彼らの真の目的がラザンからの密書を携えた使者を探し出すことであつた、ということまでは知らない。シンカゲは、何故カガリがここまで頑ななのか、訝しく思う。

窓から差し込む光には、まだ朝の色彩がある。カガリの姿は、その中で不穩に浮かび上がって見えた。己を凝視するシンカゲに、カガリは言った。

「何故私がそこまでするか、シンカゲにも話した方がよさそうだな。シンカゲがハザカイで救い出した使者達が、ラザンからの密書を運ぶ途中だったということは言つたな。密書の内容は、セクトールが万が一リュウドウに攻め込んだ時に備え軍事的な協定を結ぶ、というものだ」

「軍事的協定!？」

「ああ、そうだ。お前もセクトールが以前からリュウドウへと支配を広げようとしていることは知っているだろう。セクトールにとつ

ては、リュウドウの技術力と富は喉から手が出るほどに欲しいものだろうからな。一方のラザンにとってはセクトールがリュウドウの力を手に入れば己の存亡にも関わる問題だ。故に、我らと密かに軍事的な協定を結ぶことに同意した」

曰く、セクトールがリュウドウに軍事的侵攻を開始した場合、ラザンが背後からセクトールに攻め込むという。現在の力関係を鑑みれば、セクトールが一つ抜きん出ている。まともにぶつかれば、まず間違いなくセクトールがラザンを圧するだろう。公に協定を結べば、牽制になるどころか自ら危険を呼び込むことになりかねない。故に密約である。セクトールの意識がリュウドウに向いている時、背後から奇襲をかければ、セクトールの力を大きく削ぐことが可能となる。

「私が何故これほどまでに先の件に拘るか、わかっただろう。事はリュウドウとラザンの存亡に関わる。どれ程に小さな穴からでも、秘密は漏れる可能性がある。危険の芽は決して残しておくわけにはいかない」

カガリの話に、シンカゲは驚きを隠せずにいた。おそらく、密約は公会議の決定のもと結ばれたのだろう。だが、実質カガリが公会議を動かしていると言っても過言ではない現在、密約の構想を練り、実行に移したのはカガリその人に違いない。

シンカゲはカガリが密約の内容を明かしたことが意外だった。シンカゲは密約を知るような立場にはない。例えばジョウのことがあっても、普段のカガリならば決して機密を漏らすようなことはしないだろう。

「何故、俺にそのような話をする？」

問うたシンカゲに、カガリは満足気な笑みを浮かべた。まるでそう問われるのを待っていたかのように、カガリの答えには迷いが無い。

「私と同じ立ち位置で、物事を見てほしいからだ。リュウドウを守り、より発展させるために、私は大きな変革が必要だと考えている。

シンカゲには、そのための補佐として私につき、力を発揮してもらいたい」

シンカゲは息を呑んだ。

「そのようなことは公會議員が考えることであって、一介の自由兵士が関わることじゃない」

「公會議員制度は既に限界に来ている。すぐにはいくまいが、公會議員の選出を、私はなくすつもりだ。選出はもはや硬直化している。一部を除き、殆どが情性で選ばれているのだから。リュウドウは大きくなりすぎた。従来のやり方ではまとめることが出来ない。これからは、確固たる強い指導者が必要だ」

シンカゲの驚きは、ラザンとの密約に感じたものよりも大きかった。リュウドウの在り方を根底から揺るがす、カガリの言葉である。「カガリがリュウドウの王になる、ということか？」

ひそりと問えば、カガリの答えは淡々としていた。

「王ではない。私はあくまでもリュウドウを牽引する指導者として立つただけだ」

どう違うのか、とシンカゲは問いたかった。リュウドウが自由都市と呼ばれるのは、人が皆平等であり、君主を戴かないからだ。公會議員制度はそのための基盤と言える。だが、カガリが言っているのは、リュウドウに絶対的な支配者を置く、ということだ。今の時点で、支配者となるのはカガリ以外に考えられない。

「不満か？」

シンカゲはカガリを睨みつけた。

「ああ、不満だな。仮に、今の公會議員制度がもたなくなっているにしても、誰か一人が支配者になるのはリュウドウの在り方を根底から揺るがしかねない。百歩譲って誰か一人が実権を握るにしても、実権を握る者が永久的な力を持つてしまえば、リュウドウはもう自由都市とは呼べない。それに、カガリは俺に補佐になれ、という。身内を重用して公平な人選をしないなら、既にカガリは人々の代表者などではない。単なる独裁者になってしまう」

「シンカゲを選ぶのは、身内だからじゃない。身内でも無能ならば、このようなことを頼みはしない。シンカゲは自由兵士にしておくには勿体ない人材だ。私がしようとしているのは、優秀な人材をもつとリュウドウの政治の中枢に集めることだ。そのうえで、安定した政の場を整える。私が代表に立つのは、より確固たるリュウドウの基盤を作るためだ」

カガリは熱の籠った口調で続けた。

「シンカゲはいずれリュウドウを去ると、そう考えているのではないか？　だが、リュウドウに腰を据えることを考えてみてほしい。シンカゲのように能力ある若い者が、この先のリュウドウには必要だ」

何時かりュウドウを去る——心に秘めていたシンカゲの思いに、カガリは気付いていたのだ。

「これは何も私だけの願いではない。アウユキも、シンカゲがリュウドウで生きることを望んでいる」

「アウユキが？」

「ああ、そうだ。アウユキはシンカゲを一人の男として愛している。シンカゲと結ばれたいと願っているのだ。気付いていただろう？」

問われてシンカゲは言葉に詰まった。二歳年下のアウユキは十九歳になる。既に夫を持つてもおかしくはない年齢である。カガリの妹である彼女には、実際のところ縁談の話は引きも切らない。幼い頃から知るアウユキを、シンカゲ自身は妹のように思っているが、いつしかアウユキから向けられるようになった眼差しの、その意味に気付かぬ程、シンカゲは鈍くはなかった。

「私からも頼みたい。アウユキを妻とし、このリュウドウに留まってくれ。そして私の片腕として、ともに闘ってほしい」

「アウユキには、俺などよりもっといい相手がいる筈だ。俺には富も力もない」

「シンカゲがその気になれば、富と力など、すぐに得ることがかなう。それに、私は妹を悲しませて意に染まぬ結婚をさせるつもりな

ど毛頭ない。私がどれ程アワユキに甘いか、忘れたわけではないだろう」

「確かに、そうだな」

シンカゲは溜息混じりに言った。何時からカガリがシンカゲをリユウドウの政治の中枢に引き込もうと考えていたかは知らぬが、当然アワユキとの結婚もその思惑の範疇に含まれることなのだろう。年の離れた妹を殊の外愛しているカガリならば、もしかするとアワユキとシンカゲの結婚という考えの方が先にあったのかもしれない。いずれにせよ、シンカゲにはカガリが己を買い被っているようにしか思えなかった。

「答えをすぐに出せとは言わぬ。だが、この先どのように生きるか、シンカゲもそろそろ真剣に考えるべき時期だ。リユウドウの未来のために、そして私とアワユキのために、ここに留まりその力を活かしてほしい」

重く響くカガリの言葉に、シンカゲは答えることが出来なかった。

アワユキは一人屋敷の庭園を歩いていた。美しく整えられた庭園は、アワユキの気に入りの場所である。季節は今まさに春の盛り、花々は淡い薫りを放ち、色彩は柔らかに重なり合って見る程に誘い込まれる心地になる。

歩きながら、アワユキは二階にある兄の執務室の窓を見上げた。光を弾く玻璃が眩しい。中を見ることはかなわないが、そこで兄がシンカゲに告げているだろうことを考え、アワユキは知らず笑みを浮かべていた。シンカゲと結ばれたいと、その望みを兄に告げたのは少し前のこと——反対するどころか、それならば自分からシンカゲに伝えようと兄が約したのは、アワユキにとって願いどおりのことだった。朝食の後シンカゲを呼びとめた兄の様子から、シンカゲにアワユキの思いを伝えることは間違いないだろう。

シンカゲとともに生きる——その願いがかなうことを、アワユキは信じて疑わない。幼い頃からシンカゲだけを見詰めていたアワユキには、他の選択など想像すら出来なかった。

アワユキは自身の美しさをよく知っていた。カガリの妹という立場もあり、言い寄ってくる男は数知れない。だが、どの男もつまらなく、時には醜くさえ感じた。己に相応しいのはシンカゲしかない、と思う。そしてシンカゲにも、相応しいのは己しかない。だが、アワユキの気持ちに気付いているだろうシンカゲは、いつまでたってもアワユキのことを妹のようにしか見ない。それが、アワユキには焦れったかった。

庭園の中に設えられた緩く弧を描く小道を進んでいたアワユキは、前方の光景に足を止めた。シンカゲのことを考えていた、その思考が途切れる。苛立ちを感じ、アワユキは足を速めた。彼女の気に入りの場所に誰かが入り込んでいる。蔓性の花が咲き乱れる一角に、人の姿があった。

近付くと、それは一月以上前から屋敷に逗留している蠱^こ使いの少年だった。庭園の景観の一部として配置された岩に座り、傍らの木の幹に体を寄り掛からせている。辺りを覆う蔓には小さな青い花が満天の星空のように散りばめられ、少年の姿を半ば隠していた。

「何をしているの？」

言いながらアワユキは花の帳を些か乱暴に払った。返事はない。よく見ると少年は目を閉ざしていた。眠っているのだ。

アワユキは唇を曲げた。彼女はこの少年を快くは思っていない。どのような事情があるかは知らされていないが、シンカゲとカガリの間で少年の扱いを巡り争いがあったことは知っていた。シンカゲが必死に少年を庇っているらしいこと、そして毎日のように少年とともに行動していること、どれをとってもアワユキには面白くなかった。

「ちよつと、起きなさいよ」言いながら少年の肩を揺するうとして、アワユキは手を止めた。気紛れな風が吹いて、花々が揺れる。少年の黒髪がさらりと流れて、その下の顔が露わになった。

アワユキが間近で少年の顔を見るのは初めてだった。少年に与えられた部屋はアワユキの部屋からは遠く——無論、少年の部屋がシンカゲの隣りだということも腹立たしく感じる要因の一つである——客人として遇してはいても食事をもにすることはない。結果として、顔を合わせるのは廊下ですれ違う時くらいである。アワユキ自身、少年に対してどこかぼやけた印象しか持っていなかったのだが――

アワユキの手の中で青い花が潰れ、甘い芳香が広がった。動けぬまま、アワユキは少年を見詰めていた。

少年は美しかった。眉が柔らかな弧を描き、長い睫が滑らかな頬に影を落としている。形の良い鼻と、ふつくらとしながらも柔らかな品の良さを感じさせる唇——全てが繊細に整い、男という性を感じさせない清らかさがある。そして、それだけではない、一度気付くと目が離せないような艶やかさをも宿していた。

何故今まで気づかなかつたのだらう、と思う。少年が常に顔を隠すように髪を垂らしているせいか、それとも視線を避けるように俯いているせいか――あるいは、厳しく内省するような、少年が持つ雰囲気のせいなのか。眠っているからこそ、少年の持つ生来の美しさが無防備に晒されていた。

「クジヨウ、どこだ？」遠く聞こえた声に、アワユキはびくりとした。シンカゲの声だ。カガリの話が終わり、自由兵士団の屯所へ向かうのだらう。クジヨウを呼ぶ声は次第に近付いて来る。アワユキは咄嗟に傍らに茂る灌木の中へと身を潜り込ませた。カガリがシンカゲにアワユキとの結婚の話をしただらう後に、他の者を差し挟んでシンカゲと対したくはなかった。

アワユキは身を屈め、密生した葉の隙間から様子を窺った。幾度目かの呼び声に、クジヨウがゆつくりと瞼を開けた。その瞳が束の間宙を彷徨う。光の加減か、澄んだ灰色の瞳が僅かに藤色を帯びて見えた。

「クジヨウ、ここにいたか」

小道の先から姿をあらわしたシンカゲに、クジヨウが立ち上がった。その動きに、煙のような花の帳が揺れる。近付いて来るシンカゲをクジヨウが見上げる。その顔が硬質なものとなっていた。張り詰め翳りを帯びた表情が、クジヨウの持つ美しさを隠しているのだと、アワユキは気付いた。

「寝ていたのか？ 顔色が悪いな」シンカゲが覗き込むようにして言うと、クジヨウは僅かに身を引いた。

「少し寝不足なんだ」

「辛いようなら、屯所に行くのはやめるか？」

「大丈夫だ。別に体調が悪いわけじゃないから」

クジヨウは殊更に素気ない口調である。案じる表情はそのままに、シンカゲはそれならいいが、と答えると、門の方向へと歩き出した。二人の姿が完全に見えなくなつてから、アワユキは小道へと出た。胸の内が蠢いていた。吐き気を伴うような、それ。

シンカゲを見た時のクジヨウの表情——全てを覆い隠す鎧のような硬質な表情を浮かべる前、ほんの一瞬クジヨウの顔を過つたものがあつた。まるで焦がれるかのように、眩しいものを見るかのように——そして何かに怯えるように——それは確かにシンカゲへと向けられていた。

アウユキは掌に張り付いた青い花びらを振り落とす。鮮やかな、そして憂うように深いその色彩が、不意に気に障つた。靴の先で踏み躪ると、花弁は小道に汚らしいしみを残した。

その時アウユキが感じたのは、少年への猛烈な嫉妬だつた。自由兵士団に入つてからのシンカゲは、アウユキには知ることも触れることもかなわぬ世界を築いている。だが、クジヨウはアウユキが入り込むことが出来ない領域で、当たり前のようにシンカゲの傍らにいるのだ。クジヨウがシンカゲに向けた表情でさえ、アウユキには不快だつた。

シンカゲは、アウユキだけのものだ。他の者が知らないシンカゲをアウユキは知っている。街の娘がシンカゲのことを騒いでいるのは知っていたが、これまでさして気にもせず、むしろ娘達に憐れみの気持ちさえ抱いていた。それは偏に、シンカゲの中でアウユキが特別な位置を占めると——それが家族に対するものと同じであつても——わかつていたからだ。

だが、クジヨウとシンカゲの間には、アウユキにさえわからないものがある。

「馬鹿らしい」口に出して言う。クジヨウは男だ。何を惑う必要がある。

アウユキは踵を返す。これ以上庭園を散策する気にはなれなかつた。もはや花々には目をやらず、地面を睨みつけて歩く。歩きながら、アウユキは眉を顰めた。苛立ちと不快感の底に、小さく渦巻く疑念が生まれていた。

誰もがクジヨウを男だと信じている。アウユキ自身、間近にクジヨウの顔を見るまではそう信じていた。だが、本当にそれは正しか

ったのだろうか。性から遊離したようなクジヨウの容貌は、男性と
いうよりも女性を感じさせる。例えば顔がはつきりと見えるように
髪を切り、男の身形を女性の衣服に改める。それだけでクジヨウは
少年から少女に変貌するのではないだろうか。

先程見たクジヨウの美しさに胸がざわついた。

（まさか……そんな筈はないわ。ただ単に外見が男らしくないだけ
なのよ）

そもそも、クジヨウが少女なら、何故少年だと偽る必要があるの
か。仮に偽っているとしても、行動をともしにしているシンカゲが気
付かぬ筈がない。

「考え過ぎよ」

己に言い聞かせるようにアウユキは呟いた。疑念を無理矢理胸の
奥に沈め、アウユキは庭園を後にした。

クジヨウは歩きながら、小さく溜息をついていた。無意識に零れ
出たそれに、前に行くシンカゲが気付いた気配はない。

朝食の後、光に誘われるようにして庭園を彷徨い、少し休むつも
りで腰をおろしてそのまま寝入ってしまったらしい。毎夜のように
続く悪夢に、クジヨウはもう五日以上まとともに眠っていなかった。
寝不足に頭の芯が痺れたような感覚がある。

悪夢は、嘗ては頻繁に見ていたが、最近では見ることもなくなっ
ていた。それが何故今になって再び見るようになったのか。発端は、
人身売買組織に魄^{はく}として売られそうになっていた少女——胸を真赤
に染めたその骸を見たことだと、推測は出来ていた。

少女が哀れだった。だが、少女を悼むことは、少女の命に対して
失礼に過ぎるような気がした。そもそも魄という存在さえなければ、
少女があのような目に遭うこともなかったかもしれない。

「本当に大丈夫か？ やはり休んだ方が良くはないか？」

シンカゲの声に物思いが破られた。振り返り、心配そうな眼差し

を注ぐ彼に、クジヨウは大丈夫だから、と繰り返した。

「今日は体術の鍛練はやめておこう。体調が悪かったら、リラのところで眠らせてもらえよ」

頷きながら、クジヨウは僅かに安堵していた。この調子では、体術の鍛練の途中で倒れかねない。シンカゲに、無用な心配はかけたくなかった。シンカゲのことだ。倒れた理由を知れば、何故眠ることが出来ぬのか、それを知ろうとするだろう。夢見が悪いから——などと言える筈もない。

クジヨウは胸元を押さえた。鼓動が速い。寝不足による体調不良だけではない。常になく重く感じる体の奥には、熾火のような不穏な熱が凝っている。ここ数日感じ続けているそれに、クジヨウは不安を覚えていた。岐^きのまま成長を止めた体——その体がはじめて感じる違和感である。

（何でもない。きつと大丈夫だ）

クジヨウは内心に呟き、シンカゲの後を追った。

一方のシンカゲも、注意深くクジヨウの様子を窺っていた。クジヨウは大丈夫だと言うが、やはり顔色が冴えないように思う。

クジヨウが決して己の不調や痛みを訴えようとせぬことに、シンカゲは気付いていた。体術の鍛練でも、滅多に表情を変えない。そのせいで、はじめの頃は鍛練を些か厳しくやり過ぎていたくらいである。今回の捕縛の一件でも、クジヨウ自身が捕縛に加わるようなことは無論ないのだが、シンカゲの動きにあわせて早朝から深夜まで屯所に詰めることになっていた。気付かぬうちに無理をさせていたのかもしれないと、今更ながらにシンカゲは考える。

クジヨウは話していても素気なく、感情を読み取ることが難しい。己の自由を奪っている人間に、そもそもクジヨウが良い感情を持つ筈がない。いまだクジヨウが打ち解けぬのも無理はないと思う。それでも時折、掠めるようにクジヨウが感情を表すことがあった。先

程庭園でクジヨウを見つけた時もそうだ。ほんの僅か、その顔に過ったもの——それが何かシンカゲにはわからなかったが、そのような表情を目にするたびに、クジヨウの内心を知りたいと思う。

——クジヨウを生かしたいなら、我らの中に取りこめ。このリュウドウに繋ぎ止め、真実我らの一員とするんだ——

ふとカガリの言葉を思い出し、シンカゲは憂鬱な心持になった。ラザンとの密約のことを思えば、カガリにとって最大の譲歩だったのだろう。それがわかって、シンカゲは納得することが出来なかった。

クジヨウをリュウドウに繋ぎ止め、リュウドウの人間とする。無論、クジヨウ自身がリュウドウで生きることが望めば良いが、そうでなければクジヨウは何時までも虜囚のままだ。鎖に繋ぐわけではなくとも、命を脅しクジヨウの自由を縛りつけている。

カガリは明確な信念のもと、目的のためならば冷酷な手段も辞さない。割り切ることの出来ない己は、カガリが言うようなリュウドウの中枢に相応しい人材とは到底思えなかった。

（アワユキとのこともあったな……）

シンカゲは複雑な心地になる。

アワユキはここ数年で眩いばかりに美しくなった。リュウドウ一の美女だと、周囲の男達が騒ぐのも頷ける。だが、シンカゲにとってアワユキは、真実妹のような存在である。気が強く、我儘で、自信に満ち溢れているアワユキ——大切に感じてはいても、一人の女性として愛せるか、と問われるとシンカゲには答えられない。シンカゲとて女性を知らぬわけではないが、少なくともアワユキをそのような対象として見たことは一度もなかった。

何故アワユキが己のことを一人の男として愛しているのか、それさえシンカゲにはわからなかった。アワユキに相応しい男ならば他にごまんといるだろう。

——いずれ、心を決めなければならない。

背後に聞こえるクジヨウの足音を無意識に耳で追いながら、シン

カゲは思っ。

その時出す答えによって、シンカゲがこの先リュウドウで生きていくのか否か、それが決まるだろう。

柔らかなまどろみからクジヨウは目覚めた。心地良い温かさに、再び眠りに引き込まれそうになり、クジヨウは慌てて体を起こした。リラの医療所を訪れ、いつものように薬剤調合の手伝いをしていた筈である。それが何故寝台に横になっているのか。

「ああ、そのまま寝ていてもいいのよ」

響いた声に、クジヨウは視線を巡らせた。リラが優しい笑みを浮かべていた。その前で、ムラセがリラに腕を差し出している。

「もう大分良くなったわね。明日からは剣を持ってもいいわよ。でも、くれぐれも無理をしないように」

「わかったよ」

リラは慣れた手つきでムラセの腕に包帯を巻くと、改めてクジヨウに向き直った。

「俺……何時の間に……」

「さつき薬草のより分けをお願いしていたでしょう？ その時に眠りこんでしまったのね。シンカゲが少し寝不足気味のようにだと言っていたけれど、少しどころではなかったんじゃないかしら？」

「すみません。御迷惑をおかけして……」

「ちつとも迷惑なんかじゃないわ」

言いながら、リラは温かな茶をクジヨウに差し出した。受け取り、クジヨウは香ばしい茶を口に含む。

「あなたを寝台まで運んでくれたのはムラセなのよ」

クジヨウは居た堪れない思いでムラセに頭を下げた。ムラセは気にするなとも言うように手を振り、穏やかな笑みを浮かべた。常に笑みを絶やさず決して声を荒げることはないムラセは、春の陽光を思わせる人柄である。時に鋭さを露わにするシンカゲとは対照的だが、ムラセとシンカゲは気が合うのか、ともに行動することが多い。

この分だとシンカゲにも伝わりそうだと思い、クジヨウは小さな自己嫌悪を持て余した。気付かぬうちに眠りこむなど、普段からは考えられぬ失態である。

ムラセが部屋を後にしてから、リラは寝台の端に腰かけてクジヨウの顔を覗き込んだ。

「どう？ まだ辛い？」

「いえ、少し寝たら大分楽になりました」

「寝不足のことじゃないわ。他にもどこかしんどいところがあるのではないかしら？」

漆黒に近いリラの瞳が、まるで全てを見通そうとでもするように向けられている。クジヨウは鼓動が跳ねるのを感じた。数日前から感じている体の不調、まるで体の中心に渦巻く熱が凝っているかのようなそれを、リラは言っているのだろうか。

「本当に大丈夫です。どこもおかしくはありません」

クジヨウの答えに、リラは「そう」とだけ呟いた。懸念するようにクジヨウの顔を見詰め、そして柔らかく笑んだ。

「それなら良かったわ。そのお茶を飲んだら、もう一度眠りなさいね」

慌てて首を振るクジヨウに、リラは子どもを叱りつけるような表情を浮かべた。

「疲れている時は眠るのが一番、無理は禁物よ」

断固とした口調に、クジヨウは反論を諦め小さく頷いた。実際、まだ体は眠りを欲している。リラの温かな雰囲気包まれた診療所ならば、悪夢も呼び起こされないような気がした。

茶を飲み干し器を返してから、クジヨウは再び掛け布に包まれた。急激な眠気に瞼が落ちる。滲む視界の端でリラが案じるような表情を浮かべているのが見えた。憂いを帯びる眼差しが自分に向けられている。それを不思議に思いながら、クジヨウは眠りに落ちていた。

二度目の目覚めは唐突だった。水底から浮き出た気泡が弾けるよ

うに、夢を見ぬ程の深い眠りからクジヨウの意識は現に戻っていた。クジヨウは暫し天井を見詰めたまま、違和感に戸惑っていた。まるでついさつき眠りについたかのような感覚と、目に映る何かがずれている。それが辺りの薄暗さと、天井に映る大きな影のせいであることに気付き、クジヨウは身を起こした。窓を見やると、景色が黒く塗り潰されていた。それが夜の暗さであることに気付くまで、暫しの時間を要した。

「目覚めたか」

かけられた声に、クジヨウは弾かれたように振り向いた。戸口に近い椅子にシンカゲが腰かけ、こちらを向いていた。傍らに置かれた灯のもと、書物を読んでいたらしい。天井に映る影はシンカゲのものだったのだ。

「ごめん、俺……」クジヨウの言葉を、シンカゲは遮る。

「それ程体調が悪いと気付かなくて、すまなかったな。出掛けにもっと注意をしておくんだった」

自分のことで頭が一杯だった、とこれは呟くように言うと、シンカゲは自嘲するような笑みを浮かべた。

「今まで待っていたのか？」

「ああ、よく眠っていたからな。もう大丈夫なのか？」

シンカゲは書物を置くと近付いて来た。クジヨウは頷くと寝台からおりる。夢を見ない眠りは暫くぶりだった。頭の芯が痺れるような寝不足の感覚が消えていた。

「リラとムラセに小言をくらった。お前が気をつけずにどうする、とな」

シンカゲの背後から、「その通りよ」とリラの声が響いた。部屋に入って来たリラはクジヨウの顔を見詰め、一つ頷いた。

「大分、顔色が良くなったわね。シンカゲ、今度こんなことがあったらだめよ」

「シンカゲは悪くないです。俺が自分の体調に気づかなかったただけだから……」

リラはおどけたように片目を瞑ってみせた。

「こんな機会でもなければ、シンカゲにお説教なんて出来ないんだから。とにかくね、シンカゲは何でも強引なの。誰もがシンカゲのように体力があるわけじゃないんだから」

「勘弁してくれ。反省した。これからはもっと気をつける」

小柄なリラに叱られ、神妙に言うシンカゲの姿は何とも微笑ましい。クジヨウも思わず苦笑を洩らしていた。それに、シンカゲがにっと笑った。シンカゲの笑顔に一瞬目を奪われ、クジヨウは慌てて顔を伏せる。

「帰ろうか」

シンカゲが言った。

リュウドウの街はすっかり夜の闇に沈んでいた。夕食の時刻を少し過ぎたあたりか。眠りについたのがまだ昼前だったことを考えると、クジヨウは半日近く眠り続けていたことになる。

真直ぐにカガリの屋敷に戻るものと思っていたクジヨウだったが、シンカゲは少し寄り道をしよう、と言う。

「そんなに離れた場所ではないから、さほど疲れはしないと思うが、辛かったら言ってくれ」

「俺は別に病人じゃないよ。そんなに気を使わなくてもいい」憮然としてクジヨウは言った。

「クジヨウにまた何かあったら、今度はリラの説教くらいでは済まなそうだからな。次に怪我をした時、泣く程痛い薬を使われるのはごめんだ」

「……リラはそんなことをするのか？」

「ああ。一度彼女にひどい暴言を吐いた男がいてな。その後小さな怪我をしたんだが……あの時医療所から響いた男の悲鳴は今でも語り草だ」

シンカゲは遠い目をする。あながち冗談でもなさそうな声音がおかしく、クジヨウは小さく笑った。殊更に感情を殺してシンカゲに

対していた筈が、今は奇妙にふわふわとした心地だった。

シンカゲは緩やかな登り坂を進んでいく。クジヨウは歩くほどに、空へとのぼっていくような感覚に捕われる。

坂の上でシンカゲは歩みを止めた。そこが目的の場所なのか、クジヨウを手招く。クジヨウはシンカゲの傍らに立ち、息を呑んだ。眼下にリュウドウの街が広がっていた。家々に灯る明かりが夜の底を埋め尽くし、まるで星空が落ちて来たようだ。

「一度クジヨウに見せたかった」

言いながらシンカゲは虚空を指差した。リュウドウの街よりも僅かに上、その先をクジヨウは見やった。天空と地上、光が溢れるその狭間に、闇が集っていた。それがリュウドウの南西にある山であることに、クジヨウは気付いた。山の輪郭は夜を切り取り、なお暗い影となつて蹲っている。

「光が見えるか？」シンカゲの言葉にクジヨウは目を凝らした。鋭く天へと伸びる山の影の中に、ぽつりぽつりと灯る光があった。全部で九つ、山の裾野から山頂へと間隔をあけて連なっている。

「あの山は祈りの山と呼ばれている。夜の間に山頂まで登り、朝に願いを唱えると、天に坐す神がその言葉を聞いてくれると信じられているんだ。あの灯は、祈りを捧げる人々が、登攀の途中に立ち寄る休憩所のものだ」

シンカゲの言葉を聞きながら、クジヨウは滲むような小さな光を見詰めていた。それは街の灯とも空の星月とも違う。儚いようでありながら、闇の底で瞬く強さがある。クジヨウはふと古い御伽噺を思い出した。物語では、闇に落ちた竜が天空を目指す。その竜のように、光は天へと伸びていた。

何を思うのか黙っていたシンカゲが、ぽつりと呟いた。

「あの光が刻むのは、祈りの道だ」

祈りの光——人々が刻む祈りの道。胸中に反芻し、クジヨウは唇を噛み締めた。何故か、泣きたい気がした。心が溢れる。堰き止め撓めてきたものが、熱い塊となつてせりあがってくる。シンカゲに

触れたかった。触れて問いたかった。何故、この光景を見せてくれたのか――何故、そこまで優しくしてくれるのか。

――何故、魄^{はく}を憎むのか。その心に秘めている翳りは何か……

だが、問うことは出来なかった。何かに胸を塞がれて、息をするのが苦しい。祈りの光は果てしなく遠く、傍らに感じるシンカゲの温もりが切なかった。

闇を辿る祈りの道を、真直ぐに光を見詰めるシンカゲの端正な横顔を、この先どれ程の時間が流れようと決めて忘れないだろう。心の底に刻みつけるように、クジヨウはそう思った。

スイレンは屯所の廊下を大股に歩いていた。手には街で仕入れたばかりの酒瓶をぶら下げ、向かう先は医療所である。暗闇に沈む廊下の先で、案の定、医療所からは光が漏れていた。戸口から覗き、スイレンは目的の姿を見つける。

「リラ、極上の果実酒を持って来た。一緒に飲まないか？」

作業台で薬剤を混ぜていたらしいリラは、振り返り呆れたように笑った。

「スイレンったら、もう夜中よ」

「そういうリラも、夜中だと言うのにまだ仕事か」

「明日どうしても必要な薬剤なの。でももうほぼ出来上がったわ。入ってちょうだい。折角だし、いただきましょう」

「それでこそ我らが医療兵士殿だ」

スイレンはがたごとと椅子を引きずり、リラの傍らに腰かけた。棚から薬を飲むための器を二つ取り、なみなみと酒を注ぐ。心地良い香りにリラの顔が綻んだ。見た目を裏切り彼女が屯所でも一、二を争う酒豪であることは、誰もが知っている。

「あら、美味しい」

「だろう？ 今評判の酒だ。リラならば気に入ると思っていた」スイレンは言つと、早くも一杯目を空けたリラの器を満たした。

「最近の兵士達は怎なの？ 入隊者が増えたようだけれど」

「ああ、リュウドウの人口が増えているからな。まとめるのはなかなかに骨だ。皆が皆兵士に向いているわけじゃあない。中には問題を起こすためだけに入って来たんじゃないかと思いたくなる者もいる」

「貴女でも苦勞するのね」

「当然だ。こういう時には優秀な人材が欲しいと心底思うな」

「あら、^{ひがしかた}東方の上位兵士はなかなかの粒揃いだと思つていたけれど」

「まあ、な。確かに戦時ならば優秀な者ばかりだ。だが平時に皆の気持ちを纏め、繋がり深めることが出来る者はそうそういない。こればかりは人となりが大きく作用するからな」

スイレンは酒を干すと、小さく溜息をついた。それにリラは目を瞬く。

「シンカゲにはだからこそもつと上に行つてもらいたいんだがな」

「シンカゲを役職に就けることをまだ諦めていなかったのね」

「無論だ。あいつを一兵卒にしておくのは惜しい。何故、ああまでも固辞するのか」

「シンカゲにも何か思うことがあるのよ」

言つと、リラは物思いに耽るように黙り込んだ。その表情にスイレンは問う。

「何か案じることもあるのか？」

「ええ、少しね」僅かに迷う素振りを見せ、リラは続けた。

「クジョウのことが心配なの。シンカゲは少し強引なところがあるし、あまり無理をさせないといいけれど」

「クジョウ？」

「ええ。本当はシンカゲに伝えたいんだけど。あの子にも色々あるようだし……」

スイレンは訝しくリラを見やる。あの子、とはシンカゲのことだろうか。それともクジョウのことだろうか。年齢的に言えば当然クジョウのことに思えたが、時に兵士達を母親のような視線で見守る

リラのこと、しかとはわからなかった。

「どうしたんだ？」

「貴女なら色々と配慮してくれるだろうし伝えておくわね。秘す
には秘するだけの理由があると思うから、ここだけの話にしておい
てほしいんだけど」

意を決したようにリラがスイレンを見詰める。

「クジヨウは男の子ではないわ」

呆氣に取られたスイレンの手から器が滑り落ちた。

「クジヨウは何故、蠱^こ使いになつたんだ？」

シンカゲがクジヨウに問うたのは昼下がり、体術の鍛練を終えて涼んでいる時だった。唐突な問いに、クジヨウは瞬く。風に揺れる髪を押さえ、シンカゲを見やった。二人がいるのは屯所の屋上である。風が渡るその場所は、兵士達の憩いの場となっていた。

「一人で生きていくには、何か職がないとだめだったから。蠱使いなら子どもでも力さえあれば生きていくことが出来ると思つたんだ」
言いながらクジヨウは己の蠱に呼びかけた。応えて蠱が肩の上に姿をあらわす。蠱は身震いし、床の上へと飛び降りた。ちよろちよると動き回る姿は、森から生まれた神秘の存在とは到底思えない。

「森が恐ろしくはなかったのか？」

再度の問いかけに、クジヨウはシンカゲを見やる。真剣な表情だった。ここ数日、シンカゲが時折見せるそれである。何かに思い惑っている様子であることはわかつていたが、この問いもその悩みに関係しているのだろうか。

「どうだろう。普段はそうでもないけど、恐ろしいと感じる時もある。いくら蠱使いでも、森の変動に巻き込まれたら無事ではすまないから」

例えばシンカゲに救われたあの時のように、蠱でも読み取れぬ程の急激な森の変動は、蠱使いにも危険である。だが、クジヨウにとつて森とは、己を守ってくれる存在だった。森の中にいれば、クジヨウは人に追われる恐怖を忘れることが出来た。

人は森を恐れる。森が動く——それは魄^{はく}が身の内に宿す膨大な力を解放したことを意味する。解放された力は大地を奔り、その余波で森の変動が起こるのだ。特に岐^きが魄に覚醒する時、その力の放出は凄まじい。一夜にして一つの街が森に吞まれたという逸話さえある。その力故に、魄は神女^{しんじょ}とも鬼女^{きじょ}とも呼ばれるのだ。

尤も、魄が秘める力は、魄自身にとっても危険だ。あまりに大きな力は魄の命をも削る。故に、魄は己の力を大地に解放するのだ。人よりも遙かに長命な魄ではあるが、力の解放を行わなければ、やがて力に喰われ短命で死ぬという。

嘗て魄と人がともに生きていた時代には、大地ではなく魄に選ばれた人間が魄の力の器となった。分け与えられた力により魄同様長命となり、時に人智を超える力をも操ったという。それが聯れんと呼ばれる存在である。

人々は魄という人外の存在を恐れ、あるいは敬ったが、野望を抱く者達は魄を無限の力の源として利用せんとした。

魄を得た者は覇者となる——聯となることを望んだ者同士で、魄を巡り幾度も血生臭い争いが繰り返された。争いを厭った魄が森の奥に姿を消しても、人はいまだ魄を求め、恐れる。森で生きることを選ばなかった数少ない魄は人に追われ、時には狩られ、今では殆ど生き残っていないという。実際、クジヨウは母親以外の魄と出会ったことはない。魄は伴侶となる聯との間に生涯に一人、岐を生むが、クジヨウは森の外で生きる岐が己だけではないかと密かに考えていた。

「シンカゲも蠱を持っているとムラセに聞いた。蠱使いの端くれだつて」

暗い思考から意識を逸らし、クジヨウはシンカゲに言った。

「あいつ、余計なことを……」シンカゲは憮然とした様子で呟く。

「蠱を持っているといっても、子どもの頃によくわかりもせず懐かせてしまったものだ。ろくに修行もしていないせいで、使いこなせていない」

シンカゲは言いながら無造作に腕を振った。その腕の動きに空気が揺れ、小さな渦となった。次の瞬間渦の中心から一羽の鳥が羽ばたき出た。鷹のような形、胸元と頭は銀、他は漆黒である。シンカゲの肩に止まった蠱の姿に、クジヨウは見惚れた。

「きれいだな。鳥の形の蠱は初めて見た」

「飛ぶことが出来る蟲は珍しいらしいな。森でこいつを見つけた時は、てつきり巢から落ちた雛だと思ったんだ。親鳥がいるだろうと思っ手は出さなかったんだが、気になって毎日見に行っているうちに、何時の間にか俺についていたらしい。蟲だと気付いた時にはもう俺に宿っていた」

「普通は互いに認め合った上で蟲の宿主になるものだと思うけど……」

クジヨウは呆れて言った。無自覚に蟲を宿したなど、聞いたこともない。魄が、己が選んだ人間にしか力を与えぬように、蟲も主と認め定めた人間にしか宿らないものなのだ。

「余程相性が良かったんだな」

「どうか。その割に俺の言うことはあまり聞かない。気ままな奴だ」

「そりゃあ、蟲を使うには信頼関係がないと……」

言いかけてクジヨウは黙った。シンカゲがクジヨウの言葉を気にしている様子はない。それに安堵しながらも、クジヨウは複雑な思いになる。蟲は魄の力を受けた大木から生まれる。いわば魄の力の落とし子だ。魄に何かしらの思いを抱くらしいシンカゲには、どこか蟲を厭う気持ちがあるのかもしれない。蟲は敏感に主の気持ちを読む。シンカゲが心のどこかで蟲を拒絶しているとすれば、当然、蟲を使いこなすことは出来ないだろう。

「シンカゲ、ここにいたか」

響いた声に、二人は振り返った。スイレンの長身が屋上の戸口にあった。背後にはムラセの姿もある。

「中隊長が捜していたよ。新兵達の鍛練計画を練るのに力を貸してほしいとさ」

「ああ、わかった」

シンカゲが立ち上がる。肩の蟲が溶けるように消えた。クジヨウにひらりと手を振って、シンカゲは屋上を出て行った。何となしにその背中を見詰めていたクジヨウは、スイレンの視線に気付く。凝

視に近いそれに、居心地の悪さを感じた。

「何？」問えば、スイレンは肩を竦めた。

「いや、シンカゲが蠱を見せるとは珍しいと思ってね」

「そうなのか？」

「ああ、余程親しくないと見せようとは思わないよ」

これはムラセの答えである。スイレンは何気ない様子でクジヨウの傍らまで歩いて来た。スイレンの視線が何かを探るように向けられていることに、クジヨウは気付かなかった。ムラセの言葉に氣を取られていたのである。

何故、シンカゲは蠱を見せたのだろう。三日前、シンカゲとともに祈りの山を見てから、クジヨウはシンカゲの態度が微妙に変化したように感じていた。それまでも何くれとなくクジヨウを気にかけていたシンカゲだが、どこか一線を引くようなところがあった。しかし、あの夜以来、シンカゲの態度は柔らかくなった。

それとも、そう感じるのは己自身に原因があるのだろうか、とクジヨウは考える。シンカゲを厭うことが出来ず、何時しか心惹かれながらも、クジヨウは常に、シンカゲに必要以上近付かぬようにしていた。そしてシンカゲにも己の領域に踏み込ませぬよう、頑なな態度を貫いていたのだ。それが、あの夜から少しずつ崩れている。先程もそうだ。何故、蠱使いになったのかと——その問いに抵抗もなく答える己がいる。

「シンカゲは己の蠱を嫌っているんだ。だから滅多なことでは出そうとしない」

ムラセの言葉にクジヨウは目を見開いた。

「何故、蠱を嫌っているんだ？」

「シンカゲは魄を憎んでいるからね。蠱は魄に繋がる存在だ」

ムラセ、と警告するようなスイレンの声——ムラセはクジヨウの表情に、慌てたように続けた。

「だからと言って、蠱使いを嫌っているわけじゃない。まあ、それは言わなくてもわかつているだろうけど」

クジヨウは答えず蠱を呼んだ。蠱は僅かに首を傾げ、主の呼びかけに応える。クジヨウの腕を駆けのぼり肩に蹲ると、満足気に欠伸をした。

「よく懐いているな。まるで本当に生きているみたいだ」

「そりゃあ、俺は蠱使いだから」

クジヨウはぼんやりと返した。クジヨウにとって蠱は唯一の仲間だった。たった一人旅を続けた長い時を、蠱の存在なしに耐えることが出来たか、クジヨウにはわからない。

「ところで、シンカゲの鍛錬はどうだ？ 辛いことはないか？」

クジヨウはスイレンを振り仰いだ。

「別に、普通だけど」

「もしきつ過ぎるようなら言ってくれ。シンカゲに加減をするよう伝える」

クジヨウはまじまじとスイレンを見詰めた。氣遣うようなスイレンの言葉は、それまでのどこか皮肉気な彼女の態度からすれば、何とも奇妙である。スイレンはクジヨウから目を逸らす。

「きつくないようなら別に構わん」ぶっきらぼうに言う屋上から出て行った。

「何なんだ」クジヨウは思わず呟く。

「さあ、何なんだろうね」

どこかおかしげなムラセの声音である。ムラセはクジヨウの傍らに腰をおろす。シンカゲがついさっきまでいた場所——にこりと笑まれて、クジヨウは己に嫌気がさした。少しでも、ムラセにそこに座ってほしくないと思った己に。クジヨウは俯く。

「さっきの話だけど、どうしてシンカゲは魄を……？」

憎む、という言葉がクジヨウは口に出ることが出来なかった。

「シンカゲのことが気になるかい？」

優しく問われ、クジヨウは顔を上げる。余程おかしな顔をしていたのか、ムラセが小さく苦笑した。風に乗せるようにして、ムラセはクジヨウから視線を逸らした。遠く、果てしないリュウドウの街

並みを見詰める。

「何故シンカゲが魄を憎むのか、私からは言えない。直接シンカゲに聞くといい。クジヨウにならシンカゲも答えるかもしれない」

笑みを消して、ムラセは言った。

中隊長と部屋に籠り、新しい鍛練計画を練っていたシンカゲは、唐突に騒がしくなった外の様子に顔を上げた。昼の休憩の時分、常ならば屯所は気だるい静けさに包まれている。だが、扉の向こうから聞こえてくるのは、どこか騒然としたざわめきだ。思わず中隊長と顔を見合わせたその時、扉が開かれた。

「シンカゲ！ お前に客だぞ！」 普段ならばまずは名乗ってから扉を開けるのだが、それすら忘れたのか、興奮した顔つきの兵士仲間が戸口で叫んだ。

「客？ 誰だ？」

「いいから、早く来いよ！ 中隊長殿、ちょっとこいつを借りますよ」

「ああ、構わんが……」 中隊長の答えも待たず、兵士はシンカゲの腕を引っ張り部屋から連れ出す。

「おい、一体何なんだよ。俺はやることが……」

「んなことは後にしろ！ 後に！」

引きずられるようにしてシンカゲは広場へと連れて行かれた。広場は兵士達で溢れている。ざっと見ただけでも、屯所中の兵士が集まっているようだった。

「シンカゲだ！」 「おい、はやく通してやれよ！」 方々からかけられる声に、シンカゲは益々戸惑う。兵士達の中をわけもわからず進むと、中心にばかりと空間が空いていた。その中央に佇む乙女の姿に、シンカゲは呆気にとられる。美しく装ったアウユキである。押し出されるような形でシンカゲはアウユキの前に立った。

「シンカゲ」

甘やかなアワユキの呼びかけに、ざわめいていた兵士達が静まる。シンカゲは居心地の悪さに身じろぎした。声を潜め——無論、周囲を固める兵士達には筒抜けだろうが——言った。

「何故ここにいるんだ。すぐに帰れ」

「ごめんなさい。でもどうしても届けたいものがあつたの」

しおらしくアワユキが眼差しを伏せる。それにシンカゲは顔を引き攣らせた。普段のアワユキならば二倍、三倍の言葉を返してくるだろう。それが、今はまるで叱られた可憐な少女のような風情だ。これではシンカゲが意地悪く接しているようではないか。案の定、兵士達が口々に言った。

「おい、シンカゲ！ 折角来てくれたつてのにそんな言い草はないだろう」

「そうだぞ。可哀想に、泣き出しそうじゃないか」

お前達はアワユキの本当の姿を知らないんだ——とは言えぬシンカゲである。渋面でアワユキを見やった。

「届けたいものって？」ぶっきらぼうな物言いに再度周囲から非難の声があがるが、シンカゲはそれを無視する。

「シンカゲのために鍛練着を作つたの。少しでもはやく着てほしくて……」

アワユキは手に持っていた包みをシンカゲに差し出した。シンカゲの顔を見上げ、おとなしやかに目を伏せる。だが、一瞬交わった視線に、シンカゲは内心溜息をついた。アワユキの視線はこう告げていた。——四の五の言わずに受け取れ、と。

「ああ……わかった。その……ありがとう」シンカゲは不承不承包みを受け取る。一体何の茶番だ、と言いたい。だが、さすがに皆の前でアワユキを問い詰めることは出来なかった。

「皆さん、突然にお邪魔をしてごめんなさい」

花のように笑むアワユキに、兵士達が一様に首を振る。それをシンカゲは呆れて見やった。アワユキは再度シンカゲに眼差しを投げると、ふわりと踵を返した。屯所の外へと向かうアワユキを兵士達

は一樣に無言で見送った。その姿が見えなくなると、途端にシンカゲは質問攻めにあつた。

「お前、あの娘とどういう関係だ！」

「どうって、ただの従妹だよ」と、シンカゲ。

「従妹ということはあの娘がアワユキか。噂通りの……噂以上の美女だな」

「ただの従妹が何故わざわざ鍛練着を作り持って来るんだ！」

「それは俺が聞きたい」

「白状しろ！ あの娘とお前、さてはただならぬ関係だな！」

シンカゲはその言葉に呆気にとられ、そして遅ればせながらアワユキの意図を悟っていた。確かにアワユキの様子を見れば、恋人に贈り物を持ってきたいじらしい姿に見える。

「馬鹿を言うな。俺とアワユキは何もない！」

「むきになるところが益々怪しいな。この色男が。街一番の美女の心を射止めやがって」

「くそう！ 何でお前ばかりがもてるんだ！」

埒が明かない。口々に勝手なことを言う兵士達の中をかき分けるようにして、シンカゲは建物へと向かった。とりつくしまがないその態度に追って来る者はいなかったが、背後では一人歩きた憶測が飛び交っている。この分では街に噂が広まるのも時間の問題だろう。あの力ガリの妹、アワユキの恋人が従兄のシンカゲだと。考えるだけでシンカゲはうんざりした。

ようようの体で広場の騒動から抜け出したシンカゲは、廊下で大きく溜息をついた。

「もてる男は辛いな」

かけられた声に、シンカゲは険悪な眼差しを向ける。廊下から今の騒動を見ていたらしいムラセとクジョウの姿があつた。ムラセが人の悪い笑みを浮かべる。

「なかなか似合いの恋人ぶりだったぞ」

「それは嫌味か？」

シンカゲと親しいムラセは、アウユキが実際にはどのような娘か知っている。当然、アウユキとシンカゲの間に何も無いことも知っていた。

「いいや、結構本気だけどね。アウユキの想いを知りながらはつきりした態度を取らなかつたシンカゲが悪い。アウユキもしびれを切らしたというところかな」

「御注釈ありがとう」

皮肉に返しながら、シンカゲは手の中の包みを見詰めた。確かにムラセの言葉は一理ある。アウユキが己に向ける気持ちを知りながら、シンカゲははまだ答えを出していない。

「これで噂が広まれば、群がる娘も少しは減るかもしれんし、良かったじゃないか」

睨みつけると、面白がっているとしか思えぬ笑みを浮かべてムラセは言った。

「じゃあ、私達は医療所に行くから」クジヨウを促してムラセが歩き出す。

遠ざかる二人の姿に、シンカゲは声をかけようとして戸惑う。何を言おうとしたのか、言葉にならない惑いが胸の奥に燦っていた。

今まで誰にも恋をしたことがない、と言えば嘘になる。恋人のよくな関係になつた女性も幾人かはいた。それでもシンカゲには人を愛するという感覚がいまいちわからなかつた。相手の女性と長く続かなかつたのも、シンカゲの気持ちや相手の気持ちに比して冷めていたからだろう。

——そもそも、己は人を愛せぬ人間なのかもしれぬ。

シンカゲはそう思う。愛してもいつか喪う。愛すれば、愛するほど、喪う時の痛みは深い。ならば、はじめから愛さなければいいのだ。それは幼い頃から漠然と抱いていた思いだった。

シンカゲは立ち尽くし、天へと続く祈りの光を思い出していた。夜の底から朝へと向かつて、ただ一つの祈りのために人々は山を登る。祈ることすら忘れた己には、その光があまりに遠く、美しく見

えた。

ふと思う。クジヨウはあの光をどのように感じたのだろうか。言葉の端々から、クジヨウが今までただ一人で生きてきたのかわかる。内心を悟らせぬ硬質な表情の下で、何を思ったのだろうか。問うたところで、クジヨウが己に明かすことはないだろうが。

シンカゲは廊下に落ちる複雑な影の形を見詰める。

心も、未来も、混沌の内にある。シンカゲには何も見通すことが出来なかった。

第四章

公会議が行われるのは街の中心にある中央執政会議場である。リユウドウが街として栄え始めた当初から存在する石造りの建物は、厳めしい雰囲気を帯びている。建物のほぼ中央部にある公会議場では今まさに公会議員達が集い、定例の会議が開かれていた。

淡々と進む会議の中、カガリは椅子にゆったりと座りながら、目の前に集う公会議員達を見詰めていた。公会議員は八人のうち半数を職人組合の代表者が、そしてあとの半数を商業主の代表者が占める。議長は一月交替の持ち回りで、今は職人の代表者の一人が務めていた。

公会議員はいずれもカガリより十以上年長の者ばかりである。さして大きな議題があるわけでもなく、生産状況と商品取引における価格の変動についての報告を読み上げる議長の声ばかりが響いていた。公会議員達の顔はどれも茫洋として掴みどころがない。だが、それが見せかけでしかないことをカガリはよく知っていた。特に商業主から選ばれた者達は、表面上は協調関係を築いていても、決して内心を見せようとはしない。それが商人の在り様と言ってしまえばそれまでのことだが、少なくとも公会議員だけに限って言えば、内心を見せられぬ事情というものがある。

——それも一つだけというわけではない、とカガリは思う。

「本日の議題は以上ですが、他に何かありますか？」

議長が読み上げるための原稿を机に置き、集う面々を見回した。その視線が、束の間カガリの所でとまる。カガリは眼差しだけで答え、おもむろに言った。

「私から一つ、申し上げたいことがあります」

視界の端で商業主の代表者の一人が露骨に顔を顰める。カガリはそれに気付かぬふりで言葉を続けた。

「最近リユウドウに入る原材料に粗悪品が多く混ざっているとの報

告が上がっています。特に鉄鉱石は二割から三割が粗悪品だということ。早急に対策を打つべきではないでしょうか」

「それはいかん。対策が必要ですね」これは議長の言葉である。些か反応が速過ぎるが、仕方なかるう、とカガリは思う。老境に差し掛かった愚直な職人肌の男に、そもそも腹芸は出来まい。

「私はそのような話は聞いておらん。報告と言うが、それは信憑性があるのか？」

言ったのは、先程顔を顰めた男——五十がらみの商業主である。名をクマガヤという。

「はい。鉄鋼職人組合から詳細な報告を受け取っています。ここにありますので、後ほどお渡ししましょう」

「それは用意のいいことだな」

カガリはにこりと笑み、「ありがとうございます」と一言、益々渋面になる相手から目を逸らし、一同を見回した。

「私の提案といたしましたは、二点あります。一つには、現在リュウドウに流れ込む原材料の検査を担っている検査所係官の異動を行い、より正確な技量を有する者に変えること、そしてもう一つは、今後粗悪品が流入せぬよう検査の段階だけでなく、原料の調達に関する契約をより厳密に審査する審査機関を創設することです」

「審査機関だと」密やかなざわめきが起こる。

「人選はどうするつもりだ。今の係官も厳正な審査の上選んだ筈だ。人をかえるとなると他の商業主や職人組合も黙っていないぞ」再びクマガヤの声。カガリはクマガヤを正面から見据える。

「鉄鋼はリュウドウの基幹を支える産業です。その中でも特に武器生産技術が抜きん出ているからこそ、リュウドウは他国と伍しているのです。しかし原材料そのものが粗悪となれば、リュウドウの基盤を揺るがしかねません。早急に改善しなければなりません」

これに反論は出なかった。カガリの言葉が的を射ていたせいである。

「係官の人選に関しては職人組合の皆様をお願いしたいと考えてお

ります。審査機関につきましては、公会議員の商業主と職人組合の代表者から数名、そしてこちらで職人組合に専門的な知識を有する職人を複数名選んでいただきたい」

「それでは商業主の意向は反映されない！　これまで係官の任命権は我ら商業主にあったではないか！」

「そもそもそれが間違いだったのです。商業主は物を売るのが仕事、原材料の検査に関しては素人同然です。実際に原材料から物を作り出すのは職人、ならば職人が係官を選ぶのが道理でしょう」

「だが検査係官は原材料の良し悪しだけがわかればいいというわけではないぞ。原材料の価格に関しても妥当なものか否かを見極めねばならん。そのようなことが職人に可能とは思えん」

「それは聞き捨てなりません！」職人組合の代表者達から、クマガヤに非難の声が飛ぶ。カガリは身ぶりですれを抑え、言った。

「無論、全てを検査係官に任せるのは負担が大きすぎます。ですから、審査機関を置くのです。検査係官は原材料の厳密な検査を、そしてその結果を踏まえ、審査機関で価格を含めた契約全般の検討を行います。専門的な知識を有する職人からの意見を聞きながら、我ら商業主も精査に当たります。そうすれば漏れ落ちはありません」

理路整然としたカガリの言葉に、職人組合の代表者達が賛同の声をあげた。クマガヤ以外の商業主達も賛意をあらわす。

「クマガヤ殿、いかがですか？」

クマガヤは真実憎々しげな表情をカガリに向けたが、既に趨勢は決まっている。不承不承といった様子で頷いた。

「では職人組合の方で検査係官と審査機関に参加する職人の選定を行うこととします。他に何かある方はいますか？」

議長の言葉に答える者はおらず、公会議は終了した。

中央執政会議場を出たカガリは、クマガヤに呼び止められた。でつぷりと突き出た腹を揺すりながら、クマガヤが近付いて来る。

「いやはや、またしてもしてやられたな」

「何のことでしょう」カガリは立ち止って相手の顔を見やる。

「惚けることはない。鉄鋼組合からの報告書といい、議長の様子といい、どうせ職人組合の方にはじめから根回しをしていたんだろう」
「さあ、何のことやら」

あからさまに惚けるカガリにクマガヤは舌打ちでも漏らしそうな表情である。商業主と職人組合が元来険悪な間柄であることは周知の事実、そのような中で例外的にカガリだけが職人組合と密な繋がり築いているのは誰もが知っている。それこそがカガリの強みであり、他の商業主達から抜きん出る要因の一つだ。

「職人組合にばかりすり寄っていると、そのうち、足元をすくわれるぞ」

脅しともとれるクマガヤの言葉だったが、カガリは涼しい顔を崩さない。笑みを浮かべて言った。

「そういえばクマガヤ殿は御存じですか？　どうやら粗悪品を見逃していた検査係官の懐には、最近法外な金が入っていたようですよ。係官の職だけでは到底得ることはかなわぬような額だとか。どうにも奇妙な話ですね。しかも原材料の提供元とリュウドウの商人の間で裏取引が行われ、粗悪品が流れるよう手配すれば、商人が提供元からこれまた莫大な金銭を受け取るようになっていた、とか。それが仮に真実であれば、係官はその商人に買収でもされていたんでしょうね」

「それはまたひどい噂だな。だが噂は噂だ」

「ええ、無論根も葉もない噂だと信じておりますが、もし真実ならばその商人はただでは済みますまい」

カガリの言葉に沈黙が落ちる。クマガヤの表情に一瞬、閃くように憎悪が浮かび上がった。カガリに顔を近付け、クマガヤは低く囁いた。

「忠告しておいてやろう。若造が、あまり賢しらになるものではないぞ」

言つや、クマガヤは道に止められた馬車へ歩み寄ると、その中に

姿を消した。騒々しい音をたてて走り去る馬車を見送ることなく、カガリは己の屋敷へと向かった。

クマガヤが粗悪品の一件に絡んでいることは間違いない。だが、それを明らかにすることは難しいだろう。海千山千の古狸が、そう容易く尻尾を出すわけがない。

（打撃を与えることが出来ただけ、よしとするしかあるまいな）
カガリは思う。

クマガヤは本来己が潤うことだけを求める男だ。公会議員になるのもそのため。クマガヤが公会議員に選出されるためにばらまいた金よりも、己に便宜をはかってもらおうとする商人達からクマガヤの懐に転がり込む金の方がはるかに多いだろう。公会議員制度がもたらす悪弊である。

公会議員の中で最も力を有するのがカガリであることは自他ともに認める事実だが、いまだ旧態依然とした体制にしがみつく商業主は多い。クマガヤはその典型だ。カガリはそのような輩をこのままのさばらせておくつもりはなかった。リュウドウに変革をもたらず、その思いに迷いはない。

足早に進むカガリの顔は、固い決意に引き締まっていた。

リュウドウの四方に配置された兵士団が一同に会し、武術大会が開催される。そのことをクジョウが知ったのは、武術大会が開催される僅か五日前——体術の鍛練の後、シンカゲが発した「クジョウも出場してみるか？」という言葉がきっかけだった。

「武術大会!？」

目を丸めたクジョウに、シンカゲは頷く。

「ああ、毎年初夏に開催される。どの屯所が最も優れているか試されるわけだから、皆思い入れが強い」

そういえば、少し前から兵士達がどこか落ち着かない様子だった、とクジョウは思う。だが、体術の鍛練以外は医療所に籠っているた

め、武術大会のことなど全く知らなかったのだ。

「俺が、そこに出るのか？　まだ全然体術をものに出来ていないのに……」

「試合はそれぞれの階級や段階ごとに行われる。クジヨウのようにまだ鍛練をはじめて間もない者達だけの組で試合に出れば、それほど実力の差はないと思うぞ」

シンカゲはクジヨウの表情に苦笑する。

「別に強制じゃないから、出るかどうかは自由だ。クジヨウは正式な自由兵士というわけでもないしな。ただ、力試しのいい機会になる。どれ程力がついたか、試合に出ればわかるからな。出てみるか？」

喉元まで出かかった否、という言葉をクジヨウは呑み込んだ。以前ならばすぐにでも断つただろう。だがその答えが出ない。何故なのか己でもわからぬまま黙り込んだクジヨウに、シンカゲは言った。「今すぐ答えなくてもいい。出る気があるなら言ってくれ。三日前までには出場者を届け出ることになっているから」

「……わかった」

シンカゲは、よし、とでも言うようにクジヨウの肩を叩くと離れて行った。その背を見送り、クジヨウは小さく溜息をついた。

シンカゲの鍛練を受けるようになって二箇月ほど、基礎は身についてきたが、それでも未熟であることには変わらない。防衛術はまだしも攻撃術に関してはどうしても身が疎んでしまふ。勘は悪くない、とクジヨウを評するシンカゲからは、何故攻撃に転じると途端に動きが鈍るのか、と首を傾げられていた。

他者に痛みを強いることを厭うという、どうしようもない己の性さがに原因があるのだと——到底シンカゲには言えぬクジヨウである。

やはり断るべきだ。クジヨウは思う。おそらく屯所を出る時までシンカゲと顔を合わせる機会はあるまい。屋敷へ戻る時に、出場しないことを伝えようと心に決めた。

夕刻、屯所の門に向ったクジヨウは、シンカゲの姿を見つけ駆け寄った。

「シンカゲ」呼びかけると、笑みが向けられる。並んで歩き出し、クジヨウは早速切り出した。

「あのさ、昼間に話していた武術大会のことだけど」

と、その言葉が唐突に響いた澄んだ声に遮られた。道の向こうにアワユキがいた。

シンカゲの名を呼び歩み寄ってくるアワユキに、クジヨウは続く言葉を呑み込んだ。道行く人々が、アワユキを振り返る。クジヨウも、アワユキの美しさに見惚れていた。結いあげられ柔らかな光沢を放つ髪がアワユキの容貌を引き立たせ、女性らしい体の曲線を優美に浮き上がらせる衣が、彼女の動きにあわせて揺らめく。シンカゲに向けられた表情が、尚更にアワユキの魅力を引き出していた。

「どうした」引き比べ、何とも素気ないシンカゲの言葉である。

「迎えに来たのよ」拗ねたような口調でアワユキは言う、シンカゲの腕を引いて歩き出した。シンカゲがさり気なくアワユキの手から身を引くと、アワユキの表情に一瞬激しい色が奔った。クジヨウは慌てて目を逸らす。自分一人がとんでもない邪魔者になった気分だった。

アワユキは再び、シンカゲに華やかな笑みを向けた。

「シンカゲ、今年の武術大会では必ず一番になるわよね。去年はもう少しのところで二位だったから、今年こそ優勝してね」

「そう簡単にはいかない」

「いいえ、シンカゲなら必ず優勝出来るわ。少なくとも北方きたかたの連中には勝ってもらわなくちゃ。あの連中、本当に腹が立つんだから。後ろ盾にクマガヤ様がいるからって、大きな顔をしちゃって」

「おい、アワユキ」

嗜めるシンカゲの口調を気にした様子もなく、アワユキはシンカゲ越しにクジヨウを見やった。

「あなたも武術大会には出るの？」

「まだ、決めていない」

「あらそうなの。ねえ、シンカゲ。私精一杯応援するわね。絶対負けちゃだめよ」

「わかったよ」

どこか呆れたような、しかし柔らかなシンカゲの口調である。アワユキは嬉し気に微笑むと、「約束よ」と囁るように言った。

二人から少し遅れて歩いていたクジヨウは、周囲の人々がシンカゲとアワユキの姿を、ちらちらと見ていることに気付いた。少し前、アワユキが屯所までシンカゲに会いに来た一件は、屯所内部だけでなく街の人々にも広まっていた。カガリの身内としてだけではなく、その容姿でも注目を浴びる二人である。二人が恋人同士だということしやかな噂は、今では真実として人々に信じられている。

クジヨウは、実際には二人が恋人同士ではないことを知っている。今のところアワユキの一方的な片思いであるらしい。だが、まるであつらえたような二人だと思う。並び歩く姿は美しかった。

互いが互いのためにあるような——そう思い、胸が塞がれたように、息が詰まった。

（馬鹿だ。何を辛く感じる必要がある……）

心中に呟く。己自身の愚かさ唇を噛み締めていた。辛く感じるのは、己がアワユキと同じ線上にいたいと思いついてるせいだ。己とアワユキとは立つ土台がそもそも違う。遠くかけ離れた地平で、二人を見詰めているだけだ。アワユキのように、シンカゲに微笑みかけることは出来ない。そして、シンカゲがアワユキに向けるような笑みを、クジヨウに向けることはないだろう。

やがて屋敷が近付くと、アワユキは弾む足取りで門の中へと駆けこんで行った。見ると、カガリの姿が扉の前にある。クジヨウがカガリを見たのは数える程、言葉を交わしたことさえない。兄妹で楽し気に語り合う姿を見ながら、クジヨウはシンカゲへと近付く。

「ああ、今日は公会議の日だったか」シンカゲは呟き、思い出したようにクジヨウを振り返った。

「クジヨウも、武術大会では応援してくれ。去年二位になったせいで今年こそ勝てと周りがうるさくてかなわん」

「俺も出るよ」

シンカゲが目を瞬いた。意図せずに零れ落ちた言葉に、クジヨウ自身も驚いていた。あれ程断ろうと思っていたものを――だが、すぐに心を固める。

「俺も武術大会に出る」繰り返し、シンカゲを見上げる。シンカゲは暫く無言だった。クジヨウの煮え切らぬ態度に、出場はしないものと思っていたのかもしれない。と、シンカゲが大きく笑んだ。

「そうか」ただその一言、向けられる瞳の柔らかさに、クジヨウは顔を伏せた。

これだけで満足すべきなのだ。これ以上を望むべきではないのだ。
――望めよう筈もないのだ。

何時か、この地を去る時に、シンカゲの笑顔を胸に刻んでいれば、それでいい。

クジヨウは眼差しを上げる。次第に日が長くなり、夕刻とはいえ空は明るい。遠くたなびく細い雲が微かにオミナエシの花の色を帯びていた。

第四章（後書き）

物語が予期せぬ方向に動き出しました。カガリの部分、はじめは全く考えていなかった展開です。でも、こういうことって考え出すと楽しくて、ついつい広げてしまいます。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

武術大会に出場するというクジヨウの決断は、スイレンを驚かせたらしい。珍しく、スイレンは医療所のクジヨウの元へと顔を出した。

「武術大会に出るらしいな」

戸口に凭れかかりながら言ったスイレンに、クジヨウは薬剤を混ぜる手を止めぬまま答えた。

「うん。そうだけど」

「まあ、クジヨウが武術大会に？ どうしてなの？」

リラが横合いから口を挟む。クジヨウは手を止める。クジヨウが出場することはそれ程に奇妙なことなのだろうか。

「正式な自由兵士じゃないと出れないのか？」シンカゲは支障ないと言っていたが、違うのだろうか。思わず問うと、スイレンとリラは顔を見合わせた。

「別にそれは構わないんだが、怖くはないのか？ まだ一度も試合をしたことがないだろう」

「うん。だからシンカゲが今日から試合形式の鍛練に切り替えてくれた。本番までにはそれなりの動きが出来るようになるって言うだけだ……」

「……そうか。シンカゲがそう言うのならいいが」

言いながらもスイレンの口調はどこか煮え切らない。だが、それ以上何も言うことなくスイレンは去って行った。怪訝な思いのままその姿を見送ったクジヨウに、リラが問うた。

「クジヨウ、体調の方は大丈夫なの？」

「大丈夫です」

反射的に、クジヨウは偽りの言葉を返していた。

「そう？ それならいいけれど」

リラの案じる眼差しに、クジヨウはちくりと胸が痛んだ。何時か

のように悪夢によつて眠りを奪われることはなくなつていたが、同時期にはじまつた体の奥底に感じる違和感は続いていた。リラはそれに気付いているのかもしれない。だが、体の変調を認めることがクジヨウには出来なかった。そうしてしまえば、必死に押しとどめている不安が一気に噴き出しそんな気がするのだ。

体の奥で不穏な熱は胎動するように燦っている。まるで内部で何かが動き出したかのように――まるで何か新たなものが生まれ出ようとしているかのように。岐きという己の殻を破つてあらわれるもの――それは一つしか考えられなかった。

（そんな筈ない。ちゃんと今までも抑えられていたんだから）

クジヨウは己に言い聞かせ、耳飾りに触れてその感触を確かめた。たった一つの形見――母親が魄はくの力の全てを注いでつくりあげたそれが、必ずクジヨウを守ってくれる筈だ。とうに魄に覚醒していてもおかしくはない年月を生きてきたクジヨウがいまだ岐でいられるのは、耳飾りがあればこそだ。それとも時を止めて生きる弊害が、どこかで生じているのだろうか。

「ねえ、クジヨウ、無理をしてはだめよ。辛い時に頑張り過ぎたら、もつと辛くなるだけなんだから」

リラの声は柔らかく、クジヨウは頷くことで己の顔を隠した。心の奥底まで見通されたような気がしていた。

武術大会に参加するのは、己の意地なのかもしれない、とクジヨウは考える。きっかけはアウユキ――シンカゲを想う彼女が唇にのせた一言――約束。

シンカゲを応援すると言つた彼女に、勝つと答えたシンカゲの、その約束だ。兄と妹のような、無邪気な程の遣り取りは、しかしクジヨウに否応もなく己が異邦者であることを知らしめた。決して踏み込むことの出来ぬ、絆を感じさせた。それは家族の温もりであり、男女の艶を含んだ駆け引きだったかもしれない。それを得たいと願うことさえクジヨウには出来なかったが、決して得ることの叶わぬものを見たくはなかった。アウユキが望む約束、それを叶えるシン

カゲを、アウユキの傍らで見たくはなかったのだ。それならばむしろ、男としてシンカゲの傍らに立っていたかった。

（本当に馬鹿だ……）

押し込めても押し込めても湧きあがるシンカゲへの想いが、クジヨウは苦しかった。何時の間にかこんな風になってしまったのだろうか。いつそ得ることの出来ないものへの執着と割り切ってしまう楽なのか――。それとも得ることが出来ぬとわかっていいるからこそ、これ程に焦がれるのだろうか。

――決して誰のことも愛さないと決めていたのに。

この場所はあまりに温かい。リュウドウに來た当初、あれ程求めていた孤独が、今はひどく恐ろしかった。それでも、はやくリュウドウを去らねばならないと、クジヨウは思い始めていた。

これ以上、心を染めてはならない。

医療所を後にしたスイレンは、真直ぐにシンカゲのもとに向かった。シンカゲは剣術の鍛練が行われる道場で、仲間達と語らっていた。武術大会が近付き、兵士達は己の技を磨くのに余念がない。道場はむっとした熱気が立ちこめている。最下級の一兵卒は単に兵士と呼ばれるが、その中にも技量に応じた位があり、道場に集うのは最も腕が立つ者達である。シンカゲの実力は兵士のそれをはるかに凌駕しており、本来ならば上官が担う兵士達の鍛練を任されていた。「ちょっと、シンカゲ」シンカゲはスイレンの呼びかけに近付いて来る。スイレンは言葉を選びかね、結局直截な物言いになった。

「クジヨウのことだけど、武術大会に出場するのはやめた方がいいんじゃないかい？」

「何故だ？ クジヨウはやる気だ。それにこれから試合をして力を試してみるのはいいことだと思う」

「そうなんだけどね。でも試合なら別でも出来るじゃないか。武術大会は屯所ごとの対抗意識が強くて、荒っぽい試合が多くなる。クジヨウには少しきついんじゃないかと思ってね」

「それはそうだが、だからこそ実戦に向けた試合が出来る。クジヨウは筋がいい。それ程心配することはないと思うが」

屈託のないシンカゲの物言いである。少し前のスイレんならシンカゲと同じように考えただろう。だが、今はシンカゲが知らないことを知っている。リラに告げられた言葉——クジヨウが男ではない、というそれがスイレんの心に引っかけかかっていた。

武術大会の試合は、階級ごと、性別ごとに行われる。クジヨウはこのままでは男の組に割り振られる。初心者とはいえ、いや、むしろ初心者だからこそ、スイレんには懸念があった。まだ技量がおぼつかない兵士は往々にして我武者羅に相手を攻めることがある。それが、時に思わぬ怪我に繋がったりもするのだ。特に力任せの未熟な男兵士は性質が悪い。

クジヨウの鍛練を見たことがあるスイレんは、クジヨウの勘の良さに気付いてはいたが、もともとの性質なのか、クジヨウには相手を凌駕し倒そうとする激しさが無い。クジヨウの体術は、型としては美しいが、武術大会のような試合ではそれがかえって不利になるだろう。

「クジヨウが怪我をせぬよう、あんたが気をつけるならいいけど……」

「スイレんがクジヨウのことを案じるとは珍しいな。敢えて距離を取っていると思っていたが」

シンカゲが首を傾げる。それにスイレんは内心恨めしい思いになった。面倒なことを押しつけられたと思う。彼女とてリラの言葉がなければ、クジヨウに関わるつもりはなかったのだ。

リラにクジヨウが男ではないと言われてから、スイレんは注意深くクジヨウの様子を見守ってきた。言われてみれば、確かにクジヨウは同年代の少年よりも線が細い。これまでさして気にとめていなかったが、どこか中性的で繊細な顔立ちが女性としても美しいものだ。だが、華奢な体つきに、女性らしさを感じることはない。稚い少女のような体型の女性ともまた違う、それは不思議に性を感じさ

せぬ細さだった。

シンカゲが毎日のように体術の鍛練をしていながら、クジヨウが男ではないということに気付かぬのも無理はないだろう。男ではないと言われればそうかと思うが、かと言って女とも確信が持てない。クジヨウは、いわば性そのものから遊離したような姿形をしているのだ。

リラが間違っているのではないか、とは思わない。彼女が特別な目を持っていることをスイレンは知っている。リラが、クジヨウが男ではないと言うならば、それは間違いないのだろう。シンカゲにいつそ本当のことを言ってやろうかとも思ったが、女が男と偽り生きてるのは何か余程の事情があつてのことかもしれない。クジヨウが秘していることを、勝手に他人に告げることは躊躇われた。スイレンはもう一つの用件を思い出す。

「そうだ。シンカゲ、今年は中隊長の枠で出てもらうからな。一つよろしく」

シンカゲが顔を顰めた。何か言いかけるのを、スイレンは遮る。「反論は受け付けないぞ。師団長自らが下した決定だからな。もう届け出も済ましてある。三位以下になるうものならただでは済まさん、との長のお言葉だ。心してやれよ」

それだけ告げると、憮然としたシンカゲを残しスイレンは道場を後にした。

リュウドウの位を持たぬ兵士の中で、おそらくシンカゲに敵う者はいない。だが、階級を飛び越えて一兵卒を上位兵士の試合に臨ませるなど、^{ひがしかた}東方の長も思い切ったことをするものだ。何も今にはじまったことではないが———そう思いスイレンは苦笑を浮かべていた。去年も、シンカゲは兵士の枠ではなく小隊長の試合で二位になった。それからの彼の成長の具合を見れば、中隊長の中でも十分に伍していけるだろう。

クジヨウのことは案じられるが、シンカゲがついていれば大丈夫か、とも思う。スイレンはひとまず懸念を忘れることにした。

だが、スイレンの与り知らぬところで、シンカゲはクジヨウの性別の秘密を知ることとなる。

武術大会まで二日を残すまでになった日、シンカゲはムラセから屋上に呼び出された。一人で来てほしい、という。改まって何の話があるのかと訝しく思いながら行くと、ムラセは慎重な口調で切り出した。

「今度の武術大会だが、シンカゲはクジヨウを本当に出場させるつもりなのか？」

これにシンカゲは驚いた。まさかクジヨウの名前が出るとは思っていなかったせいもあるが、同じようなことを数日前にスイレンに言われたからだ。

「スイレンにも似たようなことを言われたが、出場を決めたのはクジヨウだ。別に問題があるとは思えないが」

「そうか……スイレンが……。やはり思い違いではなかったかな」
呟くようにムラセが言う。それにシンカゲは益々わけがわからなくなる。

「何なんだ？ 言いたいことがあるならはっきり言ってくれ。クジヨウが出場することに何か問題でもあるのか？」

「私も確信を持てずにいたが、やはり推測は当たっていたかもしれないな」

ムラセは声を潜めるようにして言った。

「シンカゲは、クジヨウが男ではないかもしれないと思ったことはないか？」

「は？」シンカゲは些か間の抜けた声をあげた。まじまじとムラセを見やる。常に穏やかな笑みを絶やさぬムラセは、ひどく真剣な表情になっていた。

「何を言っている。クジヨウは男だろう。いくらなんでも女なら体術の鍛練で組み合っている時にわかる」

「確かにそうだが、少し前からどうもクジヨウが男ではないような気がしてならないんだ」

「そもそも女には見えんだろう」

「間近にクジヨウの顔を見たことはあるか？」

「そりゃあ、毎日見ている」

「そうではなくてだな……そう、例えば寝顔、とか」

ムラセは言いづらそうに続ける。シンカゲは何とも奇妙な心地で、目の前の男を見詰めていた。シンカゲよりも一つ年上のムラセは、沈着冷静という言葉が服を着て歩いているような男だ。戯れにも軽はずみなことは口にしない……筈だ。

「寝顔は……あるにはあるが、間近で見たわけじゃない。なんだ？寝顔がどうかしたのか」

「いや、寝顔のことは忘れてくれ。とにかく、私はもしかするとクジヨウは男ではないのではないかと思っている。もしそれが正しければ、武術大会には出させない方がいい。特に男兵士の初心者部門は怪我が絶えないからな」

どうやらムラセの中でクジヨウが男ではない、ということは決定されているらしい。シンカゲは信じられぬ思いだった。もしムラセの言う通りならば、毎日クジヨウと接している自分が気付かないことがあるだろうか。シンカゲの思いを読んだように、ムラセは言った。

「スイレんもクジヨウが試合に出ることを気にかけていたなら、私と同じことを思っているのかもしれない。彼女に聞いてみるといい」

「……ああ、そうしてみる」
半ば茫然としながら、シンカゲは頷いていた。

クジヨウは女なのか、そう問うた時のスイレンの表情はなかなかの見物だった。だが、シンカゲ自身も混乱の真中であって、そう思ったのは後のことである。

二人はスイレンの執務室にいた。屯所でも位の高い兵士には一室が与えられている。スイレンの部屋は彼女の気質を反映し、きれいに整頓され無駄な装飾は一切ない。話す場所にそこを選んだのは、誰かに聞かれるのを避けるためである。

スイレンはシンカゲの問いに答えず、「少し待ってろ」とのみ言っ
て部屋を出て行った。程なくして戻ったスイレンは、リラを伴っていた。

「シンカゲがクジヨウは女なのか、と。あたしはよくわからん。リラから説明してやってくれ」

言うや黙り込んだスイレンである。困り顔のリラが、シンカゲとスイレ
ンを見やり、そして小さく「しょうがないわね」と呟いた。

「あなた、クジヨウのことを男の子ではないと思っているの？」

「いや、俺は男だと思っているんだが、ムラセが女ではないか、と」

「まあ、ムラセが。どうしてそう思ったのかしら」

「何か寝顔がどう、とか言っていたが、よくはわからない」

リラは一人納得したように頷いた。

「そういえば、クジヨウが眠りこんでしまった時、ムラセにクジヨウを寝台まで運んでもらったんだっ
たわ。その時に気付いたのね。」

ムラセはいつも人をよく見ているから」

「リラ、クジヨウは男ではないのか？」

「ええ、クジヨウは男の子ではないわよ」

あっさりとリラが言った。シンカゲは黙り込む。驚きのあまり何も言葉が浮かばなかったのだ。ムラセが思い違いをしているのだと、シンカゲは半ば確信していたのである。

「女性……なのかな？ とてもそうは思えないぞ。体つきが違う」

漸く出たシンカゲの言葉に、リラが笑う。

「色々な人が世の中にはいるものよ」

「少なくとも、シンカゲが今まで対してきた女とは違う、ということだな。付き合ってきた女にしても、皆年上だったろう」

スイレンが可笑し気に言った。このような時でなければ言い返しているところだが、生憎とシンカゲはスイレンの相手をする心境ではなかった。

「クジヨウは少しだけ成長が遅れているのね。今でもきれいな子だけれど、成長したらきつと誰もが振り返るような美しさになるわよ」女性として立つクジヨウの姿が、シンカゲには咄嗟に想像がつかない。だが、リラが偽りを言わないことは、よく知っていた。

「女性なんだな」

自らに刻みつけるように言う。これにリラは答えなかった。なおも困ったような表情を浮かべ、シンカゲを見詰めている。

「それなら何故男として生きているんだ？」

「それはわからないけれど、何かやむにやまれぬ事情があったのではないかしら」

おっとりとリラは言った。その言葉にシンカゲは改めてリラを見る。やる。

「リラはクジヨウに聞いて知ったわけじゃないのか」

「ええ、そうよ。直感でわかったの。そうでなかったら、私も確信は持てなかったわ」

「そうか」シンカゲは呟いた。

「やけに落ち着いているな」もっとシンカゲが取り乱すものと思っていたのか、意外そうなスイレンの声音である。

「そういうわけじゃないが……」

落ち着いているわけではない。驚き、混乱している。だがシンカゲは、クジヨウが男ではない、という事実そのものについては意外なほど冷静に受け止めていた。不思議なのはあれ程毎日クジヨウと

接しながら、女性だと気付かなかったことである。そしてこれからクジヨウとの関係が変わるかというところ、そうは思えない。そもそもクジヨウが男として生きているのだから、真実の性がどうであろうともクジヨウを女性扱いする気にはなれなかった。クジヨウとて、このような形で周囲に真実が知れるのは望まないだろう。

「で、シンカゲ、武術大会はどうするんだ？　女だとわかっててもクジヨウの出場を認めるのか？」

シンカゲは考え込んだ。クジヨウが男ではないとなると、スイレンやムラセが何を懸念していたかがわかる。確かに技も戦いに臨む態度も未熟な男兵士の中に、いくら女性扱いせぬとはいえクジヨウを入れるのは躊躇われる。しかし、とシンカゲは思う。そもそも、今回の出場はクジヨウ自身が決めたことだ。

「認めるも何も、クジヨウが己で決めたことを俺がどうこう出来るわけじゃない。クジヨウだって、男と戦うことは十分に覚悟の上だろう。女だから、という理由で出場をやめさせるのは、男として生きるクジヨウに失礼だと思う。そもそも、クジヨウが女であることを秘している以上、俺達もクジヨウには男として対するべきじゃないか？」

「いやに柔軟じゃないか。あたしなんかクジヨウが男ではないとわかって、どれ程うるたえたか」

「まだ驚いてはいるよ。ただ……男だろうが女だろうが、クジヨウはクジヨウだ。何も変わらない」

何気なく言った後に、シンカゲはその言葉が全てであることに気付いた。

クジヨウはクジヨウだ。男であろうが女であろうが、己がクジヨウに対して抱く印象は変わらない。

「ふうん、そういうものか？」

「ああ、そういうものだと思う」

静けさの中にも凜とした芯の強さを感じさせるクジヨウの姿は、クジヨウの人間性をあらわすものであって、性別によって左右され

るものではないだろう。そして時折、掠めるようにしてあらわれる翳りは、己の性を秘するという生き方故のものであったか、とシンカゲは考える。

「シンカゲ、私からお願いがあるの。クジヨウは自分でも自覚しないままに、少し無理をし過ぎるところがあるわ。一番近くにいるあなたが、気をつけてあげてほしいの」

リラが言った。シンカゲはそれに頷く。

クジヨウが女性であることは胸に秘めておけばいい。これまでと何一つとして変わることはない。シンカゲはそう思っていた。

武術大会が行われるのは、リュウドウの街の中心部、自由兵士団本部の演習場である。兵士達にとって力試しの場である大会は、街の人々としては娯楽となっていた。毎年、多くの人々が観戦に訪れるが、それが尚更に各屯所を奮い立たせる結果となっていた。

武術大会の前日、クジヨウはシンカゲに連れられて実際に試合が行われる演習場へと向かった。

「どのような場所で戦うか見ておいた方がいい。本番はやはり緊張するからな」

言いながら、シンカゲは慣れた足取りで演習場の門をくぐった。後に続きながら、クジヨウは辺りを見回した。外からは高い壁で見ることが出来なかったが、内部は広い楕円形になっていた。砂地の地面には赤い粉で線が引かれ、明日の試合に向けていくつかの区画にわけられている。それぞれの区画で試合が行われるのだろう。てつきり外と同じ垂直の壁が囲んでいるものと思っていたが、ぐるりと周囲を取り巻いて階段状の観客席が設けられている。

演習場には、同じような目的で事前に試合会場を見に来たのか、ちらほらと人の姿があった。見たことのない姿は、他の屯所の兵士達だろう。

と、その時シンカゲが立ち止った。つられるように立ち止りその

顔を見上げたクジヨウは、思わず息を呑んだ。シンカゲが目を細めている。その横顔は、普段の彼からは想像もつかない鋭い気配を纏っていた。シンカゲの視線を追ったクジヨウは、前方から近づいて来る男達に気付いた。中心の一人が、シンカゲに声を放った。

「よう、久しぶりだな、シンカゲ」

「お前に親し気に名を呼ばれたくはないな」突き放すような硬質な声音。言われた方はわざとらしい笑い声をあげた。背後の男達に聞かせるため、というようにクジヨウには思えた。

「さすがカガリー族様だ！ 俺達には名も呼ばれたくないとなさ！」

シンカゲは表情一つ動かさず、男を見詰めている。挑発には乗らぬと、沈黙の内に示していた。男の顔が腹立たしげに歪む。その眼差しがクジヨウへと移った。

「えらく可愛らしいのをつれてるじゃねえか」

シンカゲが素早く一歩前に進み出ると、背にクジヨウを庇うようにして立った。

「口で喚くことなら誰でも出来る。俺に文句があるなら、武術で勝負をするんだな。それならまともに相手をしてやる。尤も、その度胸がお前にあれば、だがな」

シンカゲの声は抑えられた低いものだったが、尚更に凄味を感じさせた。男が一瞬怯んだような様子を見せ、その顔がみるみる朱に染まった。怒りのためか、あるいは気圧されたことへの羞恥か、クジヨウにはわからなかった。クジヨウからシンカゲの顔は見えなかったが、シンカゲの氷のような瞳が殊更に冷たい光を放っているだろうことはわかった。そのような時、精悍に整ったシンカゲの顔立ちが、見る者を圧する迫力を醸し出す。

「てめえとはいつか決着をつけてやる」

男はシンカゲに詰め寄るようにして言うと、傍らを通り過ぎて行った。他の者達がその後を追う。

男達の気配が遠ざかると、シンカゲは小さく息をつき、クジヨウを振り返った。そこには先程までの鋭さは既になかった。

「嫌なものを見せてしまったな」

「さっきの連中は他の屯所の……？」

「ああ、そうだ。^{きたかた}北方の連中なんだが、以前から何かと因縁をつけられていた」

^{ひがしかた}東方は北方と相性が悪い。武術大会では東方と北方が大抵優勝争いをするため、屯所同士の対抗意識が強いのだ。血気盛んな若い兵士達の衝突は日常的に起こっている。だが、先程の相手はシンカゲ個人に悪意を持っておりようだった。それを言えば、シンカゲは苦々しく頷いた。

「北方は資金面で有力商人のクマガヤの援助を受けているんだが、そのクマガヤが力ガリと相性が悪い。北方の中には力ガリの身内というだけで何かと言いがかりをつけては喧嘩をふっかけてくる者がいる」

「今まで、絡まれて喧嘩沙汰になったことがあるのか？」

「まあな」言葉少なにシンカゲは答えた。シンカゲの様子から、相手に負けたということはなさそうだが、理不尽な理由で敵視されるのはシンカゲにとって不愉快なことに違いない。思わず黙り込んだクジョウに、シンカゲは気を取り直すように笑みを向けた。

「屯所に戻る」

演習場から屯所へと向かいながら、シンカゲはさり気なくクジョウの気配を探っていた。予期せぬこととはいえ、嫌な場面を見せてしまったと思う。クジョウの様子に変わったところはなく、僅かに視線を伏せて歩いている。

——えらく可愛らしいのをつれてるじゃねえか。

男の言葉を思い出し、顔を顰める。あの時、思わずクジョウの姿を隠すように背に庇っていた。男の言葉が不快だったせいもあるが、男の目にクジョウの姿を晒したくないという思いが確かにあった。クジョウが男ではないと知ったのは昨日。その後シンカゲはクジョウに対して別段態度を変えはしなかった。クジョウに抱く印象が変

わらなかつたせいもあり、自然と普段通り接していたのだが、やはりどこか女性であることを意識しているのかもしれない。尤も、クジヨウを男だと信じていても同様の行動をとったかもしれない、シンカゲにもしかとはわからなかつたが。

シンカゲ自身には一つだけ確かな変化があつた。これまでとは異なり、シンカゲはクジヨウの何気ない動作にも注意を払うようになつていた。そうすると、今までは気付かなかつたことが少しずつ見えてくる。シンカゲの歩く速度がクジヨウには速過ぎたらしい、と気付いたのは今朝のことである。人が多い程、まるで見られるのを避けるように顔を伏せる癖があることに気付いた。そして時折、祈るように瞳を閉じて左耳の耳飾りに触れている。

クジヨウの一つ一つの動作が、シンカゲには新鮮だつた。女性に特有の甘やかさや柔らかさは感じられないが、かわりに張り詰めた静けさとたゆたうような独特の間合いがある。

以前クジヨウを公衆浴場に連れて行つたことがあつたが、知らぬこととはいへ悪いことをしたと思う。裸を晒すことを厭い公衆浴場を利用しない人も多いため、あの時のクジヨウの様子もさほど気にとめていなかったが、男でない身ではさぞ気まづかつただろう。

クジヨウが何故男として生きているのか――たつた一人で蠱使いとして生きて来た、その生き方自体と何か関係があるのだろうか。各地を渡り歩く蠱使いは圧倒的に男が多い。女性の蠱使いがいないわけではないが、単独で行動する者は少なかつた。クジヨウが男として生きているのも、女性であるからこそ付き纏う危険から身を守るためなのかもしれない。

だがそうであるならば、何故シンカゲ達とともにリュウドウに来てからも、男として日々を過ごしているのだろうか。蠱使いとして便宜上男を装っているだけであれば、常に男である必要はない。シンカゲには、クジヨウが男として生きる、もつと深い理由があるような気がしてならなかつた。それを、知ろうとは思わない。そこまで踏み込む権利は己にはないとシンカゲは思う。あるいは、クジヨ

ウが男で在り続けるのは、シンカゲ達を信用していないせいかもしれないのだ。

クジョウは何時かリュウドウを去るつもりでいる。シンカゲはそう確信していた。リュウドウに来た時の姿のままリュウドウを去る、それならばそれでいいと思う。カガリはクジョウをリュウドウから出すつもりは毛頭ないようだが、シンカゲは違った。カガリの意に背いてでも必ずクジョウに自由を返すと、心に決めている。

自由こそがクジョウの望むものとシンカゲはこの時信じていた。

16（後書き）

クジヨウが男ではないということを、シンカゲは淡々と受け入れてしまいました。はい、そういう男です。当初はもう少し取り乱す設定を考えていたのですが、「なんか違うな」と。女性だからといっていきなり気持ちや態度を変えるような男は嫌だな、という書き手の思いのせいで、シンカゲがどんどん冷静な男になってしまいました。でもそのうち熱い面も出てくるはず。

……むしろ書き手がもう少し熱くなるべきか？？

何はともあれ、今後ともよろしくお願いいたします！

武術大会の当日は、汗ばむほどの陽気だった。風が吹けばそこに初夏の涼が混じるが、雲一つない碧空のもと、陽射しは夏を思わせる強さである。

武術大会が行われる演習場には、早朝から街の人々が詰めかけていた。楕円形の演習場は六区画に仕切られ、同時進行で剣術と体術の試合が行われる。はじめに下位の兵士から、次第に位を上げ、夕刻に全ての試合が終了する段取りである。

クジヨウは試合を勝ち進んでいた。出場したのはまだ入隊したばかりの若い者達だが、いずれもクジヨウよりも一回りも体が大きい。その中でクジヨウの姿は目を引いていた。

「なかなかやるな」クジヨウの姿を広場の端で見守っていたシンカゲは、傍らに立ったスイレンを見やった。スイレンは感心したように、今しも一人の兵士に勝ちをおさめたクジヨウに目をやっている。「純粹に力の強さだけならクジヨウに勝ち目はないが、要は頭の良さの問題だな」

答えながら、シンカゲ自身もクジヨウの勝利に驚いていた。クジヨウの力をもつてすればそれなりの結果が出るとは思っていたが、それは本番でも常と同じ力が発揮出来るかにかかっている。クジヨウの戦い方は、はじめて試合に参加したとは思えぬ程落ち着いたものだった。

クジヨウは大振りになりがちな相手の動きを巧みに利用して間合いに踏み込み、急所を狙って技を出す。直接的な打撃を相手には与えず、常に寸止めではあったが、如何に未熟であっても相手には己の負けがはつきりとわかる。

「だが、次の相手が心配だ」

「ああ、北方きたかたか」スイレンの声が苦々しくなった。シンカゲも眼差しを鋭くして、クジヨウが戦っていた区画の隣りで、勝利をおさめ

た男を見やった。北方の若手ではあるが、二人はその男が初心者に割り振られる程未熟ではないことを知っている。

「汚い遣り方だ。部門よりも実力が上の者を割り振るとは」

「今年はクマガヤが北方に発破をかけたらしいね。東方にだけは負けるな、とな。だからあいつらも必死なのさ。今では北方はクマガヤの私兵のようなものさ」

「詳しいな」驚きを込めてシンカゲはスイレンを見やる。

「お前、私が仮にも副長であることを忘れていないか？」呆れたように言ったスイレンドったが、真剣な眼差しになる。

「今、屯所と商人の繋がりが上層部では問題になっているのさ。有力商人が屯所に資金面で援助をするのは以前からあったことだが、常に対等な関係を築いてきた。それが今では崩れつつある。商人の顔色を窺い、媚び諂う奴らが出て来たせいだね」

自由兵士団は他国の軍隊とは趣を異にしている。権力機構から独立し、屯所ごとに独自の文化とでも言うべき特色がある。自由闊達な気風が強い東方などは、軍隊というよりもむしろ傭兵組織に近い。常に国主や国の権力中枢の思惑に支配される他国の軍とは違い、リユウドウ自由兵士団の強さは疾風迅雷とも評される、動きの速さと自由さにある。

スイレンの懸念を読み取り、シンカゲ思わず考え込む。自由兵士団の強さを保つ基盤——誰にも支配されぬ、というそれが揺らげばどうなるか。深刻な問題だった。

と、不意にスイレンが口調を切り替えて言った。

「ところで、その後どうだ。クジヨウとは」

「どう、とは？」

「心境に何か変化があったか？」

シンカゲはスイレンの言葉の意味を掴めず、顔を顰めた。

「別に特に変わりはない。言っただろう。男として生きるのなら、俺も男として扱っただけだ」

スイレンはまじまじとシンカゲを見やり、どこか諦めたように呟

く。

「あたしもクジヨウを男だと思っていたから、気付かなかったけど、あんたも相当……いやいや、仮にもあたしは女を三十年以上やっているからせいだからかね」

「一体何の話だ」

「いやねえ……以前、少しクジヨウにすまないことを言っちゃってますね。シンカゲがクジヨウのことを弟のように思っている、と」

シンカゲは目を見開き、次いで苦笑した。柔らかな笑みである。

「そんなことを思っていたのか」

「ああ。あんたがいつだか、弟が生きていればクジヨウくらいの年だと言っていただろう？ だからてつきりね」

「確かに言ったが、別にクジヨウを弟と重ねてはいない。だいたい弟が死んだのはまだ四つかそこらだ。重ねようにも、弟がどんな風に育っていたか、俺にはわからん」

「そうか」

ふとシンカゲは首を傾げた。

「で、弟のように思っていると伝えたという、そのどこがクジヨウにすまないことなんだ？」

スイレンはわざとらしく溜息をついた。益々わからん、と顔を顰めるシンカゲににやりと笑う。

「いいや、わからなければいいんだ。あたしはクジヨウに関わる気はないからね」

「何なんだ、一体。口でそのようなことを言っても、スイレンはクジヨウのことを気に入っているだろうが」

今度はスイレンが目丸くする番だった。

「無自覚とは副長殿にも呆れたものだな」

言って、シンカゲはお返しとばかりに口角を上げた。

クジヨウは己の勝利に驚いていた。勝とうという気負いもなく試

合に出場し、二回戦に進めればよく出来た方だろうと考えていたのである。だが、気付けば残る兵士は六人ばかり、クジヨウはそのうちの一人である。

「クジヨウ」呼ばれて振り返るとシンカゲの姿があった。笑みを浮かべて近付いて来る。鍛練着に身を包んだ長身は、一際人目を引いていた。

「すごいじゃないか」

「シンカゲの鍛練のおかげだ」言いながらクジヨウは小さく笑んだ。他の兵士に力で劣り、技量もまだおぼつかないクジヨウが勝てたのは、偏にシンカゲの鍛練の賜物である。毎日シンカゲと対し、その動きを見ていたクジヨウにとって、他の兵士の動きはあまりに隙が多く読みやすかった。それに加え、攻撃術が苦手なクジヨウにシンカゲが教えたのは、相手をなるべく傷つけることなく圧倒する方法である。クジヨウは忠実にそれを実行しているに過ぎない。

「スイレんも感心していた。あの様子では、正式に自由兵士団に入らないかと勧誘するかもしれないな」

「それは困る」クジヨウは思わず頭を振った。初心者部門ならばクジヨウの技も通用するが、軍隊の武術は本来命を奪うことを目的としている。クジヨウには考えるだけでも恐ろしいことだった。

「ああ、わかつている。クジヨウは蠱使いだものな」

クジヨウの拒絶を別の意味に解釈したらしいシンカゲの言葉である。ふと、シンカゲの顔に鋭さが宿った。僅かに懸念するように、クジヨウに言った。

「次の対戦相手だが、気をつけた方がいい。今までの相手よりも数段強いうえに、技の出し方に容赦がない」

「あの北方の兵士のことか？」

シンカゲは頷いた。視線をあわせるようにしてクジヨウの顔を覗き込み言った。

「なるべく相手に踏み込ませず、隙をついて一発で決めるようにするんだ」

色素の薄い瞳に影が差している。深く澄んだ空を思わせる色彩に、束の間クジヨウは魅入る。小さく頷いた時、次の試合を告げる声が背後で響いた。

シンカゲが言ったとおり、対戦相手は強かった。それまでの兵士とは明らかに動きが違う。クジヨウにも、相手が初心者などではないことがわかった。繰りだされる攻撃をかわし、クジヨウは必要以上に相手を近付けぬよう間合いを保つ。勝つことに執着はなかったが、皆が見ている前で不様に負けることはしたくなかった。

隙について一発で決める——それは簡単なようで難しい。相手に隙が生じなければ、延々と逃げ続ける破目になる。だが、幸いなことに、技では数段上の相手も、精神的な部分では些か未熟だった。勝つて当然と思っている相手に巧みに逃げられ、次第に兵士は苛立ちを募らせていった。その動きに粗が出始めたことに、クジヨウは気付いた。これならば隙が出るかもしれない、クジヨウがそう思った時、兵士が拳を繰り出した。何とか避けると、兵士の攻撃に生じた風が頬を撫でた。それに、クジヨウの背が栗立った。

（——鉄！？）

後ずさり目を見開く。感覚でわかる。人を傷つけることを目的に作られた武器の気配が、相手にあった。体術の試合は武器の使用を禁じられている。それが何故、と思う。

僅かに動きが鈍ったクジヨウに、更に兵士が迫った。クジヨウが次の攻撃を避けられたのは、恐怖に体が反射的に動いたせいだった。体を低めて男の攻撃を避け、クジヨウは必死でその背後に回り込む。勝利を確信していたのか、攻撃を放った男に僅かな隙が生じていた。クジヨウは背後から兵士の足を払う。重い音をたてて仰向けに倒れた兵士の喉元に拳を放つ。寸止め——肩で大きく息をつきながら、クジヨウは突き出した己の拳を見詰めていた。自分がどのような動きをしたのかもさほどわかっていなかった。

と、やおら兵士が身を起こし、クジヨウの脇腹を蹴りつけた。不十分な体勢からの攻撃は中途半端なものだったが、クジヨウの体は勢いよく地面に打ち付けられる。焼けつくような脇腹の痛みに、一瞬クジヨウの目がくらんだ。それでも必死に顔を上げ、信じられない思いで兵士を見やった。鍛練着に隠されて見えないが、相手は武器を帯びている。肉弾ではあり得ない衝撃は、兵士が身につけているだろ鉄の武具によるものだ。

体を起こしかけたクジヨウに兵士が迫る。避けることが出来なかった。殴られて倒される。腕を振りかざす男の姿は、光を背負い影に沈む。クジヨウの動きが凍りついた。

世界が振動するような感覚——恐怖が耳の奥で鳴った。体の奥底で熱が膨れ上がり、記憶が弾ける。

——私に逆らえばどうなるかよく見ておけ！

見上げるほどに巨大な男。押さえつけられた床の冷たさ。鉄の臭い。赤く焼けて迫る精緻な紋章——母親の叫び。網膜を白い光が焼く。全てを焼き尽くす光——

不意に目の前の兵士の姿が消える。目の奥に差し込む陽光に、溢れる記憶の連鎖が途絶えた。眩しさに瞬きながら、響いた物音にクジヨウは顔を巡らせた。肉を打つ音——鋭く容赦のない動きで兵士を打ちすえるシンカゲの姿があった。

シンカゲは兵士を地面に押さえつけ、腕をひねり上げた。痛みのためか、兵士が怒声混じりの悲鳴をあげた。シンカゲの険しい顔に一片の躊躇いもない。と、その表情が僅かに動いた。捕えた兵士の鍛練着を肘まで捲る。兵士の肘には禁じられている筈の防具が巻き付けられていた。伸縮性のある丈夫な武具には、相手に強烈な打撃を与えるための鉄具がつけられている。クジヨウは無意識のうちに脇腹を触っていた。おそらく、膝にも同じような武具をつけているのだろ。

「呆れたことだな。そこまでして勝ちに拘るか」

シンカゲの声が響く。何時の間にか演習場はしんと静まりかえっ

ていた。突然乱入したシンカゲの姿に、観戦席に座る市民達の視線が注がれている。

「お前の負けだ」

冷然と言い放つとシンカゲは兵士から身を引いた。茫然とことの成り行きを見ていたらしい審判が慌てたように「クジヨウの勝利！」と叫ぶ。どこか空々しい余韻を残したそれに被って、そこそこでざわめきが起こった。兵士が蹲って地面に拳を打ちつける。不正が露見したことへの羞恥か、負けたことへの悔しさか——どちらにせよ兵士に向けられる人々の眼差しは冷たかった。

地面に座り込んだままのクジヨウにシンカゲが手を差し出した。

「立てるか？」

頷き立ち上がるうとして、クジヨウは小さく呻いた。体の節々が痛む。特に男に蹴られた左の脇腹は、少し体を動かすだけで鋭い痛みが奔った。シンカゲはクジヨウの右腕を取ると、それを自らの肩にかけクジヨウの体を引き上げた。驚いて瞬くクジヨウには構わず、抱き寄せるようにして体を支える。

「いい。一人で歩ける」

「無理はするな。あの野郎は、どうせ膝にも同じ武具をつけていたんだろう。あの武具の威力は強烈だからな。このような場でなかったら、もう少し痛い目にあわせてやるんだが」

最後は呟くように、冗談とは思えぬ口調だった。二人はゆっくりと演習場の端に設けられた幕舎に向かう。今日のために設置されたそれは医療所である。

クジヨウは痛みといまだに残る恐怖の狭間で、シンカゲの体温を感じていた。森で守られた時に感じた鼓動が、今もまた近い。不穏に揺れていた体の奥の熱が、僅かに弱まった。

「それにしても、クジヨウがここまでやるとはな」

「まぐれだよ」

「だが、さっきの兵士に勝っただろう」

確かに、兵士の急所に寸止めの拳を放った時点でクジヨウの勝利

だったが、あれは鉄の気配に動揺し恐慌に駆られての動きだった。同じことがまた出来るとは思わない。

幕舎の中には各屯所から派遣された医療兵士達が集っていた。十程ある寝台のいくつかは既に埋まっている。

「クジヨウ！ どうしたの？」リラはクジヨウとシンカゲの姿を見るなり駆け寄ってきた。

「対戦相手が武具を身に帯びていて、それで脇腹をやられた。大事はないと思うが」

寝台の一つに座ったクジヨウの顔を、リラが覗き込む。前髪を優しくかき分けられて、顎を持ちあげられた。殴られた時に切れたのか、唇の端に血が滲んでいた。

「ひどいわ」リラの言葉に怒りが籠る。

「武具の使用は禁じられている筈じゃない」

「北方の連中はどうかして勝とうと必死なんだろう」

「クジヨウ、脇腹を見たいから、少し鍛練着をあげてくれる？」

言われてクジヨウは躊躇う。リラの眼差しに促され、僅かに鍛練着を捲り上げた。思わずシンカゲを見やると、シンカゲは幕舎の間から外の試合の様子を見ているのか、顔を背けていた。

「ひどい打撲ね。数日は激しい動きはだめよ。今日はここで寝ておくこと。シンカゲ、クジヨウがこれ以上試合に出ることは認められないわ」

「ああ、わかつている。試合が終わるまでクジヨウを頼む」

シンカゲは言うのと、まるでクジヨウが衣服を整えるのを待っていたかのように、絶妙の間合いで振り返った。クジヨウの頭を撫でようとしたのか手を出しかけ、途中で止める。淡い苦笑を浮かべてその手を握り込み、シンカゲは言った。

「次は俺の番だな。応援しててくれ」

数日前、カガリの屋敷の前で言われたのと同じ言葉。あの時は鬱屈した思いに駆られたその言葉に、クジヨウは頷いていた。

幕舎の布を跳ね上げて外へと踏み出していくシンカゲを見送り、

クジヨウは俯いた。

「シンカゲがクジヨウの分まで戦ってくれるわ」

リラの言葉には答えず、クジヨウは寝台に横になった。ざらついた敷布に頬を擦り寄せる。外から聞こえる歓声が、体の奥底に蠢く熱のうねりに重なった。クジヨウは歯を食い縛って熱を抑え込んだ。まだ、体にシンカゲの温もりが残っていた。

武術大会は東方の優勝という結果で幕を閉じた。

クジヨウの対戦相手だけにとどまらず、北方の兵士にはその後も違反が続出した。それは公正な態度で試合に臨もうとした北方の兵士達の士気をも落とす結果になった。北方は精彩を欠き、最終的には善戦した西方と東方の争いとなった。

シンカゲは驚いたことに中隊長の剣術部門で堂々と優勝を飾ってみせた。優勝が確定した瞬間のシンカゲの笑顔を、クジヨウは医療所の傍近くで見っていた。仲間達に手荒い祝福を受けるシンカゲが、ふとクジヨウがいる方を見やり、拳を天に突き上げた。

クジヨウはその姿をただ見詰める。シンカゲの姿が滲んでいた。遠く離れていながら、耳の奥でシンカゲの鼓動が聞こえる。何かが終わり、何かが動き出したように、クジヨウは感じていた。

——愛しい。

その思いは鋭い痛みを伴いながらも、クジヨウの胸の内を満たしていた。

——シンカゲが愛しい。

シンカゲの傍らに立てるなら、男のままでいい。全てを捻じ曲げて、歪な存在のままで——傍にいられるならそれでもよかった。

だが、それがかなわぬ願いであることを、既にクジヨウは悟っていた。息を詰めるようにして胸元を抑える。体の奥底で、熱の焰が揺れる。恐怖が引き金なのか——まるで一瞬の記憶の奔流に促されるように、熱が力を増していた。

限界が近付いている。リュウドウを去らねばならない。クジヨウは唇を噛みしめ俯いた。

武術大会の、長い一日が終わった。

第五章

シンカゲは溜息を堪えて窓の外を見やった。道を行く人波はせわしく、玻璃をとおして降り注ぐ陽光は、まどろむように温かい。

シンカゲがいるのはリュウドウの街で最も大きい衣料専門店である。女性の衣服を主に扱うその店は、客が選んだ布地から仕立てを行うことで人気を集めている。店内には、展示するかのように所狭しと布がたてかけられ、さながら色の洪水である。焚き染められた甘い香の匂いは、一刻程もいれば慣れてしまうものらしいが、慣れるからといって不快感が減るわけではない。

女性の衣服を主に扱う店に男性が踏み込むのは躊躇われ、かと言って店の前に立っているのも妙に人目を引く。シンカゲは店の入り口の横に設えられた小さな部屋にいた。女性の長い買い物に付き合わされた男性の待機場所として作られたらうそこに、今はシンカゲ一人である。

「シンカゲ」背後に響いた明るい声に、シンカゲはほっとして振り返った。だが、戸口に立つアウユキの姿に、再びげんなりとした顔になる。アウユキの腕には五種類はあろうかという布地が抱えられていた。

「どれがいいかしら」

「何度も俺にはわからないと言っただらう。それに、さっきもう決めると言っていなかったか？」

「だって、他にもいいのを見つけたんだもの。私、妥協は嫌いなものだからと言ってこちらを巻き込まないでほしい、という思いは内心に閉じ込め、シンカゲはおさなりにアウユキの腕に溢れる色彩に目をやった。

「どれが似合うと思う？」

萌黄、薄紅、臙脂、群青、紫苑——僅かに上気したアウユキの顔を見やり、シンカゲは言った。

「これは似合わないな」示したのは群青、宵の空の底のような深い色合いである。

「何よ、似合わない色をきいているわけじゃないわ。似合う色を聞いているのに！」

「他はどれも似合うんじゃないか？」

シンカゲの口調が気に食わなかったのか、アワユキは不機嫌そうに顔を歪め、「いいわよ、もう」と一言、再び姿を消した。シンカゲはやれやれと思う。休息日にアワユキに引つ張られ買い物に付き合わされることはこれまでもよくあったが、その都度似たような言葉を交わし合い、最後にはアワユキが不機嫌になる。こうなることがわかってはいるのに、何故、シンカゲを買い物に誘うのか気が知れない、と思う。

——馬鹿だな、シンカゲと一緒にいたいからだろ。

シンカゲの疑問にそう言ったのはムラセだったが、同じ屋敷に住んでいて何くれとなく顔を合わせているのだからわざわざともに出かける必要はないと思える。

(やはり無理か……)

再び窓の外の雑踏を見やりながら、シンカゲはぼんやりと思った。カガリに、アワユキと結婚してくれないか、と言われたその答えを、シンカゲはまだ出していない。アワユキとともに生きるということ、シンカゲなりに考え、想像もしてみたが、どうにも気持ちがついていかない。今でさえこの調子では到底恋人として、やがては妻として愛するなど出来そうになかった。

「シンカゲ、お待たせ」

程なくしてアワユキの声が響いた。先程の不機嫌など欠片も感じさせない笑顔で、シンカゲを呼ぶ。

「決めたのか？」今度こそ安堵しながらシンカゲは部屋から出た。

「ええ」アワユキが指差した先には、シンカゲが似合わないと言った深い青がある。どういうことか、と思う。似合わないと言われて、わざわざ選ぶとは——

アウユキの顔を見ると、そこには大輪の花のような艶やかな笑みがあつた。

「腹が立つから、あれにしたわ」

何とも答えかねて、シンカゲは小さく溜息をついた。心中に、女はわからん、と一言。ムラセあたりに言えばまた馬鹿だと返されるのだろ。仕立ての日程を確認しているアウユキを残し、シンカゲは店の外へと出た。

アウユキは店の外に出ると、シンカゲの姿を探した。シンカゲは店の庇の下で、ぼんやりと雑踏を見詰めている。傍らを通り過ぎる娘が、ちらちらとシンカゲに眼差しを送っている。それを腹立たしく感じながらも、アウユキは飛び切りの笑顔を浮かべた。

「シンカゲ、帰りましょう」

「ああ」シンカゲはあからさまにほっとした様子で歩き出す。隣りに並び、アウユキはシンカゲの横顔を見詰めた。何処を見詰めているのか、と問いたくなる。その顔を無理矢理に己の方に向けたくなる。その衝動を堪え、アウユキは道の先に眼差しを戻した。周囲の人々が己とシンカゲに視線を向けてくるのがわかった。二人が恋人同士だと、そういう噂が広まっているのは知っていた。意図して噂が流れるように仕向けたのはアウユキ自身なのだから――

以前ならば、街の人々が向ける視線を心地良く感じただろう。娘達がシンカゲに送る憧れの眼差しに対しては、憐れみさえ含んだ優越感を抱いていた。だが、今は違った。シンカゲの隣りにいながら、一步もシンカゲに近付くことが出来ずに遠巻きに眺めている娘達と自分が同じように感じる。

黙々と歩き屋敷が見えるところまで来た時には、アウユキの笑顔も半ば乾いていた。アウユキは不意に泣きたい気持ちになる。毎日、毎日、シンカゲのことだけを考えているのに、近頃のシンカゲは自分を置いてどこか遠くに行ってしまったように感じる。アウユキの

気持ちを知っている筈のシンカゲが、何故温かい言葉の一つもかけてくれないのだろう。

私兵が守る門の中へと踏み込んで屋敷内に向かおうとしていた二人だったが、唐突にシンカゲが足を止めた。問う間もなく、庭園の方へと向かう。アウユキは思わず後を追った。せめて一言、言葉を交わしてから部屋に戻りたかった。

「クジョウ」

シンカゲが発した名に、アウユキの足が僅かに鈍る。シンカゲの向こうに、地面に胡坐をかいて座り込むクジョウの姿があった。その前では蠱こがちよろちよると地面を走りまわっていた。時折軽やかに飛び上がるのは、小さな羽虫を狙っているのだろうか。

クジョウは立ち上がることなくシンカゲを見上げている。その視線にあわせたのはシンカゲの方だった。地面にしゃがみ込むと、おかしそうに蠱を見やった。

「はしゃいでいるな」

「ああ。たまに外で遊ばせてやらないと不機嫌になる」

「蠱が不機嫌に？」

「昨日なんか夜中にいきなり耳元で鳴き出して、あれには参った」
「それは確かに参るな」シンカゲは小さく嘖き出す。シンカゲの背後に立ったアウユキに、クジョウの眼差しが向けられた。その瞳が僅かに揺れ、そっとクジョウが顔を伏せた。一体己がどのような顔をしているのかアウユキにはわからなかった。噛みしめた唇が震える。

「私、先に戻ってるから！」

シンカゲの背中に言葉を投げつける。シンカゲが答えるのも待たず、アウユキは足音も荒く正面玄関へと向かった。ふんわりとした芝生に覆われた庭園では、アウユキの足音など響きはしないが、少しでも己の不機嫌さをシンカゲに見せつけてやりたかった。

部屋に戻り、アウユキは椅子に座り込んだ。きりきりと胸の奥が痛む。じわりと涙が浮かぶのが尚更に忌々しく、乱暴に目元を拭う。

シンカゲがつれなかったわけではない。ただ普段と変わらなかっただけ——それはわかっていた。だが、シンカゲが何時かは特別な眼差しを注いでくれる筈と信じるアワユキには、何もかもがもどかし、腹立たしく、そして哀しかった。

（どうして応えてくれないの？ どうして私だけを見てくれないの？）

アワユキがシンカゲに求めるのは、家族としての優しさや親愛の情ではない。女として愛されたいのだ。シンカゲに抱き締められたいのだ。息もつけぬ程に——そこまで思い、アワユキはどきりとした。一つの光景を思い出していた。

十日程前、武術大会が開催された時のことである。クジヨウが対戦相手の不正で傷つけられた時、シンカゲは迷わずクジヨウを助け、動くことがままならないクジヨウに肩を貸し、寄り添って医療所へと連れて行った。ありふれた光景——兵士仲間同士ではよくあることだ。だが、寄り添い歩く二人の影が一つに溶け合うのを、アワユキは妙にざわめく心地で見詰めていた。

そしてシンカゲが剣術の試合で優勝した時、彼は一点に目をやり、高々と拳を突き上げた。何気なしにその先を目で追ったアワユキは、そこにクジヨウがいたことを知っている。必ず勝つてと、いつもの我儘のように言ったアワユキに、笑って応えたシンカゲ。勝利の約束は、アワユキとシンカゲのものだった筈だ。それを、まるでクジヨウに勝利を誓っていたかのように——

「あんな子大嫌いだわ。いなくなってしまう方がいいのに……」

呟く。縮まらぬシンカゲとの距離も、アワユキの気持ちなど歯牙にもかけぬシンカゲの様子も、全てがクジヨウという存在があらわれたことが原因のように思えた。

（シンカゲが私を愛さなかったら……）

思うだけで胸が潰れそうになる。そして嘗てならば決して考えなかっただろう、そのことを考えずにはいられない自分自身に愕然とする。時間を戻せたら——クジヨウがあらわれる前に戻したかった。

あの頃、アワユキは心の底から信じていたのだ。シンカゲにはアワユキしかない、と。

苛立ちと怒りと、闇雲な感情はクジヨウへと向けられる。やがてアワユキの心の底に、小さく、しかしはつきりとクジヨウへの憎しみが生まれていた。

「アワユキを追わなくていいのか？」

氣遣うようなクジヨウの声に、シンカゲは顔を上げた。蠱を見詰めていたのだが、内心では別のことを考えていたのが読まれていたらしい。腹立たしげに投げつけられたアワユキの言葉——何時もの不機嫌、というだけではない気がした。その原因も大方察しがついている。だから尚更にアワユキを追えなかった。

「街の人が噂している。アワユキとシンカゲは恋人同士だって」

「実際は違うのを知ってるだろう」

「うん、そうだけど。でも、アワユキはシンカゲのことが好きだろ？」

放っておいていいのか、とクジヨウが問う。クジヨウがシンカゲ個人のことに踏み込んだ問いを発することは珍しい。それが少し意外な気がしてシンカゲはクジヨウを見やった。

「カガリは俺とアワユキが結婚することを望んでいる。アワユキを妻にし、このリュウドウでカガリの力になってほしい、と。俺には買い被られているようにしか思えないが」

何時の間にか、さらさらと水が流れるように、シンカゲは言っていた。クジヨウが驚いたように目を見開いている。それもそうだろう。アワユキとの結婚話は誰にも明かしていないのだから。

「……それで……どうするつもりなんだ？」

「それをずっと考えている。俺はリュウドウを何時か出ようと思っていた。アワユキと結婚すれば俺はリュウドウで生きることになるが……俺にとってアワユキは妹みたいなものだ。仮に、カガリの力

になるためにリュウドウに残るとしても、アワユキと結婚するかどうか……」

クジヨウは黙り込んだ。せわしなく動き回る蠱へと視線を注いでいる。シンカゲが言った言葉を受け止めかねているようにも、吟味しているようにも見えた。あるいは何も感じていないようにも――。クジヨウの横顔を見詰めながら、シンカゲはふと思った。

――あの群青はクジヨウならば似合うだろう。

夜と宵の色彩を集めて、漆黒の髪と澄んだ灰色の瞳が、深い青に映えるだろう。

シンカゲの休息日はクジヨウも屯所には行かないが、そんな時でもクジヨウが身に纏うのは、くすんだ色合いの鍛練着と大差ないものだ。それしか持っていないのだから仕方がないことではあるが、鮮やかな色彩を身に纏いたいと思うことはないのだろうか。

吹き抜けた風にクジヨウの前髪が揺れる。半ば伏せられた顔は表情が読みづらい。シンカゲは手を伸ばしクジヨウの顔を隠す黒髪をそっとかきあげた。クジヨウがびくりと身を竦ませてシンカゲの方を見やる。大きく見開かれた瞳に、シンカゲは我に返った。

（何をやっているんだ、俺は）

シンカゲは慌てる。

「すまん」言いながら手を引く。なおも己を見詰めるクジヨウに、思考が空回りした。

「痣がまだ残っていないか、と……だな。すまん」

我ながら不甲斐ない言い様である。武術大会の後、クジヨウの頬に出来ていた痣はとうに消えている。

クジヨウは何も言わず、蠱へと低く舌を鳴らした。それに蠱が応え、クジヨウの肩へと駆けのぼる。蹲った蠱の背を撫で、クジヨウは立ち上がった。

「俺に悩みを言っただって何にもならないよ。俺はいつかここを出ていく人間なんだから。答えはシンカゲ自身が出さないと」

クジヨウはそう言う。シンカゲに背を向けた。一つに括られた長

い髪が惑うように揺れる。その背に、シンカゲは衝動的に声をかけていた。

「クジヨウ」

喉元で何かが絡まっているかのように、言葉が続かなかった。クジヨウは束の間足を止めて、振り返らないまま屋敷の内へ姿を消した。

シンカゲは地面に座り込み、頭を抱え込んだ。一体自分は何をしているのか、と思う。指先に仄かに残るクジヨウの髪の感触に、益々自己嫌悪に陥る。

（女扱いはせぬと……男として対するとあれほど豪語していたものを、何てさまだ）

クジヨウは不愉快に感じただろう。突き放すような最後の言葉がそれを物語っていた、と思う。

手を伸ばしたのは無意識だった。その黒髪を手でどけて蠱に向けられている眼差しを己の方に向けたいと――

クジヨウをきれいと呼び評したりラの言葉を、今ではシンカゲも理解していた。きっかけは武術大会の医療所でのことである。リラが診察のためにクジヨウの前髪をかきあげて仰のかせたあの時、あらわになったクジヨウの顔をシンカゲは美しいと思った。クジヨウに対してそのように感じたのは初めてだった。

毎日アワユキと接し、容姿自慢の女性に言い寄ることも多いシンカゲは、良くも悪くも美しい女性を見慣れている。だが、クジヨウに感じた美しさはそのどれとも違っていた。作られ飾られたものではなく、意図して見せようとしている美しさでもない。ただあるだけで美しい――朝露に濡れる花を無条件で人が美しいと感じるように――気付かなければ見過ごしてしまう、しかし一度気付けば目が離せない、クジヨウの美しさはそういうものだ。

ムラセなどはとうに気付いていたらしい。クジヨウがやはり女性だったと告げた時、何故女性だと気付いたのか、と問うたシンカゲにムラセは一言「美しかったからさ」と答えた。その時は、何とも

気恥かしいことを臆面もなく言う奴だと呆れただけだったが、今となつてはムラセのことを笑えない。

「本当にどうかしているぞ、俺は……」

シンカゲは苦く呟いた。自分の将来を見定めて、カガリとアワユキに対してはやく答えを出さなければならぬ。クジヨウにも早く自由を返さねばならぬ。

——俺は何時かここを出ていく人間なんだから……

クジヨウの言葉を思い返す。クジヨウはいずれリュウドウを去る。それは以前からわかつていたことだ。そうなれば、ただクジヨウが来る前の状況に戻るだけなのだ。シンカゲは思い、顔を顰めた。

本当にそうだろうか？

風が、シンカゲの惑いを散らすように吹き抜けて行った。

第五章（後書き）

たまにシンカゲとクジヨウの名前を間違えます。えらいことです。大急ぎで直しますが、直しきれないまま掲載していたら、本当に申し訳ない。

書き手的に、アウユキは悪役でも何でもないので、少しかわいそうだなあ、と思います。自分があの立場なら辛いだろうな、と。因みに、あからさまな悪役はそうそう登場しません。それらしいのは「最果てに天深く」の聡達あたりだけで。彼も単にそういう人間っただけで、書き手の中では悪役ではないですが。ついでに、モットーは「簡単に絶望するな」なので、辛い目にあっている人でも、簡単にはひんまがりません。登場人物達には強くたくましく、頑張ってほしいものです。（今の時代、「頑張れ」は禁句らしいですが…）

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

追記

やはり、一部クジヨウとシンカゲを間違えていました。申し訳ない！即座に修正しましたが、いやはや……どじな書き手です。

小さな音が響いた。それにクジヨウは目を開けた。四角く切り取られた緑が、滲むようにして見えた。窓の向こう、玻璃の青味を帯びて、それは僅かに歪んでいる。夢を見ていた、と思う。むせる程の緑に包まれて、森の奥へと踏み込んで行く夢だ。

「クジヨウ様、お目覚めになりましたか？」間近に響く声に眼差しを上げれば、ヤヨイナの笑顔が見えた。先程聞こえた音は、彼女が扉を開けた音だったのだろう。

「お薬をお持ちしましたよ」

クジヨウはゆっくりと身を起こす。差し出された粉薬を大人しく受け取り、傍らに置かれた水で飲み込んだ。「御気分はいかがですか？」

薬の苦みに僅かに顔を顰めながら、クジヨウは答えた。

「まだ少しだるいです」

言ってから、少し違うな、と思う。だるいというよりも、まるで体から意識がずれているかのような齟齬感がある。自分の体にも関わらず、まるで借り物の身に合わない服を着ているような気分だ。

「まだお熱がおりなのかしら。本当にお医者様にお診せにならないくてよろしいのですか？」

「はい。少し風邪をひいただけですから」

心配顔のヤヨイナに小さく微笑み、クジヨウは再び体を横たえた。クジヨウが発熱して、既に三日が経っていた。屯所にも行かず、毎日寝て過ごしていたが、それでも体調はなかなかもとには戻らなかった。

（長引けばまずいな……）

とろとろとまどろみながら、そう思う。ただの風邪では通せなくなるかもしれない。胸元を押さえる手に力を込める。ゆらりと、体の奥の熱が嘲笑うように揺れた。足掻いても無駄なのだと、そう言

われている気がした。発熱は、おそらく体に起こりつつある異変のせいだ。何かが動き出そうとしているのを無理矢理抑えつけている、その反動なのだと、感覚的な部分でわかっていた。

幾度も否定しながらも、クジヨウは魄^{はく}への覚醒を押し止めていたものが、とうとう崩れ始めたのだと悟らずにはいらなかった。耳飾りの封印と、己の意思の力と、それでどこまで耐えることが出来るのか。あるいはこの状態は一過性のものに過ぎないのか、クジヨウにはわからなかったが、このままリュウドウに留まっていけない、と思う。

（早く……リュウドウから出ないとだめなのに……）

岐^きが魄に覚醒する時どのような状況になるかクジヨウは母親に聞いたことがある。このような街中で万が一にも覚醒するようなことがあれば、多くの人が巻き込まれるだろう。

意識が眠りに絡め取られる。抗いようもなく、再び緑の深奥に呑み込まれながら、クジヨウは遠く小さな人影を見たと思った。手を伸ばしても、もう届かない。

——シンカゲ。

呼ぶ声に、人影は振り返らなかった。

シンカゲは一人広場を眺めていた。新参の若い兵士達がそこで剣術の指南を受けている。澆刺とした掛け声が響く。いつもならばクジヨウの体術の鍛練を行っている時間帯である。そのクジヨウが三日前から体調を崩し、今もまだ寝込んでいる。余った時間で鍛練に参加してもよかったが、どうにも気が乗らなかった。

「クジヨウの具合はどうだ？」背後から問われ、シンカゲは振り返った。ムラセが近付いて来る。鍛練着に汗が滲んでいた。鍛練が終わったところなのだろう。

「まだ良くはないみたいだな。一日中眠っている」

「風邪か？」

「本人はそう言っている。医者に診せたがらないから、実際はどうかわからん」

隣りに立ったムラセは、柔らかな癖毛をかきあげながら、汗を拭いた。日中の気温は次第に高くなっている。夏が近付いているのだ。「リラに診せたらいいんじゃないか？」

「ああ、そうなんだが、動くのさえ辛いらしい。屯所までは連れて来れない」

僅かに沈黙、次いで意味ありげにムラセは「そういうことか」と呟いた。シンカゲは訝しくムラセを見やった。

「何だよ」

「いや、何か元気がないと思っていたが、クジヨウがいなくてどうも調子が出ないみたいだな。そんなにクジヨウが心配か？」

「ただ単に暇なだけだ」素っ気なく言ったシンカゲに、ムラセは「そうかね」と、揶揄するように返す。シンカゲは小さく溜息をついた。

「確かに、クジヨウのことは心配している。クジヨウは弱音を吐かないからな。口で言うよりも辛い思いをしているかもしれない」

「辛い……か。そうだろうな」

単に体調のことだけを言っているのではないように感じ、シンカゲはムラセを見やった。思いに沈むような横顔に、どこか苦し気な表情が浮かんでいる。

「どうした？」

「いや、何でもない」ふと言葉を切って続ける。「シンカゲは幸せな奴だと思っただけだよ」

「俺が？ どういうことだ」

「気にするな。大したことじゃない」

それより、とムラセはシンカゲの意識を逸らすように言った。

「アワユキはどうするつもりだ？ 今日も迎えに来るんだろう？」

シンカゲは思わず顔を顰めた。ここ数日、毎日のようにアワユキはシンカゲが帰る刻限になると迎えに来る。門の外に立つ彼女

の姿は屯所の中でも評判になっていた。

「いじらしいじゃないか。アワユキのことは大切に思っているんだらう？ 応える気はないのか？」

「応えることは出来ない。アワユキを妹以上の存在に思うことはどうしても出来ない。はっきり伝えるつもりだ」

迷いのないシンカゲの声音にムラセは、そうか、と呟いた。強い日差しに地面が白く光っている。それを見ながら、シンカゲは答えを出さなければならぬと、心に決めていた。

屯所を出たシンカゲは道の端に立つアワユキの姿を見やった。周囲の兵士達から冷やかしの声があがる。それには構わず、アワユキの元へと向かう。常ならば呆れたような、あるいは困ったような表情を浮かべるシンカゲが真直ぐに視線を向けるのに、アワユキは目を見開いた。

並んで歩きながら、二人は黙りがちだった。大通りを抜け木々が生い茂る人気のない遊歩道に入る。街の中に作られた園庭はアワユキが気に入っている場所である。人気のないそこで、シンカゲは重い口を開いた。

「アワユキ、話があるんだ」

アワユキはシンカゲの言葉を封じるように、不意に明るい声を出した。

「シンカゲ、この前選んだ布があつたでしょう？ 今日仮縫いをするっていうから見に行ったの。そうしたらとても素敵になつたわよ。シンカゲは私に似合わないって言ったけれど」

「アワユキ」さほど強くはない、むしろ優しい響きを宿した声音に、アワユキが息を吞んで黙り込んだ。

「俺はアワユキの想いに応えることは出来ない。アワユキのことは大切だけど、恋人として見ることはできない」

アワユキは唇を噛み締めた。

「大切って……妹みたいに？」

「ああ、そうだ」

「どうして？ どうして妹としか思ってくれないの？ 私はずっとシンカゲを見てきたのに。小さい頃からシンカゲだけを想ってきたのに……。大切な女性として見てよ。女性として愛してよ」

「アワユキ、それは出来ないんだ」

何時の間にか二人は立ち止っていた。地面に長く影が伸びる。それを、アワユキは睨みつけるようにして見ていた。堪えようもなく涙が溢れる。絡まった思いが、嗚咽となって胸を震わせた。シンカゲは黙ってアワユキを見詰めている。深く静かな優しさで――だが、決してアワユキに手を差し伸べようとはしない。

「……他に好きな人がいるの？」

「いや、そういうわけじゃない」

「嘘よ……」

決して交わらない、二人の影。胸の奥に秘めていたざわめきが、不意に言葉となって零れ落ちた。

「嘘よ。クジヨウでしょう。シンカゲが好きなのはクジヨウなんだから！」

「何を言っている。そんなわけがないだろう」

「いいえ、私はわかっていて。ずっとわかっていたのよ。あの子が来てからシンカゲはおかしくなった。前の……私が知っているシンカゲではなくなったの！」

とめどなく涙が零れ落ちる。シンカゲを睨みつけながらアワユキは後ずさった。踏み出そうとしたシンカゲにアワユキは叫んだ。

「来ないで！ 汚らしい！」

叫ぶや、アワユキは身を翻して走り出した。シンカゲを振り返らずに園庭を出る。振り返りたくはなかった。シンカゲの表情を見てしまえば、何もかもが終わるような気がしていた。

（馬鹿ね。もう終わっているのに）

冷めた心の一部が囁く。とうにわかっていただろう、と。シンカゲの気持ちが決してアワユキに向かないことを――

（嘘よ！ そんな筈ない！ シンカゲが私を愛さないなんて……！）
屋敷に辿り着き、漸くアウユキは立ち止った。膝に手をつけて荒い息をつく。驚いたように見詰める私兵の姿に自嘲の笑みが漏れた。街の人々も、泣きながら走る彼女の姿を見ていた。

（そんなこと構うもんか。好き勝手に噂すればいいのよ）

乱暴に涙を拭くと、アウユキは屋敷の内へと入った。胸の内のざわめきは、今や嵐のように吹き荒れている。悲しみさえも圧して、怒りと、ねばつくような憎悪が渦巻く。目指す部屋まで行くと、アウユキは前置きもなく扉を開けた。部屋は薄暗かった。幾つかある窓からは夕刻の淡い光が射している。アウユキは寝台に近付いた。クジヨウは眠っていた。常には一つに括られている黒髪が、横方に眠るクジヨウの背後に、まるで流れる水のように広がっている。アウユキは肩で息をつきながら、クジヨウの姿を見詰める。

浅い眠りだったのか、クジヨウがゆっくりと瞼を開いた。アウユキに気付き、驚いたように身を起す。澄んだ音をたてそうに、黒髪がクジヨウの肩から背へと零れ落ちた。

「……あなたなんかいなくなればいいのよ……」

囁くように言う。何もかもが憎らしかった。煙のように淡い瞳の色彩も、星の光を集めたような黒髪も、シンカゲが当たり前のように支えた細い体も――

「どうしてあなたがここにいるの！？ 私とシンカゲの場所に、どうしてあなたがいるのよ！ あなたさえ来なければ、おかしいことにはならなかったのよ！ あなたさえいなければ！ シンカゲの傍には何時でも私がいたのに……シンカゲが苦しい時に、一番傍にいたのは私なのに！」

クジヨウの顔に浮かんでいた驚きが、次第に消える。僅かに伏せたクジヨウの瞳に、影が集う。悲しみか、憐れみか――苦しみ、の筈がない。苦しいのはアウユキであってクジヨウではない。アウユキの苛立ちは益々募った。

「何とか言いなさいよ！ あなたなんか……！」

「俺はもうすぐここを出て行く」

囁くようにクジヨウが言った。それが全ての答えであるかのよう
に。

アワユキは瞬間、頭の芯が痺れるような感覚に陥った。唐突に悟
っていた。クジヨウは男ではない。どうして今までわからなかった
のだろう。目の前を覆っていた紗が突然剥がれ落ちたように――淡
く、儚く、どこまでも静謐に、そして闇のように艶やかな――目の
前にいるのは紛れもなく、一人の女性だ。アワユキは茫然とクジヨ
ウを見詰めていた。

そして確信する。

――クジヨウはシンカゲを愛している。

暗い何かが胸の中に湧き起る。

「今すぐに消えて。私とシンカゲの前から」

冷たい己の声を遠く聞いて、アワユキは逃げるように部屋を後に
した。

夕刻の光が宵に吞まれ、部屋が闇に沈んでもクジヨウは動かずに
いた。

――あなたさえいなければ。

幾度も幾度も、アワユキの声が耳の奥で木霊する。何故アワユキ
があれ程まで取り乱していたのか、クジヨウは僅かながらも察して
いた。シンカゲとの間に、何かあったのだろう。

「どうしてここにいるの……か」

ぽつりと呟く。シンカゲがクジヨウを守るために何かを犠牲にし
ているとしたら、アワユキの怒りも頷ける。クジヨウの存在は、こ
こでは異物でしかない。アワユキやシンカゲの穏やかな生活を乱す
邪魔者と謗られても仕方はないだろう。知らぬ間に、アワユキを傷
つけていたに違いない。おそらくはシンカゲをも――。

シンカゲに守られる心地良さに甘えて、一時与えられた温もりに

溺れて、己がどういう存在かを忘れていた。決して一つ所に留まってはいけないという、その掟を忘れていた。

その時軽く扉が叩かれた。答えると、扉が開かれる。光を背に立つシンカゲの姿があった。

「入ってもいいか？」常と変わらぬ声。クジヨウは小さく頷いた。シンカゲは扉を閉ざすと、窓の傍近くに立つ。闇に沈んだ部屋では、互いの姿は輪郭でしかわからない。シンカゲが明かりを灯す気がないらしいことに、クジヨウは僅かに安堵した。一体自分がどのような顔をしているのか、自分でもわからなかった。

「具合はどうだ？」

「もう大丈夫だ。今日も一日寝ていたから」

「そうか。良かった」

かそけく揺れる木の葉の音が聞こえる。静寂に、クジヨウは身じろぎした。言葉がつかえたように出て来ない。不意に数日前のことを思い出す。クジヨウの前髪を掬いあげたシンカゲの手――逃げるように部屋に戻ってから、真直ぐに向けられた瞳の強さが忘れられなかった。その日の夜から熱を出し、シンカゲとまともに話していなかったが、あの時シンカゲは何を思っていたのだろう。

「アウユキと、何かあったのか？」

問いに答えは返らなかった。クジヨウは言葉を押し出す。何か話していなければ、心が吞まれそうになる。

「さっき、アウユキが来た。泣いていた」

「……そうか」

「シンカゲが苦しんでいる時に、誰よりも近くにいたのにつて……」

「ああ、そうだな」

断片的なクジヨウの言葉に、シンカゲは低く言った。シンカゲが柔らかに笑んでいるように、クジヨウには思えた。シンカゲが秘める記憶、過去――クジヨウはシンカゲのことを何も知らない。

「アウユキとカガリは、俺がここに来たばかりの頃、何時でも傍にいてくれた。散々に暴れて拒絶したのに、嫌な顔一つせずに。笑う

ことを思い出せたのは二人のおかげだ」

「何があつたんだ？」

常ならば決して問わぬだろうことを、クジヨウは言葉に乗せていた。シンカゲの沈黙に心が挫けかける。それでも、クジヨウは再度問うていた。

「昔何があつたんだ？」

聞けば、戻れなくなる。この温かい生活を続けることは出来なくなる。クジヨウは唇を歪めた。苦い笑い。リュウドウを去ると心に決めながら、まだそれを受け入れない己がいる。卑小で、卑怯な心だ。

シンカゲの言葉は、闇の底に冷たく落ちた。

「俺の家族は魄に殺された」

薬草の根を小刀で削っていたリラが、くんと鼻を鳴らした。

「今日は御馳走ね」

クジヨウは葉を細かく千切っていた手を止め、つられるように顔を上げた。瑞々しい薬草の香りに、美味そうな匂いが混ざり込んでいる。屯所の賄い部屋から漂って来るそれは、今日の昼食に出される煮込みに違いない。

体調が落ち着いたから、とクジヨウは数日ぶりに屯所に来ていた。「体術の鍛練はまだしない方がいい」というシンカゲの言葉に頷き、クジヨウはリラの作業を手伝っている。

「クジヨウ、これを煎じてくれる？ 水から入れてちょうだいね」
言われてクジヨウは細かく切られた根を受け取った。専用の小さな鍋に根と水を入れ、火にかける。

「クジヨウはきつと良い医療兵士になれるわね」その言葉に、鍋を柄杓でかき混ぜていた手が止まる。リラを見やると、穏やかな笑みがそこにはあった。

「俺が医療兵士に？」

「そうよ。ここに来てまだ三月程なのに、どんどん知識を吸収しているわ」

クジヨウは手元に眼差しを落とした。ゆらゆらと揺れる水の底で、根の欠片は小さく頑なに見えた。

「俺は、戦う人間は嫌いです」ぽつりと言う。傷つけ、奪う——戦いとはそういうものだろう、と思う。その思考を読んだように、リラが言った。

「命を奪うばかりが戦いではないわ。人は時に守るべきもののために戦うの。勿論、戦なんてなければいいのだけれど、己の命を犠牲にしても大切な存在を守ろうとする、そんな戦いもあるのよ」

その言葉に誘われるようにして、クジヨウは暗闇に立ち尽くすシンカゲの姿を思い出していた。昨夜のことである。

——俺の家族は魄^{はく}に殺された。

低い声音。クジヨウは何も問うことが出来ず、シンカゲもそれ以上のことは言わなかった。

「では守れなかった時、人はどうなるんだろう。未来永劫、大切な者を奪った存在を憎み続けるのかな」

「人は否応なく変わるものよ、クジヨウ。同じでい続けることは出来ない。憎しみや絶望に囚われたままにいるか否かは、その人次第だと思うわ」

幼子に言い聞かせるように優しく、そして傷ついた者を慰めるように穏やかなリラの声に、クジヨウはやはり、と考えていた。やはり、リラがクジヨウが岐^きであることに気付いているのかもしれない。リラの言葉の端々に、そして時折向けられる案じるような眼差しに、もしかしたら、と思っていた。

そうだとするならば、クジヨウが岐であると知った人間から、敵意でも欲望でもなく、ただ優しくだけを向けられたのは初めてだった。

「さ、あとは蓋をしておけばいいわ」クジヨウは頷き、鍋に木の蓋を被せた。くつくつと、湯が沸く陽気な音が響いている。

開け放たれた窓の外に、淡く澄んだ空が見えた。クジヨウはゆっくりと医療所を見回した。微かに揺れる木綿の仕切り布。清潔に洗われた敷布。薬草の匂いが染みついた分厚い書物。窓辺に飾られた小さな白い花はリラのお気に入りだ。窓から吹き込む心地良い風に乗って、兵士達の威勢のよい掛け声が聞こえる。

「クジヨウ？」

どうしたの、と問う優しい声音に、クジヨウは振り返った。込み上げるものを押し込めて、笑顔を作った。リラがぱちぱちと目を瞬く。

「裏の畑に水を撒いてきます」

「あら、いいのよ。私が後でするから。クジヨウはまだ無理をしない方がいいわ」

「大丈夫です。もう、体は何ともありませんから」

「そう？ それならお願いしようかしら。でも無理はしないでちょうだいね。それから、適当なところで切り上げて、お昼を食べに行くこと。食べないと、体も治らないんだから」

クジヨウは頷き、戸口へ向かった。廊下に踏み出す時、思わず振り返りそうになる。

（振り返ったらだめだ）

己に言い聞かせ、医療所を出る。人気のない廊下に出て角まで歩いてから、クジヨウは振り返った。医療所の扉は壁に阻まれて見えない。

「ありがとうございます」

小さく呟き、クジヨウは再び歩き出した。屯所の片隅に作られたリラの薬草畑には向かわず、広場からは見えぬ廊下を選んで門へと向かう。途中幾人かの兵士とすれ違ったが、クジヨウを気にする者はいなかった。

大きく開かれた門の前で、クジヨウは束の間屯所を振り返った。そして思いを振り切るように門を潜り抜ける。

道へと踏み出し足を速めかけたクジヨウはぎくりと立ち止った。前方に見慣れた姿があった。ムラセである。ムラセもクジヨウに気付き、目を丸めた。

「クジヨウ、どうしたんだ？ シンカゲは？」

ムラセがそう問うたのも無理はなかった。クジヨウが一人で屯所の外に出ることはない。常に隣りにはシンカゲがいた。

「リラに、薬草煎じに使う道具の買い出しを頼まれたんだ」

咄嗟に嘘を吐く。

「そうか。気をつけてな」クジヨウはその言葉に思わず苦笑していた。時に、ムラセはクジヨウに対して子どもを気遣うような言葉をかけることがある。クジヨウはムラセに背を向け、再び歩き出した。

雑踏に紛れ込み、ムラセから十分に離れてから、クジヨウは足を速める。ムラセが不審に思ったような様子はなかったが、クジヨウが屯所を出たことが、ムラセからシンカゲに伝わる可能性がある。急ぐ必要があった。

リュウドウの街の構造を詳しくは知らなかったが、どの方向に進めば街から早く出ることが出来るかはわかっていた。半ば駆けるようにして進むクジヨウの肩で、髪の毛が柔らかく揺れた。姿を現さぬまま、蟲が微かに鳴き声をあげる。

「わかつている。でも、行かなきゃ。ここにいたらだめだ」

半分は己に言い聞かせるために、クジヨウは呟いた。

リュウドウを去る。そう決めたのは昨夜、シンカゲと話した後だった。クジヨウは自由を返されてはいない。まだ万全ではない体調を押して屯所まで行ったのは、密かにリュウドウを去るためだった。屋敷に居たのでは常に人の目がある。ここ数日寝込んでいたクジヨウの元には、足繁くヤヨイナが顔を出していた。居なくなれば、すぐにカガリへと知らされるだろう。例え夜であっても、私兵が守る屋敷を密かに出るのは難しい。だが、屯所ならばクジヨウが居なくなっても誰も不審に思わない。シンカゲとスイレん以外は誰もクジヨウがリュウドウに留まる理由を知りはしないのだから。そして誰にも気付かれぬようリュウドウを出るには、昼間、街に人が溢れている時分が最もよいように思えた。

問題はシンカゲとスイレんである。二人はクジヨウを信頼しているのか、屯所の中では一人で行動するのを許していた。だが、クジヨウが一人で屯所を出たと知れば、クジヨウが逃げたということを即座に悟るだろう。それはただちにカガリへと伝えられ、追手がかかるに違いない。今のうちになるべく遠くへ行く必要がある。

歩きながら、クジヨウは帯の中に潜ませた貨幣の厚みを確かめた。蟲使いとして稼いだ金はリュウドウに来てから手付かずになっていたが、当分旅するのに困らないだけはある。荷物の一つも持たずに街を出るのはさすがに心許なかったが、そもそもクジヨウが持つ

ていた荷物などたかが知れている。街を出てから街道筋の店で旅装を整えるつもりだった。

ここ数日の不調が、今日は幾分ましなのがありがたかった。決して振り返らず、クジヨウは歩を進めた。振り返れば、決心がぐらくような気がしていた。この後に及んで、まだ未練を感じる己にクジヨウは嫌悪すら抱く。迷いは切り捨てた筈だ。

シンカゲは怒るだろうか。クジヨウを守ろうとしたシンカゲを裏切り、何も告げずに去ることをどう思うだろう。あるいは、クジヨウのことなどすぐに忘れてしまいかもしれない。

俯きがちに歩いていたクジヨウは、周囲に人気がないことに気付いた。とりとめのない思考に捕われ、気付かぬままに大通りから外れていたらしい。道は幾分幅が狭く、建ち並ぶ家々も粗末なものが目についた。道の端に、長い間放っておかれたのか、異臭を放つごみが散乱しているのを見やり、クジヨウは足を止めた。街の外へ最短の距離で出るのに、方角自体は間違っていない筈だ。だが、このまま進めば入り組んだ細い路地に入り込んでしまう可能性がある。

一度大きな通りに戻った方がいいか——そう思い、クジヨウは踵を返した。

元来た道を辿りかけたその時だった。クジヨウは突然横合いから伸びて来た腕に体を羽交い締めになされた。咄嗟に声をあげようとして、その口を乱暴に塞がれる。暴れようとしても、クジヨウを捕えた腕はびくともしない。抗うことも出来ずに、家と家の間にのびる路地に引きずり込まれる。陽光の射さぬ暗い路地には、数人の男の姿があつた。その中の一人に見覚えがあつた。武術大会でクジヨウと対戦し、シンカゲに武具の不正使用を暴かれた兵士である。

目を見開いたクジヨウに、男達が笑みを浮かべた。獲物を捕えた獣の笑みだ。

片手でクジヨウの口を塞ぎ、片腕だけでその体の動きを封じるのも男に違いない。絡みつくようなその体温が厭わしかった。耳元で男が囁いた。

「安心しな。お前を傷つけはしない。大事な人質だからな」

聞いたことのある声。武術大会の前日、演習場でシンカゲに陰悪な言葉を投げつけていた北方^{きたかた}の兵士だ。恐怖よりも先にクジヨウが感じたのは焦燥だった。男が言った言葉——クジヨウは誰に対しての人質なのか。答えは明らかだ。

クジヨウは必死で肘を背後に突き出した。男の拘束が僅かに緩む。抜け出そうとしたクジヨウに、男が鋭い舌打ちを漏らす。容赦のない力で、男がクジヨウを殴りつけた。地面に倒れ込んだクジヨウを男が見下ろす。「面倒臭えな」ぼそりと呟くや、男はクジヨウの腹を蹴りつけた。鳩尾に衝撃が弾ける。

「おとなしくしてりやあいいものを」

男が言うのを遠く聞き、クジヨウは意識を失った。

食堂は騒々しい程のざわめきに包まれていた。長い木の机と椅子が所狭しと置かれ、兵士達が犇めき合っている。

シンカゲは食事を乗せた木の盆を持ちながら、ごった返す食堂を器用に通り返して行った。空いた席がなかなか見つからない。漸く見つけた空席に滑り込み、早速食事をかき込む。兵士にとっては体が資本である。食事は常に大盛り、それでも足りない者はおかわりをすることも出来るが、それも早い者勝ちである。

食べながらシンカゲは食堂の中を見回した。クジヨウがいなかった。思ったのである。だが大柄な兵士達の中に、クジヨウの姿を見つめることは出来なかった。もう体調は大丈夫だと言っていたが、完全に治っているようには見えなかった。もとより小食のクジヨウは、もしかすると昼食を食べには来ていないのかもしれない。

少し医療所に顔を出すか——そう思い、シンカゲは再び食事に集中した。

名を呼ばれたのは、丁度食べ終わった時だった。顔を上げると、ムラセの姿があった。何時の間にか空いていたらしい正面の席に、

ムラセは座る。

「今まで鍛練だったのか？」

「ああ。今日は午前中に野暮用があつて鍛練に遅れた。そのせいで小隊長に絞られた」

ムラセが属する小隊の長は、厳しいことで有名である。例え用事があるうとも、規律を乱す者には容赦がない。

「それは気の毒に」

「心が籠つていないなあ」ぼやきながら、ムラセは食べ始める。何となく付き合うような形で、シンカゲは頼杖をついた。食べ終わった兵士達は残り少ない休息時間を気に入りの場所で過ごすため、三々五々食堂を後にしている。空き始めた部屋を、再びシンカゲは見渡した。やはりクジヨウの姿はなかった。

豪快な食べっぷりでムラセが全ての皿を空にした時、遠く鐘の音が響いた。あと四半刻で午後の鍛練が始まる、その合図である。シンカゲは立ち上がった。

「どうした？ もう行くのか？」

「医療所に寄ろうかと思つてな」

答えたシンカゲに、ムラセは納得したように頷き、そう言えば、と続けた。

「クジヨウだが、屯所に来た時に門のところであつた。屯所の外ではいつもシンカゲと一緒になのに、珍しいこともある……」

シンカゲの表情にムラセは言葉を切った。

「どうした？」

「屯所の外、だと？」

その声音にムラセは瞬き、頷いた。

「ああ、そうだ。リラに道具だか何だかの買い出しを頼まれた、と……」

シンカゲはムラセの言葉を最後まで聞かずに走り出していた。ムラセの声が背後に響いたが、振り返らずに食堂を飛び出す。

クジヨウが一人で屯所を出たということが、シンカゲには咄嗟に

信じられなかった。何も言わずとも、クジヨウは己の立場をよく心得ている。例えばリラに頼まれたとしても、屯所を出るような用事は断るのではないだろうか。それに加え、リラが体調のすぐれないクジヨウに買い出しを頼むとも思えなかった。

医療所に走り込んだシンカゲに、リラは驚いた顔で振り返った。煎じ薬を作っていたのか、部屋にはむっとした臭いがたちこめている。

「いやだ、びつくりするじゃないの、シンカゲ」

「クジヨウは？」性急に問うたシンカゲに、リラは首を傾げた。

「クジヨウなら、畑に水を撒きに行ったわよ。今は食堂にいるかもしれないわね」

その答えに、シンカゲは束の間立ち尽くす。混乱の底から、やはり、という思いがわき起こり、苦く胸を浸した。

「リラは、クジヨウに買い出しを頼んではないんだな？」

「ええ、頼んでいないわよ。……何かあったの？」

その問いには答えずシンカゲは目まぐるしく思考を巡らせた。クジヨウは何故一人で屯所を出たのか。ムラセに嘘を言っただけ——決まっている。クジヨウはリュウドウを去るつもりなのだ。誰にも告げず、密かに。

「シンカゲ！」呼ばれて思考が途切れた。追って来たらしい、ムラセの姿が戸口にあった。

「どうしたんだ、いきなり。クジヨウがどうかしたのか？」

どうしたものか、とシンカゲはムラセを、次いでリラを見やった。クジヨウをすぐにでも捜すべきか。今から追えば、クジヨウが街を出る前につかまえることが出来るかもしれない。

——だが、それをすれば再びクジヨウの自由を奪うことになる。

今連れ戻さなければ、いずれクジヨウがいなくなったことは明らかになる。だが、クジヨウが逃げたということをシンカゲの胸の内にだけに秘めておけば、カガリの耳に入るまで時間をかせぐことが出来る。クジヨウが逃げたと知れば、カガリは何としてもクジヨウを

見つけ捕えようとするだろう。そして一度逃げたクジヨウをカガリは決して信用しない。最悪、命を奪おうとするかもしれない。そうなれば、シンカゲの言葉にも耳を貸さないだろう。

（クジヨウ……何故、何も言わずに……）

冷静に思考を巡らせながらも、シンカゲはわき起こる思いを抑えることが出来なかった。何故、一言告げてくれなかったのか。いつか必ず自由を返すと、そう言ったシンカゲを、そこまで信じる事が出来なかったのだろうか。クジヨウがこのまま去れば、もう二度と会うことはないだろう。クジヨウにとってシンカゲは別れを惜しむ程の価値もない存在だったのか――

そう思われても仕方がないだろう。シンカゲは自嘲の笑みを浮かべていた。シンカゲは、カガリが決して真の意味での自由をクジヨウに返さないことを知っていた。シンカゲが自由を返すと心に決めているようと、結局出来ることなどたかが知れている。今でさえ、シンカゲに出来るのは、口を閉ざしクジヨウが逃げるための時間をかせぐことぐらいだ。

きり、と胸の奥が痛む。クジヨウに信頼されていなかったと知ったが故か、それとも唐突に訪れた別れに対するものか――あるいは二度と会えぬということへの痛みなのか、シンカゲにはわからなかった。

せめて、クジヨウが自由になれるよう、口を閉ざしていよう。シンカゲは心を決める。しかし、不意に響いた声に、はやくもその決心を阻む困難の到来を知った。

「一体何の騒ぎだ」

医療所の戸口に、スイレンが立っていた。

20（後書き）

今回、かなり誤字・脱字があるかもしれません。出来るだけ直したつもりですが、直し切れていなかったらすみません。気付き次第修正したいと思っています。

では今後ともよろしくお願いいたします！

「血相を変えて走って行く姿が見えたが、何かあったのか？」

スイレンの問いに、シンカゲは努めて平静を装う。

「何でもない」スイレンが僅かに怪訝そうな顔をした。簡潔な答えがかえって悪かったか——スイレンの目が素早く医療所の中を見回した。

「クジヨウがいないな」と呟き、スイレンがちらりとシンカゲを見やった。「ムラセ」と強い口調で呼ぶ。それに、ムラセがまるで命令を受けたかのように応えた。

「クジヨウはどこだ」

「リラに頼まれた買い出しに出ている筈ですが」

シンカゲは思わずムラセを睨みつけそうになる。無論、ムラセに罪はないのだが。

「リラ、クジヨウを一人で行かせたのか」責める響きがあった。それに、リラが戸惑ったように答える。

「シンカゲも言っていたけど、買い出して何のことかしら。私はクジヨウにそんなことは頼んでいないわよ」

スイレンが器用に片眉をあげた。考えるように腕を組み、その眼差しがシンカゲへと向けられる。束の間の対峙。スイレンの思考が、シンカゲには手に取るようにわかった。

と、スイレンが素早く身を翻した。医療所を出て行くその背をシンカゲは追う。スイレンの前に立ちはだかると言った。

「待ってくれ、スイレン」

「どういふつもりだ、シンカゲ。クジヨウが逃げたんだ。お前もわかってるだろう」

「カガリに知らせるつもりか？ そのようなことはさせない」

「何を言っている。まさかお前クジヨウが逃げることを知っていたのか？ 知っていて行かせたのか！？」

「いや、クジヨウは俺には何も言わなかった。俺も、さつき気付いたところなんだ」シンカゲは苦く答えた。「頼む。カガリには伝えなideくれ」

「伝えやしないよ」どこか腹立たし気にスイレンは言った。「だが、クジヨウを行かせるわけにはいかない。すぐに連れ戻すんだ」

カガリに伝えはしない。そのスイレンの言葉に、シンカゲは目を瞠った。クジヨウが逃げたことを知れば、スイレンは迷わずカガリにそれを知らせるだろうと思っていのだ。

「シンカゲ、どきな」

「だめだ。クジヨウはこのまま行かせるんだ。今リュウドウを去らなければクジヨウは二度と自由にはなれないかもしれない」

「馬鹿を言うんじゃないよ。クジヨウがカガリから逃げ切れると思っっているのか！？ 万が一カガリがこのことを知れば、クジヨウは自由を失うどころじゃすまない。今度こそカガリはクジヨウを殺そうとする筈だ。今ならまだ間に合う。カガリに勘付かれる前にクジヨウを連れ戻すんだ」

スイレンの言葉に、シンカゲは僅かに安堵する。考え方や方法は違えども、クジヨウを案じているという点ではシンカゲと同じである。

「俺達が黙っていれば、当分カガリが気付くことはない」

低く言った。スイレンの表情が険しい色に染まった。そして僅かに迷う気配――

「どういうことなの？ クジヨウはリュウドウを去ろうとしているの？」

二人の間に突然割って入ったのはリラだった。

「すまない、リラ。事情は言えないんだ」

「事情なんてどうでもいいわ！」

リラの剣幕に、シンカゲとスイレンは呆気を取られる。長身の二人を睨みあげて、リラは言い募った。

「問題はクジヨウよ。リュウドウを出て行ってくて、ちゃんと行くあ

てはあるの？ まさか行くあてがないのに出て行こうとしているの？ あんな体で、無茶よ」

「体？ 確かに体調は悪そうだったけど……」

「そういうことじゃないわ。クジヨウは今ひどく不安定なの。こんな時に無理をしたらどうなるか……」

リラは、とにかく、と語気を強めた。

「クジヨウを捜しきてちょうだい」

戸惑いと迷い、そして新たに加わった混乱に、シンカゲは立ち尽くした。スイレンも同様の有様である。

その時、シンカゲの耳元でちりちりと空気が鳴った。反射的に手をやると、仄かな温もりに包まれる。何かと己の手を見詰めるシンカゲの前で、突然金色の渦が生まれた。掌の上に、栗鼠のような動物があらわれる。蟲だ。

蟲はシンカゲを見上げ、ちい、と鋭く鳴いた。四肢を踏ん張り、ふつくらとした尾をこれ以上ないというほど膨らませている。

「クジヨウの蟲じゃないか」それまで一言も発していなかったムラセが言う。

蟲は手から飛び降りると、再びシンカゲを見上げ鋭く鳴いた。焦れたように尾を振りたて、蟲は廊下の先へと走り出した。咄嗟にシンカゲはその後を追う。

「おい、シンカゲ」背後の声に、シンカゲは振り返った。

「クジヨウに何かあったのかもしれない」

それに、スイレンとムラセが無言でシンカゲの後に続いた。蟲はまるで導くようにシンカゲの前を走っている。向かう先は門だ。

クジヨウが屯所を出てから二刻程過ぎている筈だ。既に街の外に出ていてもおかしくはない。そのクジヨウの蟲が、何故シンカゲのもとに来たのか。蟲の尋常ではない様子に、シンカゲの中で嫌な予感が膨らんでいった。クジヨウの身に何かが起こったに違いない。

シンカゲを呼べば自由を失うとわかっていながら、クジヨウが蟲を送ったのだとしたら——シンカゲは拳を握り締めた。クジヨウに

何かあったと考えるだけで、鼓動が揺れる。不安と焦燥に押し潰されそうになる。

——クジヨウ！

声にならないまま、幾度も名を呼んでいた。

クジヨウは苦痛とともに意識を取り戻した。目を開けると、湿った地面が見えた。どうやら横ざまに寝かされているらしい。体を動かそうとして、あまりの痛さに低く呻く。吐き気が込み上げ、体を縮めるようにしてそれに耐えた。

「気付いたか」高い所から、声。次いで肩をけられて、視界が回転する。北方きたかたの男がクジヨウを見下ろしている。男の背後には天井が見えた。周囲は薄暗く、埃と黴の臭いがした。どこか建物の中、おそらくは地下のような場所だろうかとクジヨウは思う。

苦痛を堪えてクジヨウは起き上がる。すぐ背後にあった壁に背を預け、クジヨウは何とか上半身を起こした。少し動いただけでひどい眩暈と頭痛がする。体が熱かった。

「驚いたな。動けるのか」

クジヨウは再び男を見やった。男の背後には武術大会で対戦した兵士と、その他に三人——あの路地にいた者達だ。案の定どこかの地下らしく、壁には窓の一つもなかった。隅に階段があり、その先に小さな木の扉が見える。クジヨウには、そこまでの距離があまりにも遠く思えた。これだけの男を相手にして、到底逃げるかなわないうだろう。

クジヨウは足を投げ出して座ったまま、冷静になろうと努める。どれくらい気を失っていたかはわからない。だが、そう長い時間ではないように思えた。ここがどこかはわからないが、あの路地から遠く離れているということはあるまい。

人質——男が言っていた言葉を思い出す。おそらくはクジヨウを楯にシンカゲを呼び出すつもりなのだろう。男達はクジヨウの姿を

見かけ、後をつけて来たに違いない。気が急いていたとはいえ、何も気付かなかった己の迂闊さにクジヨウは腹立ちを感じる。それとも気付かなかったのはシンカゲのことを考えていたせいだろうか。

「俺をどうするつもりだ」

「お前をどうこうするつもりはない。俺達が用があるのはシンカゲだ」

クジヨウは必死に考える。もうシンカゲにクジヨウを捕えたことを伝えたのだろうか。いくらシンカゲと言えども人質を取られ、多勢に無勢ではどうなるかわからない。シンカゲを来させたらだめだ。そのためにはどうすればいい——クジヨウは男を睨みつけた。

「お前たちはどうしようもない馬鹿だな」

「何だと？」

「俺を人質に取って多勢で攻めればシンカゲに勝てると思ったのか？」

クジヨウは笑む。嘲笑——それに男達の顔つきが険しくなる。

「そんな卑怯な方法でしかシンカゲと戦えないとは、北方の兵士が聞いて呆れる。所詮卑怯者の集団か」

男はしゃがみこむと、クジヨウの顔を覗き込んだ。

「ただシンカゲに守られるだけのがきかと思っていたが、威勢がいじゃねえか」

「お前達はまともに戦う度胸もない臆病者だ」

男がクジヨウの胸倉を掴み、体を引きずり上げた。

「死にてえのか」

——目を逸らしてはだめだ。恐怖を、決して悟られてはならない。体温が下がるような感覚とは裏腹に、体の奥では焰が猛っていた。まるで今にも殻を破ろうとするかのように、得体の知れない力が蠢いている。

恐れ気もなく見返すクジヨウに、男の顔が憤怒に染まった。

男はクジヨウの体を力任せに地面に投げつけた。衝撃にも、クジヨウは声を出さなかった。容赦なく蹴りつけられてさらに体が転が

る。歯を食い縛り、クジヨウは起き上がろうと足掻く。男の足音が近付いて来る。髪を括る紐が切れたのか、長い黒髪が地面に広がっていた。それを見やり、唇が歪む。不意に己の無力を笑いたくなくなった。

「何が可笑しい」髪を掴まれて上向かされる。クジヨウは男を見上げた。

「……あまりに弱くて……笑えてくる」

男が怒声を発した。殴られてクジヨウは再び地面に倒れ込んだ。

「おい、それ以上したら折角の人質が……」躊躇いがちな背後からの声に、男は怒鳴るように答えた。

「シンカゲを呼び出すのは中止だ！ こいつを殺してやる！」

まだシンカゲには伝わっていなかったか——クジヨウは痛みの狭間で、僅かに安堵する。

（……よかった）

そのまま暗転しそうになる意識が、男の乱暴な手で引き戻される。「おっと、まだ寝るんじゃないぞ。これからが楽しいところだつてのに」

男はクジヨウの胸倉を掴み、力の抜けた体を引き上げた。クジヨウはうつすらと目を開けた。もはや手を動かすことさえ出来なかった。殺されるのかもしれない。そう思うと、恐怖にかわって、どこか安寧に似た虚脱感に浸される。クジヨウはぼんやりと男の顔を眺めた。

その時、怒りに醜く歪んでいた男の表情が変化した。息がかかる程近くクジヨウの顔を覗き込む。顔を背けようとしたクジヨウの顎を捕え、男はなおもまじまじと見詰めてきた。

「お前……まさか女か？」

男の言葉に、クジヨウは目を見開いた。

「違う」囁くように答える。だが、一瞬の沈黙が男の確信を深めたのか、その顔に気味の悪い笑みが浮かぶ。

「殺すなら早く殺せ」

「ああ、殺してやるよ。十分にかわいがってやってからな」

男はクジヨウを地面に突き倒すと、馬乗りになるようにして覆いかぶさってきた。圧倒的な力に、手足の自由が奪われ体が地面に縫い付けられる。クジヨウは茫然とする。獲物に向ける獣の笑み——だが、暴力への愉悦だけではない。男の顔に浮かぶのは欲望の色だ。感じたことのない恐怖に、体が竦んだ。

「……俺は……男だ。女じゃない」

声が震える。

「今から存分に確かめてやるよ」

言うや、男がクジヨウの上着を、首元から力任せに引き裂いた。鎖骨までが露わになる。だが、頑丈な布地は容易くは破れない。男が舌打ちをする。

「やめろ！」クジヨウは叫び、無我夢中で男の目を狙って手を突き出した。寸でのところでかわした男の頬に、爪がかすったのか一筋の傷がはしった。

男はクジヨウの手首を掴み地面に押さえつけると、不意に逆の腕を振りかざした。そこに光る銀の影に、クジヨウの体が凍りつく。振り上げられた小剣——男はクジヨウの掌目がけてそれを振り下ろした。掌を貫き、刃が地面を穿つ。焼けつくような痛みにクジヨウは鋭く叫んだ。

視界が白く染まる。クジヨウの体の奥で焰が弾けた。地面がうねり、世界が揺れる。迸るように体の奥の熱が膨張し、鼓動が暴れる。恐怖が罅割れ、嵐のような苦痛の中にクジヨウは呑み込まれる。奔流のような力に、体がばらばらになりそうだった。

——苦しい。誰か……

クジヨウの瞼から、一筋涙が流れた。

残された手の自由をも封じ、男が押し掛かってくる。苦痛と絶望に、クジヨウは顔を背けた。

——シンカゲ

浮かんだのはただ一つの名だった。シンカゲ、とクジヨウはもう

一度繰り返す。

心の内の呼びかけに応えるように、遠く、クジヨウの名を呼ぶ声が聞こえた気がした。体を乱暴にまさぐる男の手から意識を逸らそうと、クジヨウは耳を澄ませる。幻聴でもよかった。もう二度と聞くことがないと思っていたシンカゲの声だ。

——クジヨウ

また、聞こえる。クジヨウは目を見開く。下卑た表情でことの成り行きを見守っていた男達が、怪訝そうに顔を見合わせている。クジヨウに覆いかぶさっていた男の動きが止まっていた。

「クジヨウ！」

今度ははつきりと、シンカゲの声が耳朵を打った。扉が激しく叩かれる。男達が落ち着きをなくし、浮足立った。木の裂ける音が響き、扉が破られた。煤けた闇に光が差し込む。クジヨウは霞む視界に、光を負って立つシンカゲの姿を見ていた。

蟲の後を追いついて着いたのは、街の外れに程近い一角にある崩れかけた空家だった。蟲は壊れた家財が散乱する部屋を通り抜け、小さな扉の前で姿を消した。

「クジヨウ！」シンカゲは声を張ると、扉に手をかけた。鍵がかかっている。力任せに押すと扉はがたと揺れた。

「シンカゲ、本当にここにクジヨウがいるのか？」背後からかけられた声には答えず、シンカゲは扉を蹴りつけた。扉が弾けるようにして外れる。

中に踏み込んだシンカゲは目の前の光景に立ち尽くした。

薄暗い地下には五人の男、いずれも覚えのある顔だ。そのうちの一人、因縁ある北方の兵士が、クジヨウの体を地面に押さえつけ圧し掛かっている。一瞬のうちに、シンカゲの目は全てを捉えていた。クジヨウの手を地面に縫い付ける小剣、地面を染めなおも流れ出る血。引き裂かれた衣。大きく見開かれたクジヨウの瞳から、一筋涙が零れていた。

「貴様ら……」

目もくらむほどの怒りに、握り締めた拳が震える。シンカゲは男達を睨み据えながら階段をおりる。気圧されたように立ち竦んでいた男達が、闇雲に襲いかかってきた。軽くかわし一撃で倒す。四人を地面に沈めるのに要した時間は実に数秒程だったろう。

クジヨウを押さえつけていた男がゆっくりと立ち上がる。繰り出された拳を、シンカゲは無造作に避け、相手の腹に容赦のない一撃を放った。手加減をするつもりなど毛頭なかった。何とか踏みとどまった男を殴り飛ばし、逃げようとするのを地面に投げ倒す。首元を締めあげると、男の顔に恐怖が浮かんだ。さらに拳を振り上げ、シンカゲは動きを止めた。

「シンカゲ」細い声。

地面を這いずるようにして、クジヨウがシンカゲの傍らに近付いて来る。力尽くで小剣を引き抜いたのか、刺し貫かれ血を流したままの掌をシンカゲの腕に伸ばすと、囁くように言った。

「……もう、いいから……。俺は大丈夫だから……。もうやめて……」

「何を言っている」シンカゲの声が震えた。クジヨウが弱々しく頭を振る。

「お願いだから……。もう……」

「お願いって……。お前、自分がどんな目にあつたと……！」

言いかけてシンカゲは息を呑んだ。クジヨウが苦し気に胸を押さえ、倒れ込んだのだ。

「クジヨウ！？」シンカゲはクジヨウに駆け寄ると、その肩に手をかけた。クジヨウの体は熱かった。まるで内部から火を噴き出そうとしているかのように——不意にクジヨウは傷ついた手を伸ばして高く叫んだ。

シンカゲは目を瞪る。刺し貫かれた掌の、ぱっくりと開いた傷口が少しずつ消えて行く。まるで自然と皮膚が縫い合わされるように、傷一つない滑らかな肌があらわれる。それはあり得ない光景だった。やがて傷口は全て塞がれ、傷があつた名残はこびりつく血糊ばかり

である。

シンカゲの手の下で、強張っていたクジヨウの体からすんと力が抜けた。閉ざされた瞳。意識を失ったのだ。

「ひいいい！　ば、化け物だ！」男の叫び声に、シンカゲは我に返った。男の視線はクジヨウの掌に注がれている。まるでように男が出口へと駆け出した。

「逃がすな！」シンカゲ同様呆気に取られていたらしいスイレンとムラセの動きは一拍遅れた。倒れている他の男達の体が邪魔をし、逃げる男を捕えることが出来なかった。地下から走り出して行く男に、シンカゲは舌打ちを漏らす。後を追おうとして、シンカゲはスイレンの声に足を止めた。

「あたしとムラセで追う！　シンカゲはクジヨウを早くリラの元へ！」

答える間も与えず、二人は男の後を追って地下を飛び出して行った。シンカゲは周囲を見回した。倒れている男達は当分目覚めないだろう。目覚めたところで、容易には動けぬ程の打撃を与えている。シンカゲはクジヨウの元に戻ると、その体を抱き上げた。異常な程の高熱は何時の間にかおさまっていた。裂けた服から覗く細い首筋が力無く仰のく。シンカゲはクジヨウの頭を己の肩口に引き寄せ、長い睫に絡め取られるようにして光る涙の粒を見詰める。頬に触れる黒髪が冷たく、シンカゲは唇を噛み締めた。

吹き荒れていた怒りが次第に凪いで、次いでいまださめやらぬ驚きと戸惑いに捕われる。奇跡のように消えた傷——あれは一体どのような力だったのだろう。そして、それをも圧してわき起こるのは、狂おしいまでの思いだった。

「クジヨウ」

聞こえないとわかりながら囁く。その温もりがあまりに夢く感じられて、シンカゲはクジヨウを抱く手に力を込めた。

第六章

鍛練の終了を知らせる鐘の音が鳴った。兵士達の掛け声が途切れ、途端に空虚な夕暮れの気配が押し迫る。紅が大気に溶けて、沈みゆく太陽の匂いが風に紛れこんでいた。

「シンカゲ、飲みなさい」

ことりと傍らの卓に置かれた茶器に、シンカゲは目をやった。揺らめく湯気に、淡い香りが絡みつく。リラが穏やかな眼差しで彼を見詰めていた。

「ありがとう」シンカゲは呟き、茶器に手を伸ばした。自覚していなかったが喉が渴いていたらしい。程良く温かい茶を一気に飲み干す。考えてみれば、昼食の後一度も水を口に含んでいなかった。

シンカゲは茶器をリラに返し、再び視線を寝台に横たわるクジヨウに向けた。膝に肘をつき、顔の前で両手を握り合せる。リラがクジヨウの診察を終えてから、シンカゲはずっとクジヨウの傍らに座っていた。リラが着がえさせたのだろう、清潔な衣を身に纏うクジヨウは、昏々と眠り続けている。

「傷はどこにもないわ」クジヨウを診察した後、リラはシンカゲに言った。掌の傷は勿論、きたかた北方の男に受けただろう暴力の後には、どこにもなかった。そんな筈がないことをシンカゲは知っている。

空家の地下に残して来た男達は、シンカゲの報告を受けた東方の兵士がすぐに拘束した。既に厳しい取り調べが行われている。男達が語った内容はシンカゲにも知らされていた。北方の男は抵抗出来ないクジヨウを一方的に痛めつけたと言う。

シンカゲは歯を食い縛った。烈しい怒りが胸中に燃え盛る。シンカゲ自身を取り調べに同席しなかったのは、その場にいれば、己が男達に対して何をするかわからなかったからだ。

その時、戸口に影が差した。振り返り、シンカゲは立ち上がった。スイレんとムラセが医療所に入ってくる。その表情にシンカゲは落

胆を覚える。疲れと、苛立ち。二人の顔を彩るそれに、全ての事の発端と思われる男を捕えることが出来なかったのだとわかった。シンカゲも男を追うのに加わりたかったが、今回の事件の当事者でもあるシンカゲにそれは許されなかった。

「あいつは捕えられたのか？」答えを半ば予期しながらも問うたシンカゲに、スイレンは苦々しく口を曲げて頭を振った。

「だめだった。北方の屯所に逃げ込んだと思ったんだけどね。どうやらクマガヤのところに泣きついたらしい。北方も知らぬ存ぜぬを貫いている。こちらで捕えている四人は既に北方の兵士ではないと言つて、まともに取り合おうとしない」

確かに、四人の内の三人は既に北方の兵士ではない。三人は以前、酒屋で暴れていたところをシンカゲがのした相手だった。その後北方を追放された三人がシンカゲを怨んで復讐を唱えている、と何時だったかスイレんに警告を受けた覚えがある。だが、あとの一人は、武術大会での武器の不正使用により何がしかの罰を受けたかもしれないが、北方を追放されたとは聞いていない。察するに、北方はあの若い兵士を厄介事もちとも切り捨てたのだろう。

「北方の兵士ではないから何の関わりもない、拳句の果てには北方を貶めんとする東方の陰謀ではないか、とまで言ってきた」

ムラセが硬い口調で言った。普段決して浮かべることのない険しい表情である。

「スイレ、クマガヤはどうなんだ」

「こちらはおつとだめだ。門前払いで話を聞こうともしない。だが、無理に踏み込もうものなら、あたし達の方が罪に問われかねん」

「白を切りとおすつもりか」シンカゲは苦々しく言った。

捕えた男達の言葉から、彼らがクジヨウを楯にシンカゲを呼び出そうとしていたことは明らかだ。男達は数日前から東方の屯所を見張り、シンカゲとクジヨウの動きに目を光らせていたらしい。はじめからクジヨウを攫うことを目論んでいたらしく、クジヨウが一人で屯所を出たのはまさに格好の機会だったろう。クジヨウを楯にシ

ンカゲを呼び出すのは夜、北方の鍛練を終えた兵士達を更に集めて、十人以上でシンカゲを襲うつもりだったと言う。

スイレンは寝台のクジヨウに近付き、その顔を覗き込んだ。素早く顔の前に手を翳す。スイレンの気持ちしがシンカゲにはよくわかった。クジヨウの顔に苦しみはない。だが、息をしているのを確かめずにはいられない程、その寝顔は静かで生気がなかった。

「傷は？」張り詰めた問い。

「体のどこにも残ってはいなかったそうだ」

予想していたのかもしれない。スイレンの表情はさほど変化しなかったが、リラに向けられた視線は深い懸念を宿していた。

「リラ、話してくれ」シンカゲはリラに言う。クジヨウの傷が消えたのだと、そう知ってもリラはさほど驚かずクジヨウを案じる様子だけを見せた。何か知っているのか、と問うたシンカゲに、リラはスイレンとムラセが戻ってから話す、とだけ答えたのだ。

リラは頷き医療所の扉を閉じると、三人を振り返り「座ってちょうだい」と椅子をすすめた。自身も椅子に座り、束の間クジヨウの横顔を見やると、ゆっくりと言った。

「少し前、クジヨウは男の子ではない、と言ったわね」

それに三人が頷く。

「私は嘘をついたわけではないけれど、本当のことを告げたわけでもないの。みんなは私の言葉できっとクジヨウは女の子なのだと……女性なのに男性の振りをしているのだと、そう思ったでしょうね」

皆の顔をゆっくりと見回し、リラは言った。

「クジヨウは、正確には女性とも言い切れないの」

シンカゲの中でどくりと鼓動が鳴った。じわじわと背筋を這い上るように、暗い予感が広がる。聞きたくない、と咄嗟に思う。だが、リラの言葉は容赦なく響いた。

「クジヨウは岐^きよ。岐は無性に近い存在——クジヨウは言ってみれば、女性として花開く前の蕾なの」

ゆっくりと、砂が零れ落ちるように時が流れた。リラの言葉がシ

ンカゲの中ではつきりと捉えられるまで、実際には左程長い時間ではなかっただろう。

——クジョウが、岐。

反射的にシンカゲは立ち上がっていた。騒々しい音をたてて椅子が倒れる。そのまま医療所を出て行こうとした彼に、リラが厳しい声を放った。

「シンカゲ！ 逃げちゃだめよ！」

凍りついたように立ち尽くしたシンカゲに、リラが諭すように続ける。

「お願いよ、シンカゲ。あなたも向き合ってちょうだい」

己の過去に——そう言われた気がした。

魄^{はく}への憎しみが、胸の奥でのたうつ。シンカゲは足元を見詰める。クジョウが流した一筋の涙、それをシンカゲは思い出していた。シンカゲは唇を引き結ぶと、倒した椅子を直し、再び座った。

「すまん。続けてくれ」低く言う。リラがシンカゲを真直ぐに見詰める、頷いた。

魄の逸話は数多い。

ある魄は、己の力を病や怪我に苦しむ人々を救うために使った。生涯伴侶となる聯^{れん}を持たず、長い時を人とともに生き、後に神女と呼ばれた。また、ある魄は一人の男を聯に選び、その男が望むままに強大なる力を与えた。男はその力で人々を支配し、長く霸王として君臨したという。男の暴虐に怒った人々との壮絶な戦いの末討たれるまで、男の治世は続いた。無慈悲な男に力を与えた魄を、人々は鬼女と呼び、恐れ憎んだ。

「でも実際に魄がどのような存在か、正しいことを知っている人はさほど多くはないと、私は思っているわ」

リラは言った。

「クジョウのためにも、みんなには魄が、そして岐がどのような存

在なのか、知っておいてほしいの」

その言葉に否やは出なかった。

魄とは人でありながら、人ではない。身の内に膨大な力を宿しながら、その姿はこの世の至宝とまで言われる、天女のように清らかで美しい女性の形をしている。数百年という長い命を生き、その間に何人の伴侶を得ようともし、魄が生涯に産む子どもはたった一人、娘と決まっている。それが岐だ。

「魄となる前の姿が岐、ただそういう風に言われているけれど、魄として覚醒する前の岐は、とても無力で弱い存在よ。魄としての力はまだ生まれていなくて、女性としても成熟していない無垢な性を有する存在。クジヨウを見ればわかると思うけれど、そうでなければ、いくら中性的な姿形をしていても少年として生きることが出来なかった筈よ。岐は覚醒して魄としての力に目覚めるとともに、姿形も一気に女性へと成長するの」

それはまるでさなぎが蝶へと羽化するように――覚醒の前後で二ふたなり形を有する存在が魄なのだ。

「岐が魄へと覚醒するのは、人であれば十六から十七の頃だと言われているわ。詳しくはわかっていないけれど、岐は覚醒の時百日の眠りにつくと言われている。姿形が女性へと変わり、身の内に魄としての強大な力が生まれるの。生まれたばかりの魄の力は、身の内から溢れ出して、凄まじい放出が起こる。だからこそ覚醒を迎える頃になると、岐は決して人間に近付こうとはしない。周囲を巻き込まないように森の奥深くに姿を隠して、そこで覚醒に向けて眠りにつくのよ」

そして、トリラは続けた。岐の覚醒に伴う力の暴発はとてつもなく危険なものだが、覚醒を終えたばかりの魄はひどく無防備な存在でもある。岐が森の奥を覚醒の場を選ぶのは、魄を得んとする人間から身を守るためでもあるのだ、と。

「だが、魄として覚醒したら、人の力など到底及ばないんじゃないのか？」

スイレンが問う。尤もな疑問だった。リラは緩やかに頭を振った。
「あまり知られてはいないことだけど、魄はそもそも、他者を傷つけることをひどく嫌うの。歴史の中で、幾度も人は魄を迫害したわ。その時も、魄は力で抵抗をしようとはしなかった。狩られるがままに、全ての魄が滅んだ国もあったのよ」

思わず顔を顰めたシンカゲに、リラは続ける。

「よく考えてみて。魄の力は一夜にして一国を滅ぼすことが出来る程に強大なのに、魄が歴史の中で覇者になったことは一度もない。そうでしょう？」

「魄を得た者は覇者となる……」ムラセが呟いた。

「そう。魄を得た者が、覇者になるの。その言葉が全てをあらわしている。魄はその魂において、人を傷つけたり支配することを厭う。覇者となるのは魄に力を与えられた聯、つまりはあくまでも私達人間よ。争いを厭う魄が森の奥に姿を消したのも、新たな聯を生み出さないため、聯による暴虐をなくすためだったのかもしれないわね」
「だが、魄の力により殺された人もいる」シンカゲの静かな声音だった。

「ええ、魄がその力で誰かを傷つけることはあるわ。でも、そうする時には、何か必ず理由があるのよ」

シンカゲはリラから顔を背け、拳を握り締めた。心中に吹き荒れる思いを押し伏せる。言葉を呑み込み、話を聞くことだけに集中した。今は己の過去に捕われている時ではない。

「だからクジョウは武器を持つことも出来なかったのか」

ムラセの言葉にシンカゲははっとする。確かに、クジョウは剣を持つことさえ出来なかった。体術でも防衛術は器用にこなしても、いざ攻撃術となると途端に体が動かなくなる。性格によるものだと考えていたが、それだけではない深い理由があったのだ。

「私はこう考えているの。魄とは、天上に咲くべき花の種が誤って地上にこぼれ落ち、人という肉体の器に宿った存在だと。人の身に天の力は強過ぎる。尽きることなく生まれ出でる力は、そのままで

はやがて魄の人としての体を壊してしまう。だから魄は力を解放することで、己の体と命を守っているの。力の受け手が人であるうと、大地であるうと、魄は力を解放しなければ長くは生きられない。他者を傷つけることを厭うのも、もとの魂が天上に在るべき花であれば、領けること」

沈黙が落ちる。窓からは次第に宵の気配が忍び寄る。

「じゃあ、クジヨウの傷が癒えたのは、魄としての力のせいなんだな？」

スイレンの問いに、リラはすぐには答えなかった。思案するように目を伏せ、言った。

「魄の力しか思えないのだけれど、それが奇妙なのよ。本来、岐の姿のままで魄の力があらわれることはないの。覚醒もしないまま、あのように傷を癒すようなことは本来出来ない筈なのよ。さっきも言っただけれど、岐には何の力もないのだから。それに、クジヨウにはもう一つ奇妙なことがあるわ」

リラはクジヨウを見やった。つられて、他の三人も寝台に目をやる。どこまでも澄んだ水を思わせる秀麗なクジヨウの横顔は、どこか浮世離れして見えた。

「クジヨウはたった一人で旅をして生きてきたと言っていたわね。クジヨウは丁度人としての姿が十六くらいだから、いつ魄に覚醒してもおかしくはない年齢に達していると思うの。それなのに、どうして今まで人の中で生きて来たのかしら。そのような時期に、岐が人の中にいることはまずない筈なのに」

「いつ、覚醒するかわからないから？」

「ええ。森の外で生きることを選んだ岐も、覚醒の時期が近付くと森の奥へと向かうと聞いているわ。覚醒による力の暴発に周囲を巻き込まないためと、魄の覚醒を知った人間から身を守るために……」

「もしかして今日クジヨウがリュウドウを出て行こうとしたのは、覚醒の時期を迎えたと気付いたからか？」

シンカゲの問いに、リラは確信の持てぬ様子で、言葉を紡いだ。

「わからないわ。ただ岐の姿のままで魄の力が出たということは、明らかに異常なことよ。最近クジヨウの体が不安定だったのも、おそらくそれと関係があると思うの。私の感覚では全てを感じ取ることは出来ないのだけど、クジヨウの中で何か大きな力が動いているような気がするの。クジヨウ自身も気付いていたでしょうし、少なからず不安も感じていたんじゃないかしら」

シンカゲは眼差しを落とした。昨夜、魄に家族を殺された、ということをクジヨウに告げた。その言葉がクジヨウを追い詰めた可能性に思い至ったのだ。魄という存在を憎むシンカゲを、クジヨウは恐れたに違いない。もしかするとリュウドウを去ろうと心に決める程に――。何故あのようなことを言ってしまったのか、とシンカゲは今更ながらに悔いる。

「クジヨウはどうなるんだ？」

シンカゲは呟いた。

「岐が魄に覚醒するのは、体が力の器として成熟した証よ。でも体は岐のまま、魄としての力のみが発現しているのだとしたら、未熟な体ではきつと力に耐えられない。このままでは、遠からずクジヨウは命を落とすことになるかもしれない」

リラが静かに告げた。

屯所の屋上からシンカゲは夜に浮かび上がる街を見詰めていた。

夜風に撫でられて鍛練着が揺れる。カガリの屋敷に灯る明かりを探したが、光の群れの中、どれが屋敷のものかはわからなかった。

「シンカゲ、ここにいたか」

ムラセの声に、シンカゲは振り返らなかった。シンカゲの傍らに座ったムラセが、「落ち込むといつもここに来るな、シンカゲは」と、心地良い風に目を細めながら言った。

「落ち込んではいない。自分自身に腹を立てているだけだ」

「似たようなものだろう」

「放っておいてほしいんだがな」

「そうしたいのはやまやまだが、聞きたいことがあるのでね」

溜息をついてシンカゲはムラセを見やった。「何だ」問えば、ムラセは落ち着いた声音で言った。

「スイレンとシンカゲが昼間に話していたことだが……クジヨウが逃げようとしたとか、カガリがクジヨウの自由を返さないとかあれはどういうことだ」

そういえばそんなことをスイレンと言い合ったな、とシンカゲは思う。半日程前のことだが、まるで遠い昔のことのようだ。

「それは言えない」言い逃れなど最早無理だと悟ったシンカゲの物言いは、簡潔であり取りつく島がなかった。ムラセは不満をあらわにしたが、こうと決めたら梃子でも動かないシンカゲの性格をよく理解している。ぶつぶつと不平を漏らしたが、それ以上問いはしなかった。暫く無言で街を眺め、ムラセは再び口を開いた。

「クジヨウが岐^きだということがそんなに受け入れ難いか？」

まるで幾度も練習した言葉のように、ムラセが澁みなく言った。

シンカゲは組んだ腕に顎を埋める。目を細めると、灯火が曖昧に滲んだ。問いへの答え同様、掴み難い。

「正直に言つとね、私はクジヨウのことをまるで魄はくのようだと考えていた。無論、本当に魄だとは思ひもよらなかったが」

驚いて顔を振り向けたシンカゲに、ムラセが笑む。

「魄の魂が天上の花だというリラの言葉に、私は賛成だ。一度その美しさに気付けばどうしても目が離せなくなる。今でさえそう感じるのだから、魄となつたクジヨウはどれ程に美しいだろうな」

シンカゲは不機嫌に口を曲げた。クジヨウの美しさに気付いていたのは何もお前だけではない、と言ひそうになり、言葉を呑み込む一人の女性を巡つての恋の鞘当てでもあるまいし、そのようなことを言えばムラセに笑われるだけだろう。実際、笑われても仕方ないと思う。ムラセに言われるまで、シンカゲは疑ひもなくクジヨウを少年だと思つていたのだから。その美しさに気付いたのもつい最近である。

「岐だからと言つて、クジヨウに酷い態度を取るなよ」

低くムラセが言つた。それにシンカゲは思はずかつとする。鋭い口調で返していた。

「そのようなことを俺がすると思うのか!？」

「普段のシンカゲならば、そうそう感情にのまれることはないとかつてゐる。だが、魄のこととなると、シンカゲは冷静さを失う。クジヨウを悲しませるような態度を取るくらいなら、冷静になれるまでクジヨウには会わない方がいい」

「何故ムラセにそのようなことを言われなければならない。俺はクジヨウを守ると決めたんだ。クジヨウが岐であろうとなかろうと、その気持ちは決して変わらない」

ムラセは束の間シンカゲを見やる。

「ほら、既に冷静じゃない。クジヨウを守る、というのは誰からだ？ 北方きたかたか？ 魄を狩る人間からか？ それとも、カガリか？」

シンカゲは言葉に詰まつた。秘密の一旦を漏らしてしまったことに気付く。大きく息を吸ひ、そして一度に吐き出した。

「そうだな。俺はまだ冷静にはなれない。気持ちの整理がつかない

んだ。クジヨウが男ではないと知っても、さほど動揺しなかったのにな。男だろうが女だろうが、クジヨウはクジヨウに変わりないだろう、と……。だが、岐であると言われたらこのざまだ。自分でも情けない。クジヨウにどう対すればいいのかわからない」

「本当に馬鹿だな、シンカゲは」

呆れたようにムラセが言った。どういうことだ、と憮然としたシンカゲに、対する相手は複雑そうな眼を向ける。

「シンカゲがそんな風では、私もなかなか諦めがつかない」

それとも諦めるのはまだ早いか、と、これは聞き逃しそうなほどの呟きだった。シンカゲは顔を顰める。

「何のことだ」

「わからなければいいんだよ。むしろ、その方が私には望ましい」

意味深に言くと、ムラセは星空を仰いだ。問い詰めようとしたシンカゲだったが、戸口にあらわれたスイレンの姿に言葉を呑みこんだ。

「やはりここにいたか。落ち込むといつもここに来るな」

「どいつもこいつも」とシンカゲは独りごちる。だが、次の言葉に顔を引き締めた。

「クジヨウが目を覚ましたよ」

クジヨウは目を開けると、ぼんやりと天井を見詰めた。医療所の寝台で目覚めたのは三度目になる。そのため、そこが医療所であることはすぐにわかったが、何故自分がそこで寝かされているのかわかりにはわからなかった。

また倒れてしまったのだろうか。そう思い、いいや違う、と思い直す。

（リュウドウから逃げた筈だ……）

そこまで思い、クジヨウは息を呑んだ。記憶が一度に蘇る。汚れた街角で北方の男達に捕われたこと、暗い地下、暴力への愉悦に歪

んだ男の顔——押さえつけられた地面の冷たさ、そして振り翳された小剣。

蘇った恐怖が悲鳴となって零れ落ちそうになり、クジヨウは両手で顔を覆う。その動きに敷布が微かな音をたてた。

「クジヨウ、気付いたのね」リラの声。二つの足音が重なり、一つは遠ざかり、あとの一つは駆け寄ってくる。優しい手がクジヨウの頭を撫で、髪を梳いた。

「もう大丈夫よ、クジヨウ。怖い男どもはどこにもいないわ」

クジヨウは手をおろすと、リラを見上げた。柔らかく灯る明かりに、夜であることがわかった。

「覚えている？ シンカゲ達があなたを救い出したの」

クジヨウは小さく頷いた。戸口に立つシンカゲの姿を、その顔に浮かんでいた凄まじい怒りの形相を思い出す。容赦なく男を痛めつける姿に感じた身が縮むような恐怖も——。

「……どうして、シンカゲはあそこに……？」

己のものとは思えぬ細い声に、クジヨウは言葉を切る。そして不意に目を見開いた。いまだ中途半端に翳したままだった己の右手を見やる。記憶に生々しい痛みが、どこにもない。掌は滑らかな肌に覆われ、刺し貫かれた筈の傷が消えていた。

「傷が……」

「体のどこにも傷は残っていないわ。その掌の傷も、シンカゲ達の話ではみるみるうちに塞がっていったということだけれど、覚えていないかしら？」

茫然とクジヨウは首を振った。気を失う前のかろうじて残っている記憶は、わきあがった熱の塊に、体が燃え上がりそうな程の熱さと苦痛を感じたことだけだ。

リラは注意深くクジヨウの様子を見詰めていたが、「シンカゲ達がクジヨウを見つけたのは、あなたの蠱が導いてくれたからよ。それも覚えていないの？」と、問うた。クジヨウは再度首を振る。

「俺は……蠱にそのようなことは頼まなかった……」

正確には蠱を使うということすら思いつかなかったのだが、例え蠱の存在に思いが及んでもシンカゲを呼ぶなど考えはしなかっただろう。そう思い、クジヨウは戸惑う。蠱は主の思いによってしか動かない。つまり、心の底のどこかでシンカゲに助けを求めていたということだろうか。

「ねえ、クジヨウ。あなたが岐だということを、シンカゲとスイレンとムラセに伝えたの」

リラの言葉はあまりにさりげなく、あまりに唐突だった。咄嗟に何を言われたのかがわからなかった。じわじわと言葉の意味を理解し、クジヨウは弾かれたように身を起こした。力の入らない体がくず折れそうになるのを肘について支え、クジヨウは茫然とリラを見詰めた。リラが手を伸ばそうとするのを、反射的に後ずさって避ける。リラは束の間悲し気な表情を浮かべたが、変わらぬ穏やかな口調で言った。

「あなたが岐だということを、私は大分前から気付いていたのよ。本来ならあなたに無断で人に明かすようなことはしたくなかったけれど、今はそうも言っていられないの。シンカゲ達はあなたの傷が消えるのを目の前で見てしまった。それに、あなたに酷いことをした北方の男も。男はいまだに捕えられてはいないわ。有力商人のクマガヤのところに逃げ込んで東方では手出しが出来ないの。男が見たことを人に言えば、あなたが魄であると考える人間が出てくるかもしれない」

クジヨウは吐き気を覚えて手を握り締めた。動悸が激しくなる。わき起こったのは紛れもなく恐怖だった。リラが差し出した手を、今度は避けなかった。避けることが出来なかったのだ。体が小刻みに震える。あやすようにリラがクジヨウの背中を撫でた。

「落ち着いてちょうだい、クジヨウ。怖がらそうとしているわけではないの。あなたはこれまでのように一人でいてはだめだと、そう言いたいだけなの。誰もがあなたを脅かすわけではないわ。あなたを守ろうとする人間もいるの」

ねえ、そうでしょう？ と、これはクジヨウに向けられた言葉ではなかった。クジヨウは医療所の戸口に目をやった。そこに、スイレンとシンカゲ、そしてムラセの姿があった。何時からそこにいたのか、クジヨウにはわからなかった。

「なんてこった……そのことをすっかり忘れていた。あの男も傷が塞がったところを見ていたんだ。クマガヤがまともに取り合わなければいいが……」スイレンが呟く。それにリラは首を振った。

「クマガヤが男を匿ったのが単にカガリへの当てつけならいいけれど、クマガヤは欲深いだけの愚かな人間ではないと思うの。男を匿ったのは、何がしかの利があると考えたからに違いないわ。男の話聞いて、例えクジヨウのことを魄とは思わなくても、傷を癒す能力を有する人間と知れば、興味を抱くでしょうね」

シンカゲ達の表情がみるみる険しくなる。一方のクジヨウは、リラの思考に驚きを感じていた。僅かに恐怖が遠ざかったくらいである。どうやらリラが優れているのは、癒す方面だけではないらしい。「ねえ、シンカゲ。クジヨウを屯所で預かることは出来ないかしら？」

え、とクジヨウは目を見開く。シンカゲも驚きに目を瞠っていた。「だって、カガリの屋敷ではやはり不安じゃない？ クジヨウの体調も不安定だし、ここにいた方が何時でも診察が出来るもの。それに、クマガヤが万が一クジヨウに興味を持っても、東方の屯所にいれば手出し出来ないわ」

「……それもそうだな」沈黙の後、ぼそりとシンカゲが言った。

「クジヨウも、それでいいでしょう？」顔を振り向けられてクジヨウは言葉に詰まる。まだ頭がリラの言葉に追いつかない。一体眠っている間に、何があったのだろう。起きてみれば、頑なに秘していた秘密は暴かれ——おまけにリラは随分と前からクジヨウが岐であることに気付いていたと言う。そしていつの間にかリュウドウに留まることが定められつつある。漸くクジヨウは言った。

「でも、俺はリュウドウを出るつもりなんだ」

シンカゲとスイレンはとうにクジヨウが逃げようとしたことに気付いているだろう。後ろめたさに、クジヨウは顔を伏せた。

「だめよ、クジヨウ。医療者としてそれは認められません。体の不調のこと、私が気付かないわけがないでしょう？ そんなに不安定な状態で出て行って、途中で覚醒でもしたらどうするつもりなの？

無関係な人を巻き込んでもいいの？」

益々クジヨウは答えに詰まる。一体リラはどれ程のことに気付いているのだろうか。

体の奥に生まれた熱が、魄の力であることはもはや疑いはないが、耳飾りがあれば覚醒が抑えられると、クジヨウはいまだ縋るように信じていた。それでも危険であることには変わらない。確かに旅の途中で覚醒することは避けたいが、そもそもリュウドウにいても等分に覚醒の危険はある。むしろこのような街で覚醒した方が被害は大きい——そう思ったが、リラの厳しい眼差しに思いは言葉になる前に縮こまってしまふ。

何とか言葉を押し出すが、自分でもまるで叱られた子どものように情けない口調に思えた。

「大丈夫だよ。俺は覚醒はしない」

「どうしてそう言い切れるの？」クジヨウは緩く頭を振った。その拒絶に、リラは柔らかく笑むと、クジヨウの腕をさするようにして撫でた。

「今日は休んで、そして明日また話しましょう。体のこと、クジヨウもきつとわからないことが多い筈よ。そういう時は本職の者に任せなさい」

リラは寝台から離れると、戸口の三人を振り返った。

「何か話したいことはある？ ただし、あまりクジヨウに負担をかけては駄目よ」

言われた三人は戸惑ったように顔を見合わせた。スイレンが煮え切らない男達を睨みつけると、寝台に近付く。己を見上げるクジヨウに仏頂面で告げた。

「逃げようとしたことだが、カガリには伝えていないよ。クジヨウにも色々と事情がありそうだしね。ただし、今後逃げようとしたら承知しないからね」言いながら、きらりと眼が光る。どこか可笑しそうに笑みを浮かべて続けた。

「明日から兵士達がクジヨウにどう接するか見物だね。クジヨウが女だということが、取り調べの過程で屯所の連中にも広まってしまったからね。まあ、心しておきな」

「そんな……」思わず声を上げるクジヨウを尻目に、スイレンは素知らぬ風で医療所を出て行ってしまう。ムラセがそんなスイレンに苦笑し、クジヨウへと近付いて来た。柔らかな眼差しにクジヨウは目を瞬く。

「クジヨウ、男だろうが女だろうが、クジヨウはクジヨウだからね。今までどおりでいいんだよ」

包み込むように穏やかなムラセの言葉だった。ムラセの背後で何やらシンカゲが毒づいたようだったが、生憎とクジヨウには聞こえなかった。

「ゆっくり休むんだよ」そう言うと、ムラセもまた医療所の戸口へと向かう。どこか慚然とした表情のシンカゲの肩を一つ叩き、ムラセは廊下へと出て行った。

残されたシンカゲは、躊躇うようにクジヨウを見詰めている。クジヨウはもそもそと体を動かして、寝台に寄り掛かるように座りなおした。中途半端な姿勢が、力の抜けた体に辛く感じ始めていたのだ。シンカゲは不意にがしと頭をかき——それが困った時のシンカゲの癖であることにクジヨウは気付いていた——椅子を掴み寝台の傍らに置くと、腰をおろした。クジヨウの目を見詰めて言う。

「今度リユウドウから逃げたいと思ったら、俺にちゃんと行ってほしい。今回のように突然いなくならないでくれ。俺はクジヨウに自由を返す。この気持ちに嘘はない。俺をもう少し信じてくれ」

無理かもしれないが、と小声で付け加える。それに、クジヨウは俯き頭を振った。唇を噛み締める。涙が零れそうだった。

「それから、昨日の夜、俺の家族が魄に殺されたと言ったが、それはあくまでも俺個人の問題だ。もしかしてリュウドウを去ろうとしたのが俺の言葉のせいもあるなら、俺の家族のことはクジヨウには何の関わりも責任もないことだ」

クジヨウは何も言うことが出来なかった。地下で男への怒りをあらわにしたシンカゲの顔が、再び脳裏に浮かぶ。あの時何故あれ程恐怖を感じたのか、クジヨウは漸く理解していた。魄を憎むシンカゲが、クジヨウが岐であると知った時、あのような表情を向けるのではないかと――それがただひたすらに怖かったのだ。今も、まだ恐れている。クジヨウにはシンカゲが魄への憎しみを依然として抱いていることがわかった。抑えた口調に、秘めた気持ちが滲んでいた。

シンカゲの声音が低くなった。

「今回の一件は、全て俺のせいだ。北方の連中が俺を狙っていることを知りながら、例えば奴らが何か仕掛けてきてもどうにかなると高を括っていた。事前に対処をしなかった俺の落ち度だ。巻き込んで本当にすまない」

言うや、シンカゲは頭を下げた。膝の上でシンカゲの拳に力が込められるのを、クジヨウは見詰める。

「シンカゲのせいじゃないよ。俺が迂闊だったんだ。あの時、他に気を取られて、男達に気付くことが出来なかった」

声が震えないよう、注意深く言う。シンカゲは頭を上げると、強い眼差しを向けた。

「それから、この先、このようなことが万が一あったら、自分を守ることを最優先にしてくれ。俺のために自分を犠牲にするような真似はやめてくれ」

「別に犠牲になんか……」

「捕えた男達から聞いた話では、クジヨウは挑発的な言葉を相手に言っていたらしいな。敢えて相手を怒らせて、奴らの俺への怒りを自分に向けようとしたんじゃないのか？」

「……」

「今回は蠱を送ってくれたから良かったが、間に合わなければどうなっていたか」

蠱は送っていないと、クジヨウは言えなかった。深い意識の底でシンカゲに助けを求めたかもしれないなどと、言えよう筈もないではないか。こうしてシンカゲと対しているだけで、涙が零れそうになる――その気持ちを気取られなくなかった。

五人の男達をあつという間にのしたシンカゲの姿を思い出し、クジヨウは肩を落とした。ただシンカゲを呼び出させてはいけないという、その一心だったが、結局シンカゲに救われることになった。シンカゲの厳しい表情に、唇を噛み締める。地下で感じた無力感が、またも込み上げてきた。

「そうだよな。結局、俺には何も出来なかった」

「クジヨウ、そういうことを言っているんじゃない。今回のようなことがまたあつたら、俺の心臓がもたない」

「うん、ごめん。迷惑をかけて」

「だからだな……そういうことではないんだ」

シンカゲの声音に混じる困ったような響きに、ではどうということだろう、とクジヨウは顔を上げた。シンカゲは言葉を探しあぐねるように視線を彷徨わせ、小さく溜息をついた。

「とにかく、あんな思いは二度としたくない」

それだけを言うと、シンカゲは立ち上がった。クジヨウの眼差しに僅かに気まずそうな様子を見せ、シンカゲは足早に医療所を出て行った。その背中を見詰めていたクジヨウは、傍らから響いた笑い声に視線を転じた。何が可笑しいのか、リラが楽し気に笑っている。「どうしたんですか？」

きょとんとして問うたクジヨウに、「何でもないわ」と一言、いまだ笑みを滲ませながら続けた。

「さ、もう寝なさい。私は隣りの寝台で寝るから、何か辛く感じたら呼んでちょうだいね」

気にかかることがあまりに多過ぎてこのまま眠る気にはなれなかったが、クジヨウはおとなしく頷いた。そして横になって暫くすると、体の欲求に抗えず、混乱の渦の中から夢も見ぬ深い眠りに落ちて行った。

明日クジヨウの体のことについて話をしようという、リラの言葉は果たされなかった。クジヨウが二日、一度も目を覚まさずに眠り続けたからである。医療所では他の兵士の目があるため、クジヨウは医療所の隣りにあるリラの居室へと移された。

「心配ないわ。眠ることで消耗した体を癒そうとしているのよ」というのがリラの言葉である。シンカゲはそれを信じるしかなかった。シンカゲ自身はクジヨウを置いて屋敷に帰る気にもなれず、結局は屯所の宿所で寝泊まりすることになった。

シンカゲにとってその二日間は気持ちの整理のためにむしろ良かったと言える。クジヨウが岐^きであるという、その事実を受け入れる時間だけは十分にあった。

眠り続けたクジヨウは、三日目に漸く目を覚ました。そのことを、シンカゲは朝一番に医療所に顔を出して知った。

「リラ、クジヨウの様子はどうか？」まだ眠ったままだ、という昨日同様の言葉を予想していたシンカゲだったが、リラの答えは違った。

「裏の畑に薬草を摘みに行っているわよ」

「目覚めたのか!？」一拍置いて問うたシンカゲに、リラはにこりと笑って頷く。あたふたとしながら、シンカゲは矢継ぎ早に続けた。「何時目覚めたんだ？　しかも薬草を摘みになど、そのようなことをしていいのか？　いきなり動くなんて……」

「目覚めたのは明け方よ。すぐに動くのはどうかと思ったんだけど、体が大分楽になったとかで、寝ているとかえって落ち着かないと言ふのよ。確かに睡眠は十分にとれたわね」

そういう問題だろうか、と思うシンカゲである。なおも言い募ろうとして、シンカゲは背後から響いた声に言葉を呑み込んだ。

「シンカゲ」ただそれだけの呼びかけに鼓動が跳ねた。振り返る。

医療所の戸口に、薬草が入った籠を抱えたクジヨウの姿があった。髪を一つに束ね、飾り気のない医療兵士の衣服を纏っている。シンカゲは咄嗟に言葉が出なかった。クジヨウも言葉を選びかねているのか、困ったような表情でシンカゲを見詰めている。

「……もう、体は大丈夫なのか？」

「うん」

沈黙が落ちる。シンカゲはもどかしさに歯噛みする。もつと伝えたい気持ちがあるように思う。だが、それはあまりに捉え所がなく、言葉にならないまま溶けてしまう。

「クジヨウ、薬草をこちらに持ってきてちょうだい」

リラの声に、クジヨウは僅かにほっとした様子を見せた。籠をリラに差し出すと、リラは「ありがとう」と一つ頷いた。リラはシンカゲを見やり楽し気に笑った。

「そんなところに突っ立っていないで、ここに座りなさいな。まだ鍛錬が始まるまで時間はあるんでしょう？　クジヨウの作業を手伝ってあげて」

シンカゲは指示されるままに椅子に座る。リラは「じゃあ、私はクジヨウが目覚めたことをスイレンに知らせに行くわね」と一言、医療所から出て行った。意図的に二人きりにされた気がしてならないシンカゲである。シンカゲは傍らに座るクジヨウを見やった。クジヨウが素早く眼差しをシンカゲから逸らす。それにシンカゲの胸の奥がざわめいた。

気まずい沈黙を、シンカゲは破る。

「で、何をすればいいんだ？」

「なるべく形を壊さないように葉を茎から千切るんだ」

言いながら、クジヨウが見本を示す。爪程の大きさの葉を器用に茎から千切り、器に入れていく。繊細な指先の動きを見詰め、シンカゲも見よう見まねで作業をはじめるが、こちらはクジヨウのようにはいかない。簡単なようでいて、柔らかい小さな葉は力を少し込めただけで破れてしまう。茎も細く、手に持てばいかにも頼りない

感触だった。暫く無言で小さな葉と格闘し、シンカゲは漸く問うた。
「本当にもう大丈夫なのか？」

「うん」

「リラは体の回復のために眠っているんだと言っていたが、あのよう
に眠り続けることはよくあるのか？」

これにクジヨウは首を振る。「俺もこんなことはじめてだ。そ
んなに眠った感覚じゃなかったから、リラに聞いて驚いた」

どこか沈んだ口調だった。クジヨウ自身が体への不安を覚えてい
る筈だというリラの言葉を思い出し、シンカゲはつとめて明るい
声を出した。

「いつ目覚めるかと、あのスイレンでさえ気にしていた。口ではど
うこう言いながら、クジヨウのことを案じているんだ」

「そうか……スイレンが」言いながら、クジヨウが仄かに笑みを浮
かべる。それを横目に見て、シンカゲの胸中が再び揺れた。

「リラから、シンカゲも案じてくれていたと聞いた」

クジヨウがつと眼差しをシンカゲに向けた。真直ぐに見詰められ
てシンカゲは言葉を忘れる。だがそれも束の間、すぐに逸らされた
視線にシンカゲが感じたのは、もやもやとした惑いだった。それは
微かに熱を帯びる。

「ありがとう」ぽつりとクジヨウが言った。「助けてくれたお礼を、
まだシンカゲに言っていないかった」

「俺のせいであんな目にあつたのに、礼なんて言わなくていい」

「あの時……」ふとクジヨウが言葉を途切らせた。「地下でシンカ
ゲの声が聞こえた気がした」

呟くような声だった。シンカゲの問う眼差しに、クジヨウは「何
でもない」と小さく頭を振る。

「考えてみれば、シンカゲに助けられたのは三度目だ」

「三度？ 二度じゃないのか？」

今回の一件と、ハザカイの森で起こった変動の時と――
「それから、スイレンからも助けてくれた」

そういえば、とシンカゲは思い当たる。スイレンははじめクジヨウを殺そうとしていたのだ。スイレンが任務のためとあらばどこまで非情になれるか、シンカゲは知っている。クジヨウをリュウドウに連れて来るといふことも、一か八かの危ない賭けだった。

今もまだ——そう思い、シンカゲは暗い物思いに捕われる。スイレンの態度から、クジヨウに対してはじめのような警戒や敵愾心を抱いているとは思えない。むしろクジヨウのことを気に入ってすらいるだろう。だが、カガリの意向とあらばどうなるかわからない。

それに加え、新たな懸念があった。

——このままでは、遠からずクジヨウは命を落とすことになるかもしれない。

リラの言葉を思い出し、シンカゲはクジヨウを見詰めた。本当に体は大丈夫なのだろうか。クジヨウは自身の痛みに対して無頓着なところがある。口に出さないだけで、実際には辛い思いをしているのではないだろうか。

「シンカゲ？」問われて、シンカゲは我に返る。クジヨウの瞳が向けられていた。

「いや……ハザカイで、よく俺達の依頼を受けたな、と思って」咄嗟に、シンカゲは言う。だが、それは実際に長く彼が抱いていた疑問でもあった。この際、とばかりに続けて問うた。「いくら蟲使いとしての経験が浅くても、俺達のことをあやしいと思わなかったか？」

クジヨウはゆっくりと瞬いた。過去へと思いを馳せているのか、小さく首を傾げる。

「確かに……少し変わった二人だと思ったけど。でも森に吞まれた人がいるのなら、そんなことは言っていられない。特にあの時の変動は大きかったから」

当然のことだ、という口調に、シンカゲは内心で恥じ入る。クジヨウには打算など欠片もない。森に吞まれた人を助ける、それが全てだったのだろう。

「それに、多分俺の方が多く嘘をついているから」囁くような声音だった。

「嘘？」

「俺はシンカゲ達に幾つも嘘をついている。あの時、蠱使いの修行を終えたばかりだと言ったけど、あれも嘘だ。実際にはもう何年も蠱使いとして森を渡り歩いている」

「そうなのか」

シンカゲの声に籠る驚きに、クジヨウは苦く笑った。

「蠱使いとして旅を続けて、もう八年になる」

八年——シンカゲは絶句する。クジヨウの年恰好からすると、十歳になる以前から蠱使いとして旅をしていた、ということになる。だが、クジヨウは岐だ。人と同じように考えてよいのか、シンカゲにはわからなかった。ぼつりと問う。

「たった一人で？」

「ああ。ずっと一人だった。色々な場所に行ったけど、いつも通り過ぎるだけだったな」

と、クジヨウの肩に蠱があらわれた。抗議するように鋭い鳴き声をあげる。

「もちろん、蠱がいつも一緒にいたけど」

クジヨウがふわりと笑い、優しく細められた瞳に睫が濃い影を落とした。

「まだ他にも嘘があるのか？」

思わず問うたシンカゲに、クジヨウは寂し気に笑った。

「たくさん。でもどこまでが嘘で、どこまでが本当か、今となっては俺にもわからないんだ。本当の自分なんてもうどこにもいないのかもしれない」

まるでクジヨウという存在そのものが偽りであるかのように。

シンカゲの中で何かが揺れた。熱い思いが込み上げる。クジヨウの、逃げるように伏せられた眼差しがもどかしい。その体を引き寄せ腕の中に閉じ込めて、月の光を集めたような瞳をただ己にだけ向

けさせたいと思う。確かにそこに在るのだと、互いの体温が溶け合う程に――

突然の衝動に鼓動が揺さぶられる。

（何を馬鹿なことを……！）

だが、衝動を打ち消そうとすればするほど、思いは歯止めがきかない。無防備に晒されたクジヨウのすんなりとした首筋が目についた。手を伸ばせば、苦もなくその華奢な体を腕の中に捕えることが出来るだろう。地下でクジヨウを抱き上げた時の体の温もりまでもが思い出されて、シンカゲは慌ててクジヨウから目を逸らした。

シンカゲは手元の作業に意識を集中する。鮮やかな緑の葉を千切り、また千切りしているうちに、心持は大分落ち着いてきた。衝動が一時の気紛れだと思える程に――そして、気紛れにしては生々しく、気の迷いにしても誰かに対して今まで一度もそのような思いに駆られたことがないと自覚する程に。

やがて廊下の先から響いて来た足音にシンカゲは安堵とともに僅かな落胆を感じた。二人きりの静けさ、そこにあるのは気まずさだけではない。手を触れればたちどころに溶けて消える雪の結晶のように、ほろ苦い甘さがある。

戸口にあらわれたのはムラセだった。「目が覚めたんだね」気安いムラセの言葉に、クジヨウが小さく頷いた。微かな笑み――シンカゲには見せなかったそれだ。落胆の度合いが広がる。それには気付かぬ振りで、シンカゲはムラセが腕に抱えた荷物に目をやった。布に包まれ、結構な大きさである。

「何だそれは？」

「シンカゲへの預かり物だ。さっき門のところでアウユキに渡された。着替える衣服が必要だろうとわざわざ持って来たみたいだね」

この二日屋敷には帰っていないが、シンカゲが屯所に入り浸って数日屋敷を空けることはそう珍しいことではない。しかしアウユキがこのようなことをするのは初めてだった。不審に思いながらもシンカゲは差し出された荷物を受け取る。広げてみると、シンカゲだ

けではなくクジヨウの分の衣服も入っていた。それに、クジヨウが驚いた表情を見せた。

「アワユキは何か言っていたか？」

「ああ、今は冷静になれないからシンカゲには会わない、とね」ムラセがあつさりと言う。シンカゲは複雑な心境に陥った。自分の気持ち伝えてから、アワユキとはまともに顔を合わせていない。

「それで、シンカゲに聞いてほしいと頼まれた。シンカゲとクジヨウが屋敷に帰るのはいつか、カガリも気にしているらしい」

「今日中には一度帰るが、クジヨウも俺も当分は屯所で寝泊まりすると言っておいてくれ」

「どうもアワユキに伝えるのは気が進まないな……」

苦笑を含んだムラセの呟きだった。

「すまんが、頼む」シンカゲの言葉にムラセは仕方ないとも言つように肩を竦め、医療所を出て行った。

「心配しなくても、もう黙って逃げたりしない」そつと、傍らでクジヨウが言った。

「ああ。でもカガリのことだ。それでも言っておかないと承知しないだろう」

無論、クジヨウが屯所に身を寄せることをカガリが了承するとは思えないが、こうなつては無理矢理にでも認めさせるしかない。シンカゲがともにいれば言い訳もたつだろう。少なくとも、カガリは監視役としてのシンカゲを信頼している。

「こんな風に互いの自由を縛ることになるなら、ハザカイで出会わない方がよかったね」

ぽつりとクジヨウが呟いた。その言葉がシンカゲの胸の奥に喰い込む。その痛みに、シンカゲは束の間手を止めた。

「俺は、クジヨウに自由を返すまでは傍にいろと決めた。別に自分の自由を犠牲にしているわけじゃない」

思いの外素気なく響いた己の声に、シンカゲはクジヨウを見ることが出来ない。心の底からの思いを言つたつもりだったが、舌の先

に偽りの味があつた。少し前までの真実——だが、そこに今までにはなかった惑いがある。地下でクジヨウを抱き上げた時に感じた狂おしいまでの思ひは、いまだに胸の奥で燻っている。それが何か、シンカゲは敢えて考えないようにする。

考えてはいけない。気付いてはいけないのだ。その体を腕に捕え、二度と逃れられぬよう強く抱き締めていたいと——そう一瞬でも思つてしまったことを。例え自由を奪うことになろうともこのリュウドウに繋ぎ止めておきたいと、ほんの僅かでも心の底で願つてしまつたことを。

何が偽りで何が真実か——自由を返したいという思いに今も変わりはしない。対極にある思ひは偽りに過ぎない。そうである筈だし、そうでなければならぬ。

（クジヨウはいずれ魄^{はく}になる）

シンカゲは己に言い聞かせた。魄は人とは異なる命。そして魄と人が交われれば悲劇が生まれる。シンカゲ自身の過去に澱む魄への憎しみもまたその一つ——魄と人は決して相容れぬ存在なのだ。

朝の光の中で、静寂に沈む沈黙がシンカゲの鼓動を冷やしていく。だが、舌先に残る苦さは、何時までも溶けずに残つた。

ムラセは門まで引き返すと、道の向こうに立つアウユキへと手を振つた。白地に深い紅を重ねた衣を纏うアウユキの姿は一際華やかである。

「シンカゲは今日中に一度は屋敷に戻ると言っていたが、当分は屯所で寝泊まりするつもりらしい」

シンカゲの言葉を伝えると、アウユキの表情が険しくなる。

「クジヨウもそうなの？」

「リラの発案なんだ。クジヨウの体調がどうも優れなくてね、屯所にいれば何時でも診察が可能だということで、暫くは屯所で預かりたい、と」

「シンカゲはクジヨウのために屯所に留まる、ということなの？」

「さあ、そこまでは聞いていない」

「どうして聞いてくれないのよ」不満の籠ったアワユキの声音に、ムラセは苦笑を返した。

「それはアワユキ自身がシンカゲに聞くべきじゃないか？ 私にそこまで言われても困る」

アワユキは惘然とした表情でムラセを睨みつけたが、やがて小さく溜息をついた。

「確かにそうね。でも今会つと嫌なことしか言えない気がするのよ」「だから会わない？」

ムラセの問いに答えず、アワユキは緩やかに波打つ艶やかな髪を一房指先でいじりながら朱唇をすぼめる。

「知らないようだから言っておくけど、あのクジヨウって子、男の子じゃないわよ。女よ」

「知っているよ」

アワユキは目を睜り、ムラセを見上げた。何かを言いかけ、息を呑む。囁くように問うた。

「シンカゲも知っているの？」

「ああ、少し前からね」アワユキが唇を噛み締めるのを見詰め、ムラセは問うた。「どうしてクジヨウが女性だと？ クジヨウは自分からは決して言わないだろう？」

「わかるに決まっているじゃない。同じ男を好きなんだから」

潜めた声に鋭い響きが籠っている。どうにも言葉足らずだが、ムラセにはそれで十分通じた。

「なるほどねえ」思わず呟くとアワユキが陰悪に睨みつけてくる。ムラセはどこ吹く風で、今思いついたように言う。

「そういえば、アワユキは何故クジヨウがカガリの屋敷に逗留しているか知っているかい？ 何か事情がありそうだね」

自然に問いかけたつもりだったが、アワユキの瞳が細められた。陰を含みながらも蠱惑的な笑みがアワユキの顔を彩る。

「知らないわ。お兄様もシンカゲも、私には何も教えてくれないもの。それに、もし知っていてもあなたには絶対に教えない」

「それはまた何故」

「あなたが嫌いだからよ」

ムラセは目を瞬いた。これはまた何とも直截な言葉である。シンカゲと親しくしている間柄、アワユキと対することは何度もあったが、嫌われているとはついぞ気付かなかった。

「私は君に嫌われるようなことをしたかな？」

「別に。でもあなたは私と似ているような気がするから嫌いよ」素気なくアワユキは言う。

「私は君ほど我儘ではないよ」

「そうかしら？ 隠すのが上手なだけでしょう？ 穏やかに見せかけて全部計算ずく。狡猾で、貪欲で、心の中ではいつも相手の弱みを探してるの」

「それはまたえらい言われようだな」

「あら、当たっていないかしら？ あなたの笑顔は曲者だけど、私にはわかるわよ。あなただって私と同じよ。目の前に欲しいものがあれば、きつと我慢が出来ないわ。どんな手を使っても自分のものにしようとする、そんな人間よ」

きつぱりと断定して、アワユキはつんと顎を上げた。

「私は隠していないだけ。その点、あなたよりはましね」言うや、アワユキは振り返りもせず去って行く。

ムラセは呆気にと取られてその背を見やる。怒りは湧かなかった。どうにも八つ当たりの対象にされたとは思えないのだが、アワユキの立場を考えれば、言葉を刺で覆わずにはいられない、その心情もわからなくはない。

それに、とムラセは苦笑を浮かべる。アワユキの言葉はあながち的外れではない。シンカゲなどは何事も真正面から受け止める性質だが、ムラセは常に物事の背後にあるものを考える。己が表に出す態度と、内に秘める思いとが、時にかき離れたものであることを知

っているからこそその習性だと、そういう自覚はあった。

ムラセの穏やかな態度は、内心を悟らせずに相手の思惑を秤にかけ、そしてそうと知られずに自分の望みを相手に通すための一つの手段でもある。狡猾と言われれば、その通りだろう。感情を躊躇いもなく出すアワユキとは対照的だが、何よりも自己本位であるという点ではいい勝負かもしれない。アワユキがムラセを嫌っているならば、どこかで己自身に対する嫌悪があるのだろうか。

（だからこそ、正反対の相手に焦がれるんだろうね）

心の内でアワユキに呼びかける。言えば、また睨まれるのだろうが――。

ムラセは束の間浮かべた皮肉な笑みを穏やかな表情の下に隠し、屯所の中へと戻った。

24（後書き）

気がそぞろでなかなか書けず、少し間があきました。

今回あたりからシンカゲに漸く火がついたか？ という感じで。

クジヨウのことを少年だと思い続けていたら絶対にいつまでたっても恋愛感情なんて持たないので、予定より早く女性（今のところ完全な女性ではないですが……）だとわかる設定にしたのですが、それでもなかなか進展せず。でも恋愛ものを銘打っているのですから、少しは熱くしていきたいものです。

ではでは、今後ともよろしくお願いいたします！

「クジヨウ、あなたの体について話をさせてちょうだい」

リラからそう切り出された時、クジヨウは冷静にその言葉を受け止めた。目覚めた日の夜のことである。屯所に住み込む形で常駐しているリラの居室で、クジヨウはリラとスイレンに向き合って座っていた。目の前の卓には淹れたばかりの茶が、柔らかに湯気をくゆらせている。クジヨウに配慮してか、シンカゲとムラセは同席していない。

「まず聞きたいのだけれど、この前怪我が消えたことについて、あなたは本当に何も覚えていないのね？」

それにクジヨウは頷いた。だが、何故怪我が消えたのか、その推測はついている。リラの表情から、彼女も同じ考えでいることがわかった。

「おそらく、怪我を治したのはあなたの中にある魄はくの力なのでしょうね」

答えず、クジヨウはリラを見やる。懸念するようなりラの瞳の色。リラの隣りで、スイレンが茶器を手で弄びながら、感情の読めぬ眼差しをクジヨウに注いでいた。

「クジヨウ、魄の力はいつから？」

「……多分、武術大会の少し前からだと思います。体の奥に熱の塊のようなものが生まれたのは。魄の力だと、はじめは思いませんでしたけど……」

「この前、リュウドウを出て行こうとしたのはそのせい？」

「それもあります」

「他にはどんな理由があるんだ」

スイレンの声音は鋭い。言い逃れを許さぬ強い眼差しを、クジヨウは見返した。

「俺はあまり人と深く関わりたくはないんです。同じ地に留まり続

ければ、いずれ岐^きであることが周囲にばれる危険が高まりますから」
「そうであつてもせめてシンカゲには去ることを告げるべきだったな。そうすれば、北方^{きたかた}の連中につけこまれるようなことにもならなかっただろうね」

返す言葉もなくクジヨウは黙る。シンカゲに告げることなど出来なかった。シンカゲならば引き留めなかっただろう。協力すらしたかもしれない。そして、リュウドウを去ればもう二度と会うことはあるまい。その別れを、躊躇いもなく受け入れるだろうシンカゲを見たくはなかった。

——愚かしい。

クジヨウは心の奥底で己を嘲笑う。

「ねえ、クジヨウ。私が聞いた話では岐は覚醒するまで、何の力も有さないということだったけれど、このようなことはあるのかしらつまり、岐のまま魄の力があらわれる、ということが」

クジヨウは僅かに俯く。恐れていたこと——魄に覚醒する、というそれが、生々しく身に迫る。リラがいくら優れた医療者であつても、あくまでも人を癒す立場である。彼女に出来ることは何もない。そう思いながらも、クジヨウは口を開いていた。

「岐のうちに魄の力があらわれることはありません。今の俺のように、魄の力が生まれること自体、普通ならばあり得ないことだと思つています。ただ……俺は魄が実際どのような存在か、あまりわかつてはいないんです。岐のことさえ……今まで、他の岐とは会つたことがないので……」

「一度もないのか？」クジヨウはスイレンを見やり、頷く。

「魄にしても俺が知っているのは母親だけです。母が死んでからは一人で蠱^こ使いとして旅をしてきましたが、森の外で生きる魄や岐に会つたことはありません」

スイレンは「そうか」と呟くように言うと、茶をすすった。それはまるで苦々しく歪んだ口元を隠そうとするかのような動作だった。「例え他の魄や岐のことは知らなくても、あなたは覚醒の危険のこ

とは十分に知っているでしょう？ でもあなたは森に入ることではなく、ずっと旅を続けていた。それは何故かしら？ この前、魄には覚醒しないと、そう言っていたけれど、何故そう言い切ることが出来るの？」

そつとリラが問う。やはりリラはクジヨウが思う以上にクジヨウのことをわかつているのだ。その思いを新たにしながら、クジヨウは夜の底に沈む玻璃の向こうを見詰めた。

幾夜も、闇の中で蠱とともに眠りについた。人の灯す明かりが、時に泣きたい程に懐かしく感じたこともある。そして時に目にするだけで恐ろしいと感じたことも。今、小さな部屋で温かな灯が作り出す光に包まれて、クジヨウはほんの僅か、哀しかった。一時でも感じてしまった温かさが、胸の内に凍る全てを溶かそうとしている。だが、その温かさとして、何時かは失うことになる。

——人と魄は決してともに生きてはいけないから。

遠く、小さな囁きが聞こえた。

「母親が死んだのは今から八年前のことです」

ぼつりとクジヨウは言った。左手で髪をかき上げる。耳朶を穿つ黒く小さな耳飾りを光のもとに晒し、クジヨウは続けた。

「この耳飾りは母が死ぬ前に、体の内に残った魄の力の全てを込めて俺のために作りました。岐のまま体の成長を止め、何時か生まれる魄の力を抑えて覚醒をしないための封印です」

リラの顔が驚きに染まる。クジヨウは手をおろした。零れ落ちた髪が、視界の半ばを覆う。

「母は死ぬその時まで俺のことを案じていました。森の外に一人残されて万が一魄に覚醒した時どのようなことになるか……恐れたのだと思います。この耳飾りをしていれば、魄に覚醒することはありません」

クジヨウは眼差しを落とした。

「母が死んでから八年経ちましたが、耳飾りをつけたその頃から体はずっと変化していません」

クジヨウはリラの顔を見ることが出来ない。己がどれ程に歪な存在か、クジヨウはよくわかっていた。

「お母様はどうしてお亡くなりになったの？」

クジヨウは膝の上で拳を握り締める。忘れ得ない痛みが胸の奥を焦がした。

「母は……^{れん}聯である俺の父が死んでから六年間、一度も力の解放を行いませんでした」

それだけを言う。そしてリラにとってその言葉だけで十分だったことが、表情から読み取れた。力の解放を行わなければ、魄はやがて己の力により死に至る。

「森の奥には魄達が生きる里があると聞いているわ。そこに行こうとは思わなかったの？ 森の中ならば、力の解放を行うことが出来るでしょう」

「母は森の外で伴侶とともに生きることを選びました。父が死んだ後も、森の中に戻ることは考えていませんでした。力の解放を行わなかったのは……」

クジヨウは瞳を閉ざす。闇の奥に、焰のように熱が灯る。だが、涙は生まれない。とうの昔に流し尽くしてしまったのかもしれない。……おそらく、母は父の後を追いたかったのでしょう。魄として生きることに母は絶望していました。この世に在ることが……辛かったのだと思います」

囁きとなって言葉が零れ出る。その思いを口に出すのは初めてのことだった。深く封じ込め、目を逸らし続けた思いである。自らの力に命を削られながら、母親は最期の時までクジヨウのことを案じ続けた。しかし、娘を一人残して死んでいくことに迷いはなかったのだ。

「お父様のことを聞いてもいいかしら。どうして先にお亡くなりになったの？ 聯となった人は魄同様、長命の筈でしょう？」

「父は、母が魄だと知った人間に殺されました」

己の耳にも乾いた声音だった。クジヨウは眼差しを上げる。卓を

隔てて向かい合うリラとスイレンの姿が、薄暗がりの中で凝然と影を纏っている。

「母は何とかその人間から逃れましたが、魄が見つかったという噂は既に広まっていました。人の目を欺くために、母は俺に少年の振りをさせました。母の体が力に蝕まれて動かなくなるまで、二人で各地を流れましたが、母は父が殺された時点で既に生きる気力を失っていました。一度ならず、俺だけでも森の奥に住む魄の里へと向かうよう言われましたが、せめて最期まで母の傍にいたいと……」

母親が死んだ地は、リュウドウから遙かに遠い。撓められた時を隔てて、儚い面影が蘇る。母の死を看取ったことに悔いはなかった。あの時、母の言葉通りすぐにでも森の奥を目指していれば、蟲使いとして長く流離うこともなかったかもしれない。だが、例えそれを知っていても、同じ選択をしただろう。

「体の中で何故魄の力が生まれたのかはわかりませんが、耳飾りをしていれば、そう簡単には覚醒しない筈です」

「耳飾りの封印を解くことはできないのか？」

腕を組んだスイレンの眼差しは思案するように深い。

「解くことは出来ます。母は、己の未来は己で決めるように、と……。ですが、俺は封印を解く気はありません」

「解かないままではどうなるんだ」

「自然と命が尽きるまで、岐の体のまま生きていくのだと思います。体の成長は止まっても、命が刻む時は止まったわけではありませんから」

「それでいいの？ クジヨウ」

柔らかなリラの問いだった。責めるでもなく、同情するでもない、ただ案じる響きがあった。クジヨウは小さく頷いた。

「最近ずっと体が不調なのも、突然生まれた魄の力のせいなのでしょう？ 現にこうしてあなたの体の中で魄の力が目覚めてしまったのだから、今までのように抑えていくことは難しいんじゃないかしら。封印を解いて覚醒しなければ、あなたの体が魄の力に耐えられ

なくなる可能性もあるわ」

「魄は望むと望まざるとに関わらず、存在するだけで争いと混乱を引き起こします。俺は魄として覚醒するつもりはありません」

「魄でなくとも、あなたが岐であることを知れば、人はあなたを求めるわ。人の中で生きる限り、あなたには危険が付き纏う。森の奥ならば魄の力が害を及ぼすことはないでしょう？ このまま覚醒しなければ、あなたの体にどのような影響が出るかわからないのに、何故、魄の力を封印してまで人の世に留まるの？」

クジヨウは耳飾りに触れる。冷やかに硬い。真摯なりらの声音に、出かかっていた偽りの言葉が解ける。胸中に諦めにも似た思いが広がり、クジヨウは口元を歪めた。見る者にはさぞや歪な笑みと映るだろう。

「魄には魄の掟があります。母が森の外で生きていたのは、嘗てその掟を破り、森を追放されたせいです。母の子である俺にも、森の奥への道は開かれてはいません」

ほとりと、一つ真実をこぼし、クジヨウは口を閉ざした。

第七章

包み込むように温かな陽射しに、クジヨウはゆるゆると瞼をあけた。目の前に投げ出された己の手と、その指先に触れる草の鮮やかな緑——散り散りになっていた思考が集うにつれ、クジヨウは小さな混乱を覚える。

——ここは何処？

心の中の呟きは、しかし無意識に口から零れ出ていたのか、穏やかな声ひがしかたが答えた。

「東方の屯所だよ」

言葉がじわりと意識に沁みわたる。ああそうだ、とクジヨウは思った。ここは東方の屯所——ここはリュウドウ……ここは……。急速に意識が覚醒し、クジヨウは目を見開いた。

「漸く目を覚ましたね。夢でも見ていたのかい？」

再び響いた声に、クジヨウは慌てて身を起こした。声の主は、木の幹に身を預けるようにして座っている。クジヨウの動揺をどこかおかしげに見詰めながら、柔らかな笑みを浮かべていた。

「……ムラセ」囁きに近いクジヨウの声に、相手は首を傾げるようにして頷いた。

「いくら温かくても、こんなところで一人で転寝はしない方がいいよ。今は皆、クジヨウが女性だとわかっていているんだし、屯所の中とはいえ、何があるかわからないからね」

諭すように言われ、クジヨウは顔を赤らめた。リラの薬草畑に水を撒きに来て、その後の記憶が曖昧だった。何時の間に寝入ってしまったのか、クジヨウは戸惑う。辺りは木々が茂り、そう人目につく場所ではなかったが、確かにムラセが言う通りだった。何より、無防備に眠りこけていた自身に呆れる。

「でもまあ、君にはシンカゲがついているから、それを知りながら無体を働く者はいないと思うけど」

「そんなこと……」反射的に言い返して、クジヨウは言葉に詰まった。クジヨウが男ではないと知られてからも、屯所の人々の態度はさして変わらなかった。それが、常に傍にいるシンカゲの存在故であると、クジヨウも気付いていた。

胸の内で歪に軋む音がする。己が岐^きであると知られてから、クジヨウはシンカゲとまともに目をあわせられずにいた。シンカゲは変わらず優しくあったが、不自然なぎこちなさがあった。それが、頑なな己の態度のせいなのか、それともクジヨウが岐であると感じたシンカゲの戸惑いのせいなのか、クジヨウにはわからない。

「君達は本当に似た者同士だね」

ともすれば聞き逃しそうなムラセの呟きに、クジヨウは顔をあげた。吹きわたる風が光を斑に揺らし、クジヨウは軽い眩暈に襲われる。ムラセの手がクジヨウの視界を遮り、優しく髪に触れた。クジヨウは動くことが出来ない。思考が、体が、まるで己の意思と切り離されたかのように麻痺している。

「何時までもそんなだと、望むものを得ることなど出来ないよ」

ムラセはあっさりとクジヨウの髪を離れた。その指先に、髪に絡まっていたらしい、草が抓まれている。

「クジヨウ」

不意に響いた声に、クジヨウは身を震わせた。近付いて来る気配に、心音が僅かに上がる。答えるよりはやく、シンカゲが木立を抜けて姿をあらわした。

「……なんだ、ムラセもいたのか」

「なんだはないだろう」苦笑しながらムラセは立ち上がる。「どうかしたのか？」

「リラにクジヨウを捜すよう頼まれたんだ。なかなか戻らないと気にしていた」

「あ……ごめん」クジヨウは慌てて立ち上がる。

「私がクジヨウを引き留めていたんだよ。二人で話し込んでしまつてね」

同意を求めるように振り返ったムラセが、悪戯めいた笑みを浮かべる。自覚もなく眠りこけていたことは秘してくれるらしい。思わず苦笑して、クジヨウは曖昧に頷いた。

「何を話していたか知りたいだろう？」

ムラセの問いに、シンカゲがどこか憮然としたような表情を見せた。

「別に知りたくはない」

「素直じゃないな」ムラセがシンカゲの肩を小突く。何を、と小突き返すシンカゲの顔に、しかし険はなかった。じゃれ合うかのような気安い二人の姿をクジヨウは羨望の思いとともに見詰める。この温かい場所も、目の前の二人の姿も、まるで夢の中の出来事のようにクジヨウには思えた。

もしかすると、まだ夢から覚めていないのかもしれない。ふと、クジヨウは心許ない心地に陥った。何か大切なものを心の奥底に落としてきてしまったかのような。だが、それは掴むことも出来ぬ曖昧な感覚とともに、淡く消えていった。

「クジヨウ、行こう」振り向いたシンカゲの言葉に、クジヨウは小さく頷くと立ち上がった。ムラセがいまだ手に持っていたらしい草の欠片を風に流す。それは気付かれぬ程にほんの僅か、緑の匂いを風に流し、地面に落ちた。

スイレンは向かい合う男を、腕を組んで見詰めた。正しくは、睨みつけているのだが、相手はいつかな堪える風でもなく喰えない笑みを浮かべている。見慣れた笑みだったが、スイレンにはそれがひどく腹立たしく思えた。

「不機嫌だな」笑いを含む声に、スイレンは苦く息をついた。

「あんたは楽しそうだね、カガリ」

「まあな。私が楽しんでいると、昔からスイレンは不機嫌になる」カガリは言いながら、スイレンに椅子をすすめた。執務室は主の

好みを反映して、全体に装飾が少ない。実務を重視しながらも、家具はどれも高級さを感じさせた。椅子に座りながら、スイレンは広い部屋を見回した。スイレンがカガリの屋敷を訪れた回数はさほどない。

「偉くなつたもんだね」籠る皮肉に、男は片眉を器用にあげてみせた。

「身を粉にして働いているものでね」

「今の地位に満足と言うわけか。あんたが自由兵士をやめていなければ、今頃東方の頂点に立っていたかもしれないのに」

カガリは肩を竦めることでそれに応える。スイレンが覚えたのは苦い後悔だった。今更、男が選んだ道を詰ったところで意味は無い。十年以上も前に分かれた道は、今更交わることなどない。それがわかつていながら、いまだ未練を零す己がひどく腹立たしい。

「カガリ、いつまで今の状態を続けているつもり？」

「今の、とは？」

「わかつているだろう。クジヨウのことだよ」

「あの蠱使いのことはシンカゲに任せている。ラザンとの密約のことが漏れる危険性がないと判断出来れば、いずれ解放することも出来るだろう」

「あたしにまで偽りを言うつもり？」

何かを言いかける男を遮り、スイレンは続けた。

「あんたはもとよりクジヨウを自由にする気なんてないんだろう？」

ラザンの密約のことを知られていようがいまいが、あの場に居合わせた人間を、あんたが野放しにする筈がない」スイレンは拳を握り締める。「それなのに、何故シンカゲにクジヨウを預けたりした」「シンカゲならば、クジヨウが信用に足る人間か否か見極めることが出来るだろうと思つたからだ」

「本当にそう考えているのか？ 例え、クジヨウがラザンとの密約のことに気付いていたとしても、シンカゲにはクジヨウをどうこうすることは無理だ」

「シンカゲは俺に似ている。必要とあらば何をすべきか、わかっている」

「それはどうだろうね。シンカゲはカガリと違って甘い。それをあんたもよく知っているだろう」

スイレンはカガリを探り見る。

「シンカゲはクジヨウを守るつもりでいる。ハザカイでもそうだった。少しでも関わった者は殺す、そのためにあたしがハザカイへ送られたことも気付いていた。そのうえで、クジヨウを守ろうとしていた」

カガリの表情は動かない。なおも刻まれる笑みに、スイレンは苛立ちを覚える。

「はつきり聞かせてもうら。あんたは何か思惑があってクジヨウをシンカゲに預けているんじゃないの？」

「思惑？」

「ああ、そうだ。こんな中途半端なのはあんたららしくない」

カガリが一つ息をつくとき、軽い調子で言った。

「スイレ、あまり責めてくれるな。私もあの蠱使いの扱いには困っているんだ」

意想外の言葉にスイレは目を瞠る。

「ことは左程単純ではない。あの蠱使いを自由にしようにも、状況が許さない」

「どうということ？」

「私の足を掬いたい者にとって、あの蠱使いは格好の材料になり得るということだ」

スイレは無言で先を促した。

「ラザンとの密約は揺るがせに出来ない。だが、生憎と公議会の連中はどいつも互いの足を引っ張るのに夢中な者ばかりでな。密約ですらその駆け引きにされかねない。公議会の中には私の失墜を虎視眈々と狙っている者もいる。今回のハザカイでの一件を知れば、さぞかし嬉しかろうな」

ラザンとの密約はカガリが提唱した。最終的に密約は公議会により決議され、全権はカガリに任されることになった。だが、決定に至るまで、公議会が散々に荒れたことはスイレ็นも知っている。公議会の総意となっても、それは表向きのことではない。リュウドウの存続そのものに影響を与える大事であるだけに尚更、カガリを快く思わない者にとっては、小さな綻びの一つも利用する手段となるだろう。

「ハザカイでの一件は公議会にも伏せているだろうか？」

「ああ。だが、スイレ็นとシンカゲがリュウドウを出たことを、奴は気付いている。何があつたのかしきりに探ろうとしているからな。当然、シンカゲが蠱使いを連れ帰った時点で、蠱使いは目をつけられている」

奴、とぞんざいに言われた相手が誰であるか、スイレ็นにも見当がついた。公議会でカガリを目の敵にしている人物の筆頭はクマガヤである。クジヨウに害をなした北方きたかたの男を匿った相手だ。思わず舌打ちを漏らしそうになり、スイレ็นは堪えた。

「それならば尚更答えてもらいたい。何故、クジヨウをシンカゲに預けている」

「蠱使いを屋敷に閉じ込めていては、逆に注意をひく可能性がある。それに、シンカゲならば信頼が出来るからな」

「……本当にそれだけか？」

「私は余程スイレ็นに信じられていないようだな」

揶揄するように言われ、スイレ็นは気まずく目を逸らした。一筋縄でいかぬ男ではある。必要とあらば非情にもなってみせる。だがその性根が腐つたものではないことを、長年の付き合いの中で熟知してもいた。屯所と公議会という異なる組織に属し、利用し合い、牽制し合う関係となっても、スイレ็นはカガリの本質を疑ったことはなかった。

「わかったよ。あんたを信じよう。だけど……」

言い淀み、心を決める。責めるでもなく、乞うでもなく、込めら

れたのは静かな覚悟だった。

「もしもクジヨウの命を奪うと決めた時は、シンカゲには命じず、あたしに言ってほしい。あたしが、片をつける」

カガリは何故、と問うこともせず僅かに黙した。隠された男の心情を、スイレンは測ることが出来ないまま正面から見詰める。互いに抱く矜持も目指す場所も違う。嘗ては、身も心も、誰より男を近く感じた時もあったが、重ねた年月は確実に二人の距離を広げた。過去を惜しむ思いがないわけではないが、それでよいのだとも思う。今この時もまた、望み手に入れたものだ。

だが、シンカゲとクジヨウは違う。クジヨウがシンカゲに向ける眼差し、そしてクジヨウを守ろうとするシンカゲの思い、どちらもスイレンには眩しい。クジヨウが第三者の利欲や姦計の犠牲になるにせよ、せめて彼らの心と誓いを壊すようなことはしたくなかった。「わかった。その時は、スイレンに任せよう」

カガリの答えに、スイレンは頷いた。

第七章（後書き）

久々の更新です。少しとりとめのない内容になってしまいました。最近自分の文章が子どもっぽいきがしています。年齢を重ねれば、感性も変わる、ということかもしれません。新しい物語の構想もあります。書くにしてもこれまでと少し趣を変えていきたいと思っています。掲載できるかはわかりませんが……。

ではでは、今後ともよろしく願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7214n/>

魄、落つる

2011年8月22日03時19分発行